ISSN 0912-1382

成瀬記念館

2017

No.32

日本女子大学成瀬記念館

詳細は121頁

国際人教育の原点
―伝統の調理実習

2016年9月15日(木)-12月20日(火)

日本女子大学成瀬記念館

開館時間：10:00-16:30
（土曜日は12:00まで）

休館日　：日・月・祝休日

入館料　：無料

学校法人
日本女子大学

写真の料理はオーダーメイドの食品サンプルです

詳細は121頁

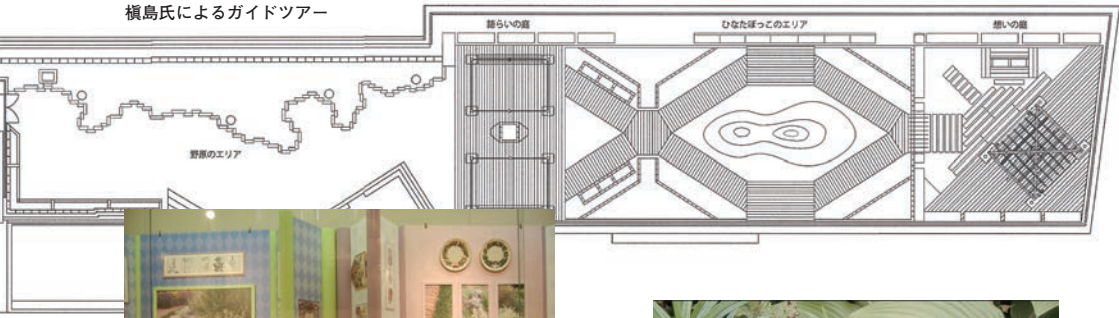
シリーズ“創る”(8)

庭を創る・庭を撮る

― 槇島みどり・高橋美保 二人展 ―

2017年1月17日(火)― 3月4日(土)

槇島氏によるガイドツアー



図録『時の庭』

成瀬記念館 2017

No.32

目次

表紙／カット・武藤良子

口絵
国際人教育の原点　―伝統の調理実習
庭を創る・庭を撮る　―槇島みどり・高橋美保二人展―

巻頭言
記憶への扉……大場　昌子……4

随想
食品サンプルの多様性……繁藤　和巳……6
「時の庭」二人展をおえて……槇島みどり……9
写真　あれこれ……高橋　美保……12
土倉翁と成瀬の夢―教育百年の計―……井上　信子……15

研究ノート
国際人教育の原点――伝統の調理実習……飯田　文子……19

新資料紹介
宮澤トシの「実践倫理」答案（その二）
―成瀬校長の思想を受けとめた学生たち―……山根　知子……29

特別寄稿
寅さんと健康保険……山田　洋次……49

資料紹介
梅花女学校教育日誌……片桐　芳雄……58
「女子教育之方針」「種子」……片桐　芳雄……63
成瀬仁蔵のアメリカ留学時代再考……大森　秀子……68

Bloom as a leader. 時代を切り拓く卒業生
児童文学者　石井桃子……永山由里絵……76

未発表資料38　成瀬仁蔵講話　1・2
正准会員会に於て　―明治四十五年六月二十三日―……92
歓迎会席上にて―　大正二年三月十五日―……99

研究
シカゴ大学所蔵　成瀬仁蔵史料について……辻　直人……119
二〇一六年度展示の記録（成瀬記念館／西生田記念室）……120
二〇一六年度活動の記録……123

記憶への扉

日本女子大学学長代行
成瀬記念館館長　大場昌子

折々に変わる成瀬記念館の展示を楽しみにしている。創立以来一一六年間という歳月が流れ、その間気の遠くなるような数の人々が本学と関わり、その関わりを記す史料が成瀬記念館に寄せられてきた。そうした膨大な史料を成瀬記念館がいわばプロデューサーとなって、様々な切り口から光を当てて、展示として本学の歴史のワンカットを見せてくれる。キャンパス内にあるにもかかわらず、ひとたび館内に入れば異なる時代空間にいるかのように、女子大に関わられた人々の息吹きに静かに浸ることができる。

最近の展示でとくに印象に残っているのが、目白キャンパスで二〇一四年一〇月から一二月、西生田キャンパスで二〇一五年九月から一二月にかけて開催された「戦時下の青春」展である。太平洋戦争中に学生時代を過ごした方々の、当時の生活の様子を伝える写真や、そうした状況下での思いを直筆で綴られた文書が展示されていて、一つ一つ拝読し、胸に迫るものがあった。加えて、思いがけず私の恩師が書かれた文書をその中に見つけ、授業では語られることのなかった先生の戦争への思いにそこで初めて触れさせていただいたのだった。

成瀬記念館には、展示のほかにも日常的に多くの仕事があるが、その一つを紹介しておきたい。非常勤講師を務めてくださっていた某大学の先生から、曾祖母が創立当初の本学で教鞭をとっていたらしいのだが何かわかるだろうか、との問い合わせをいただいたことがあった。さっそく成瀬記念館に

調査をお願いしたところ、その先生の曾祖母様が雑誌に書かれた記事があるとの連絡をいただいた。幸運にもその雑誌がマイクロフィッシュで本学図書館に所蔵されており、その雑誌の当該号を調べたところ、記事に辿り着けたのだった。依頼者が大変喜ばれたのは言うまでもないが、この件をきっかけに、その方が本学への関心を高められ、本学から離れた場所で日本女子大学をしばしば話題にしてくださったことは有難かった。成瀬記念館によれば、こうした問い合わせはよくあり、わざわざ記念館を訪ねてこられる方も少なくないとのことであった。教育・研究機関である日本女子大学という組織が、微視的には多くの人々の個々の歴史によって織り成されている事実を実感する機会であった。

このように、成瀬記念館が果たす役割は重要で、多岐にわたっている。二〇一九年は創立者成瀬仁蔵の没後一〇〇年に当たり、二〇二一年には創立一二〇周年を迎える。成瀬記念館がその活動において提示するものは、本学の在り方に今後ますます大きな示唆を与えてくれるに違いない。

二〇一七年六月

食品サンプルの多様性

繁藤　和巳

この度は成瀬記念館「国際人教育の原点―伝統の調理実習」展に、食品サンプルの活躍の場を与えて頂き誠に有難うございました。

さて、街中で誰もが目にする食品サンプルですが、いつから食品サンプルは存在するかご存知でしょうか。また、どうして飲食店になくてはならい物になったのかを併せて、説明させていただきます。当社の創業は古く、昭和七年になります。食品サンプルは百貨店の大型食堂の食券機導入により急速に発展してゆきます。当時の百貨店の大型食堂は流行の最先端であり、大人気で、常に大混雑であったようです。多くの人の注文を効率よく捌くにはと導入されたのが事前に料金を支払う食券機の導入でした。しかし、どんな料理が、どれくらいの量で、かついくらで、どんな盛りつけで、提供されるのかを一目でわからせられるものは現物見本を展示しておくしか解決策が無かったようです。

但し、毎日作るコックさんも大変です。大型食堂のメニュー数は豊富で、見本を作る時間もかかるし、本物の為、夏場などは長持ちしません。こうしてその解決策として登場したのが食品サンプルの始まりです。時代は変わり百貨店の大型食堂は姿を消したものの、外食産業の発展とともに食品サンプルは同じ役割を今日も継続しております。

次に、どのように、あんなに本物そっくりに作ることができるのだろうと不思議に思う方は大勢いらっしゃいます。正直企業秘密の部分も多いのですが、簡単に説明させていただきます。現物と同じように作ることが業務第一の使命ですが、おいしく魅せるには全て現物と一緒というわけにはいきません。形や量は絶対ではありますが、各部品の配置は全体の彩りを考えたりして並べております。当然ですが、現物支給時に偶然に隠れていた食材などもサンプルではきれいに個数もレシピ通りの数にて仕上げております。また、各部品もメイン食材なのかを考慮し作成しております。先程、形や量は絶対ですと述べましたが、これは現物見本の提供で大体が解決されるものであり、一番作成するのに苦労するのは色味であります。

今回展示での製作に当たり苦労した点と言えば、当時の料理の現物の作成が可能だった為、原型製作の必要も無く案外、想定内と製作現場からは聞いております。現物の移動や、

頂いた見本の型入れなど通常よりは苦労した点は確かにありました。色についても当時の再現性よりも、現物に忠実にということで指示内容も的確で有ったため無難に完納できたと思っております。

日本女子大学校創立当時から受け継がれてきた伝統のクリスマス料理の食品サンプルを納品したとのことで、実際にどんな風に展示してあるのだろうと拝見しました。確かに食品サンプルにより、復元は可能になって分かり易さには繋がったのではないかと感じました。それよりも数多くの卒業生の方が見られた際は、セピア色の残像だった風景が色鮮やかに蘇った瞬間ではなかったかと勝手に想像して喜んでおります。（通常のサンプルよりは色は地味目に制作しました。）

ようやく、本題に入れると思います。今回のような例は実は初めてではありません。

国立博物館、郷土博物館、水族館、民間の記念館など数々の食品サンプル導入実績がございます。極端な例ですが、「卑弥呼の食事」などいったい誰が監修したのだろうと不思議に思うもののもございます。古文書や文献などから導かれる無形の物を、有形に変える技術は、食品サンプルだからこそできるものと感じております。

また、その活躍の場は販売促進効果の一つとして食品会社からの依頼も増えて、量販店での完成料理の見本として売場に並べられたりしております。使用用途は増々拡大中であります。

さらに、栄養指導用食品サンプル（フードモデル）という分野も有ります。これは二次元の媒体と違い、具体的な量を示し触ることもできます。これにより、指導者にとっても、対象者にとっても相互に分かり易い栄養指導ツールとなっております。活躍の場は、病院、クリニックにおいての栄養指導。健康保険組合、保健センターにおいては保健指導。栄養士、管理栄養士養成学校では教育ツールとして拡大中です。

創業当時から食品サンプルはレストランの集客販促ツールとして長く道を歩んできました。そして当社は、

企業規模の割には数多くの拠点を設けてきました。なぜ設けたのかといいますと、売り上げ規模拡大が第一ですが、もう一つは、地域独自の食の保存という意味合いもありました。現在も東日本地区に拠点のない都道府県は一か所のみです（山梨県はありません）。食は地域性が非常に激しく反映されるものであります。事実、私が三多摩地区エリアを担当していた時代に、山梨県内にも営業していたころがあり「ほうとう」の食品サンプルをこれでもかというぐらい納品したのを覚えております。都内の営業所に異動して長いこととなりますが、一度も依頼されたことはありません。名称は同じでも中身が違うややこしい例もあります。お雑煮は典型的です。味も違えば、餅の形も、一緒に入れる具材も地域によって様相は変わります。

最近、地域の伝統行事が変化してきております。地方では過疎化により継承できなくなったとの理由もありますが、一番困る問題として、近所の苦情により中止、もしくは変化せざるを得なかったことが原因だと聞いております。祭囃子のない「盆踊り」、衛生面ばかりを気にして行う「餅つき」、優しい「なまはげ」。時代で形式は変わるものですが、あまりにも寂しい時代背景と感じます。

地域食も少しこの背景が到来している感じがします。百貨店の「大北海道展」、「全国駅弁大会」、「B級グルメ」など色々なイベントが行われていますが、地域食の圧倒的量には対応が追いつきません。また、現地の人も拡大志向はそれほどなく、現地に来たとき食べてもらえればいいくらいの感覚で作り続けてきているわけです。観光地として栄えていればいいのですが、人口減少の過疎化問題を抱える地域ではいつか自然淘汰されていくのかなと不安を感じます。

話は大きく変わりますが、料理は、東洋思想の陰陽五行説に大きく関わりが有り、「五味」（甘い、辛い、酸っぱい、苦い、しょっぱい）、「五法」（生、焼く、煮る、蒸す、揚げる）、「五色」（赤、黄、青、白、黒）などは大きく影響を受けております。陰陽五行説では、それぞれ万物は木、火、土、金、水、の五つの要素から成り立ち、「相生」「相剋」「比和」の関係性を持ち合せるといわれております。これを簡単にいうと、「日本には四季があり、季節によって食材や色、盛り付け、器などを替えて四季の変化を楽しみながら食事をする」というたとえで十分かと思います。

このような食に対する姿勢は、日本独特の文化と捉えております。海外では恐らく真似することのできな

い文化なのです。「美意識」の価値観を日本の食は、少なからず支えていると言っていいでしょう。

食品サンプル以外の展示品も多数拝見しました。非常に歴史ある「料理ノート」は食文化の継承と言えるのではないでしょうか。「伝統の調理実習」という言葉がまさにぴったりだった展示と感じております。貴校の長年の国際人教育の原点に料理があったこと、そして、「料理ノート」から当時の料理を再現できたことは当社の思いとも重なって非常に貴重な経験だったと、改めてお礼申し上げる次第です。

（株式会社岩崎　しげふじ　かずみ）

「時の庭」二人展をおえて

― 庭を創る・庭を撮る ―

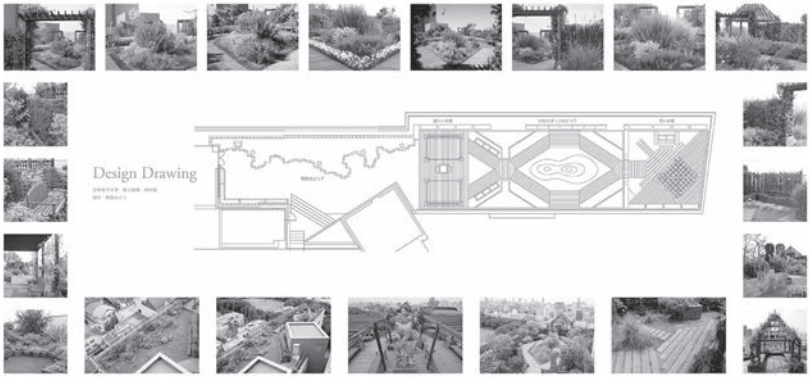
２０１７・１・17～３・４

槇島　みどり

百年館の屋上に何もなかった頃を久し振りに思い出しました。

何もない五〇〇㎡は広いようで狭く、狭いようで、実は広いのです。多くの人が訪れることを考えた場合とさまざまな要素をどのように盛り込もうかと思案している場合、そして、何から手を付けようかと悩むとき、面積の印象はまるで違って、計画への迷いが何度も押し寄せてきたものでした。結局、総合大学である母校の学部の特徴を、植物に内在する文化性を借りて散りばめることにしたのですけれど…文学、衣、食、住、福祉、医薬、などなど。

一般教室の並ぶ細長い建物の屋上庭園を一目で見渡せるものにしないためには、奥行き感や見え隠れの場の演出が大切です。いかにキョロキョロしてもらうか、なのですが、それについては、通路による視線誘導によって視界が展開し、拡がるように、と考えてみました。「一面の〇〇が見頃」と表現される風景をそもそも好ましいとは思っていませんので、四季折々に、あるいは先週と今週でさえ異なる発見があるような景を工夫したつもりです（写真１）。植物の個性を知って本来の魅力を引き出せればそれは可能です。葉色や花色による色彩のハーモニーをつくったり、互いの姿・形状を際立たせたり、香りを漂わせ、蝶を呼び、小鳥のさえずりに耳を澄ませてもらうことも。レイズドベッド（立ち上がり花壇）には香りや触り心地の異なる植物も揃えました。五感で楽し



（写真１）全体設計図

めるユニバーサルデザインの庭園をめざしたのです。香りを楽しむ目的で点在させているハーブの精油が、光あふれる風通しの良い屋上ではより効果的に働いて、薬剤散布をほぼせずに植物たちは健全に育っています。ちなみに、設計時にはいつも「光と風をデザイン」しようとを心がけています（写真２）。

ところで、私は「時の庭」と名付けて現在もそう呼んでいるのですが、そんな「泉フロートガーデン」へお運びくださったことはございましょうか。どのようにお感じいただけたでしょう。知人は「行ったことある」と言います。友人達は「何度も行ったわ。今度また違う季節に是非」と言ってくれます。

（写真２）

このたび成瀬記念館で「時の庭」紹介の機会を得、屋上庭園に興味を寄せてくださっていた写真家の高橋美保さんとご一緒して写真展を行えたことがたいへん幸せであったと、終わってみて今改めて感じています。光栄なことでしたがタイヘンでした。しなければならないことがありすぎました。いろいろ思い付く自分がいけないのです。自業自得です。プランやプロデュースの仕事柄いつものことですが、私に区切りをつけさせるのは結局、時間切れだけなのです。

設計者であるがゆえに客観性は二の次になりやすく、子供じみた自画自賛の傾向はこの年になっても治らず、あれもこれもココもソコも素敵、と欲張りになりがちで優柔不断な写真選び。展示の計画はしたものの、いつものことながら周囲の方々のお世話になり、さんざんお騒がせしてようやく会期に間に合い、今回もできあがったのです。で、とてもうれしかったのは、綺麗なものは誰が見てもやはりキレイで心地よく、美しいものはヒトの心を和ませるという当たり前のことが、確かな手ごたえとして確認できたことだったのです。（唯、それもやはり、訪れた方々の温かなお気持ちゆえのことなのでしょうけれど…）

この機会に魅力をお伝えしようと、ほぼ毎日会場へ。屋上を直接ご覧いただけないことが後押しにもなりました※。多くの方にわかってほしい、気付いてほしいと願ったのは、植物の多様性であり、芸術性やファッション性であり、周年を通して変化する美しさでした。手のかからない低木や宿根草を中心に、それらを『うつろうhana いろどるhana』としてパネルにしました（写真3）。ゆっくり見つめなおすきっかけが植物への興味へ、そしてファンも増えるかしら、と。

二階にはキッチンとリビングの一角を模したコーナーを設けて、ハーブを中心にヒトの暮らしに根付いた場面を表現し、江戸期や明治初期の古文書も展示しながら、古来日常に取り込まれていた植物の文化性を垣間見ていただきました。

緑の仕事は「作品が残らない」といわれることがあります。が、経年変化が風化よりむしろ劣化につながりがちな建築物とは異なります。生長は変化であり風情です。植物と付

（写真３）うつろうhana　いろどるhana

き合う日々の発見は風格を育てていく過程です。緑の空間に身を置き、共に過ごす楽しみを植物から受け取っていただければ幸いです。無理無駄のない姿をしている彼らは本当に綺麗なのですから。

（一九七五年家政学部
家政理学科Ⅱ（生物農芸）卒業
まきしま　みどり）

※百年館底層棟外壁工事のため、展示期間中泉フロートガーデンは立入が制限されていました。

写真　あれこれ

高橋　美保

（1）写真のあれこれを語ること

「時の庭」二人展の前に考えたこと、写真を撮っているとき頭に浮かんだこと、展覧会が終わって思うことなど、とりとめもなく写真について「あれこれ」考えることは、私のいつもの楽しみです。

二〇一五年夏、二人展をやると決まってから「一体やれるのかしら」と疑いました。私の写真に迷いが多く、発表したい作品はほんの数枚しかなくて、この先、一年間で準備できるだろうかと不安になりました。その当時考えたことは、「私はどんな花が撮りたいのか」、「私の花とは何なのか」でした。

とりあえず撮ることにしましたが、私の撮るスタイルは「あっ」と感じたり、じっと見ていると「面白い」とひらめいたら、すぐに撮るというスナップ的方法です。「時の庭」撮影では、三脚をおいて、風や光線の具合を待ったりしましたが、対象物に向かう時は、撮りたい気持ち以外、何も頭の中になく、カメラにおいた指の感覚だけに集中します。結果、ピントが合ったり露出が適正で「ヤッタ」、「コレデヨシ」と思う瞬間はとても幸せですが、うまくいかない時が圧倒的に多いのです。行きつ戻りつ、少しずつ出品できそうな気分になってきましたが、本当は

もっともっと撮り進みたい気持ちのまま、タイムアウト…

(2) 言葉による解説は必要かどうか

「写真は言葉で語れない」(ウィリアム・エグルストン)と言われるように、優れた写真は写像そのもので自分のメッセージを伝えることができます。つまり言葉で補う必要がないのが良い写真だと思います。あるいは、何も言わなければ、写真家の意図を超えて鑑賞者の心に響く場合もあるでしょう。でも昨今、批評家がつけるのではなく、撮影者自身が長々とした解説をつけることが流行っています。今回、写真一枚いちまいに題名と短いコメントを添えたキャプションを付けるかどうか迷いました。付けたほうが自分の意図が伝わる、あるいは写真の情報が見る人の視野を広げるという点では、付けたほうが親切だったかもしれません。しかし、鑑賞者はそれにしばられて見るので、余計なお世話になるかもしれません。撮影者(発信元)は、いろんな要因を心の中に持っていて、映ったものは意識しない意外な側面であったりしますし、受け手のほうも感じ方、見方が人によって違います。できるだけ自由に見てほしいと思います。付けるとすると、最低限、題名と花の名前だろうと思いながら、とうとうキャプションは花の名前しか付けませんでした。題名もコメントもなしというのは、おしゃべりの私にとってかなり禁欲的です。それで、今回の展示について、言葉で補おうとするとどうなるか、作品数は四三枚ですが、半分以上は引き立て役で、主要作品は一五枚ほどです。

独り言で付けていた文言を書いてみます。

「風に吹かれて」⇩「この道の向こうに」⇩「ダイアモンドのきらめき」⇩「逆光で光る瞬間」⇩「日陰に咲く小花」⇩「初秋の風」⇩「秘密の小庭」⇩「光と風のたわむれ」⇩「ボーダー花壇の興趣」⇩「野原の草花」⇩「冬の雷鳴」⇩「初めて咲く」⇩「共生と競争」

これらのつたない言葉が必要だったかどうかわかりませんが、会期中や後でお寄せいただいたお言葉の中に、私の意図を越えていて興味深いと、私が納得させられるものが沢山あったので嬉しく思いました。

(3) ロマンチシズムとリアリズム

私の中でいつも反芻している問題があります。写真を写す基準として、記録・ドキュメンタリーのように説明的にするか、それとも感性に従って芸術的にするかという問題です。「時の庭」展である以上、設計者の意図を理解して、庭の全体像を見せ

るという側面が必要だと思う一方、自分の自然に感じるまま自由に撮ることが庭の魅力を伝えることになるという思いもありました。文学や他の芸術と同様に、写真にもロマンチシズムとリアリズムという二つの思想・技法の系譜がありますが、絶えずその二つを意識しながら撮りました。

ワレモコウ

私の場合、写真を始めて数年間はロマンチシズムに傾いていたと思います。実例をひとつ挙げると、花がいちばんきれいに見えるときに最もきれいな花を選び、美しく見えるような背景を選び、ふさわしい露出、測光を決めて、最高の美しさを引き出してくる撮り方です。そこには主観による抽象化があり、ボケ技術も機材もそれに適したものを使います。始めて数年経ったあるとき、キヤノンF2.8、２００ミリのレンズを通して、八ヶ岳のレンゲツツジ、グミなどを撮ったときは、その現実離れした夢幻的な世界に感動したものです。

その後、仕事、家事、介護で多忙を極めて、写真に集中できるのは旅行の時のみになりました。外国の風物は新鮮な驚きがあり、スナップをときどき写すようになり、「花夢の世界」は撮る機会がなくなりました。スナップを撮る際に、広角レンズ、スピード優先モードにして対象物に近づく時、レンズの向こうに迫力のある写像が見えてきます。街頭や屋内で「何かを感じる」と、素早く鳥を撃ち落とすというような撮り方をします。写したい対象物を選んでいる点では「事実をありのまま写す」というリアリズム写実とは違いますが、スナップ撮影では「花夢の世界」とは抽象度も違うし、自分の心象風景の反映は計算しがたいものがあります。ここ四、五年は、どちらかというとリアリズムに傾斜した写真を撮るようになったと思います。

芸術運動としてロマンチシズムがありリアリズムがあるのは分かりますが、自分のことを語るのは好ましくないながらもあえて言いますと、いま自分の撮り方として「リアルかロマンか」という区別は付けられないのです。最初、写真で師事したのは、二科会会員の大橋治三先生ですが、戦前からリアリズムもよくやったよと経験を語ってくれるなかで「ドキュメンタリーといえども芸術的な感動がないと真のリアリズムに

ならない」と述べておられました。

現実の生命現象、人間が作り出した建造物など、すべてこの世のものは生と死を含む複雑性と一体性をそなえた現象です。文学や学問では言語によって表現しますが、言語は類型化の得意な表現手段で、伝達手段としては抽象、象徴、比較、対照など言語技術を駆使し、思想体系を表現します。写真は、既視感、明暗の気分、においや音など、写像に直接取り込めないものまで含んで、複雑かつ一体となった対象物を一瞬に閉じ込めて切り取ることによって呈示します。その切り取りが、ロマンであってもリアルであっても、自分そのものが写っています。また先生の教えを借りますと、「写真の後ろに自分が透けてみえる、恐いものだよ」とのこと。子供のとき無心になって描いていた絵は、自分が本来持っていた「これをこう描きたいのだ」という欲求を反映していたものだと思います。それを思うと、画家、写真家、詩人、造園家たちの作品が具象から万人に理解される抽象へと向かうのが自然のなりゆきのように思われます。みんなに理解されるような抽象的な写真が撮りたいと切に思います。

今回の二人展のために撮った時期に、植物の強い生き方をみて、「自分の写真について」を教えてくれる経験をする機会を得たことは私の財産になりました。また、ひとつのテーマをもってしつこく同じ写真を写すこと、自分でプリントや額装をしたこと、いろんな人の助けを借りて、展覧会ができたこと…、反省を感じつつひとつの達成感を味わっています。

（一九六〇年　文学部英文学科卒業　たかはし　みほ）

土倉翁と成瀬の夢
―教育百年の計―

井上　信子

二〇一六（平成二八）年、紫陽花が小雨に揺れる頃、目白の桜楓館にて「成瀬仁蔵先生生誕記念日の集い」が催されるにあたり、「山林王・土倉庄三郎翁―理想・経営・愛―」と題した講演を行う機会を頂いた。

土倉翁は、奈良県吉野郡川上村の富豪の林業家として名を馳せ、産業が著しい発展をみせた明治期に、林業による富国を首唱し、吉野木材を日本中に供給して財を成し、それを惜しげもなく公共事業に費やして村民を富まし、さらに板垣退助ら有望な政治活動家を支援して「吉野の山奥から日本を変えた男」と称された人物である。

また国家有用の人材育成のため教育事業にも助力を惜しまず[1]、一九〇一（明治三四）年、国内初の女子高等教育機関、すなわち日本女子大学が誕生する際に、三井家と同じく多大な資金援助を以って設立に寄与され、さらに初代の評議員として逝去されるまで本学を精神的にも支えて下さった方である。

本学創立者・成瀬仁蔵に広岡浅子様をご紹介下さったのも土倉翁であり、おふたりはともに成瀬の後ろ盾となり、女子大学創設が失敗した折には、他の寄付者の「寄付保障」までするという格別の支えも下さった。なぜ翁は、そこまでご支援下さったのか。その理由は『成瀬先生傳』（仁科節編、一九二八年）に記されている。「世の学校を見ていると、知識を注入することばかりで、良心を啓発する、品性を陶冶する、すなわち人物を養成するという点に至っては、概して等閑に付されており、特に女子の教育においてそれが顕著である。だが成瀬先生の『女子教育』は人間形成を核としており、故に応援したくなったのだ」（要約は筆者）と。さらに、多額の寄付金、自由裁量の運動資金を与えられていたにも関わらず、病の時でさえ自らのためには一文たりとも使わず「清貧」を貫いた成瀬の生き様に、翁は「誠実無私」と感銘を受けて涙した逸話も伝えられている。このように成瀬仁蔵と土倉庄三郎翁には、教育観の共鳴、仁愛の交わり、魂の邂逅があったのだが、残念なことに長い歳月が流れるうちに関係者の口の端に上る機会は少なくなり、やがて大学の記憶からも遠ざかっていった。

創立者はそのことにお心を痛めていらしたのであろうか、縁あって筆者は本学と川上村をつなぐ役割を担うことになった。やがて「土倉庄三郎翁百回忌法要」が催されることとなり、川上村から日本女子大学学長参列の願いを受け、佐藤和人学長・理事長（当時：以後、学長と略記）にお伝えすると学長は、大恩への返礼を胸に副学長（当時）お二人を伴う吉野来訪を即断された。二〇一六年六月一八日夜半、在りし日の成瀬と同じ吉野の山を越え、川上村に辿り着いた学長が、翌朝[2]まず目にしたのは、村民の村を上げての大歓迎ぶりであった。そしてこの熱狂は、村民が学長の背中を見送るまでいささかも醒めることはなかった。

学長らは早速に土倉家の菩提寺である龍泉寺に入り、本堂での百回忌に参列、墓参を済ませ、次いで大ホールで学長講演「成瀬仁蔵と土倉庄三郎翁」を行った（写真1）。大ホールは村民と遠来の客で溢れかえり、入れなかった人々がロビーやホールの周囲を埋め尽くす大盛況であっ

写真１　学長講演

た。村民の生計と教育の充実に尽力された翁の慈愛と、百年前、翁の葬儀のために目白から山坂越えて参列した成瀬を村民は「律儀な人」と慕った、その思いとが、今もなお数多の人々によって偲ばれているようであった。割れんばかりの拍手の中、講演を終えた佐藤学長は、栗原村長らと末永い親交を願う熱い思いを交換し、一行は川上村をあとにした。

その四日後の六月二三日、筆者はゼミ生とともに学びを深めた「土倉庄三郎翁」の講演を行った。その折、最高級の吉野杉の酒樽（甲附）[3]をご用意し、会場の入り口に展示してご来場の皆様に香りとともにその見事な「匠の技」をご高覧いただいた。後日、本講演のために結成した「プロジェクトチーム吉野川」のゼミ生たちが、その樽に、特別純米大吟醸を三日間仕込み、芳醇な香りの美酒「樽酒　土倉翁」を醸造（?!）し、小さな瓶に詰めて講演でお世話になった方々にお配りした。瓶の蓋に「樽酒　土倉翁」と印し、その横に「『腎臓』にご留意下さい」と書き添えたが、それが「仁蔵」のしゃれだと、果たして幾人の方が気づかれたであろうか。

「遊び心」溢れるチーム結成だが、それは成瀬の精神的ＤＮＡが継承されることを願った教育実践であった。

やがて学生たちの内面に「何か」が育まれ、年明けの二〇一七年二―三月、今度はチームのゼミ生四名が山深い川上村へ向かった。そして、再びの温かな歓迎を受け、まず、森の匠のお導きで原生林に抱かれ（写真２）、紀ノ川へと流れ込む吉野川の源流に戯れ、つぎに林業の匠お手ずから樹齢五〇年の材木の伐採を実体験させて頂いた。翌朝、学生たちは

写真２　吉野の原生林

翁のお位牌に手を合わせ、「本学を誇りに思い」「三綱領に血が通った」ことをお伝えし、その足で学長講演が行われたホールの研修室に向かい、村民の皆様を前に自分たちなりの「成瀬と土倉翁の邂逅」について研究発表を行った。満席の熱気あふれる研修室では、それまで座学でのみ進めていた吉野杉の研究の盲点を、現地の匠たちから技術・知識の両面より指摘されることで、森林体験による体感と認識が統合した深い了解を得た。とりわけ苗木をわが子のように懇切丁寧に扱う「撫育」、二〇年掛けて木を見守り立派に伸ばす、「木と人の育て方は通ずる」という視点は、教職を志す者の心に格別に響き、「一生の宝になりました」と活動報告に認めた。

　またそこには、大自然に抱かれた学生たちの生命観が、「生きている」から「生かされている」へと根本的に転換した事実も記されていた。ひとりの学生は後日、さらにこう綴った。「わたしは、とある村で神聖な森林と出逢った。『原生林』―人の手を借りず、いくつもの困難を乗り越え、太陽に向かってのびやかに逞しく生きる『いのち』は、土の奥深くで根っこを絡ませ、手をとりあっていた。『いのち』は、手をとりあって生きている。彼らも。そして、わたしも。」本学生は、「『人のために』という言葉がからだに入ってきました」と告げ、小学校教員になるべく巣立っていった。

　吉野の森で在校生の中に花開いた土倉翁と成瀬の夢は、今日も次世代に手渡されている。

（日本女子大学人間社会学部教育学科教授　いのうえ　のぶこ）

1　土倉翁は同志社大学の創設にも多大の支援をされた。

2　土倉翁の本当の没年月日は、一九一七年七月一九日である。諸般の事情により一ヶ月前倒ししてご法要が執り行われた。

3　「樽の吟味がまた難しい。最高の樽材は、大和の山奥の吉野杉。…『甲附』とは（杉の木の中心の赤い部分の）赤味と白太の境目のところを材にしたもの。白太の内側にひと皮だけ赤味の層がある。だから、樽の外側から見れば白く、内側から見れば赤い。これが最上である。一本の木から、一樽しかできない」秋山徳蔵『味―天皇の料理番が語る昭和』（中公文庫、二〇〇五年）一七五・一七六頁

研究ノート

国際人教育の原点――伝統の調理実習

飯田　文子

1、はじめに

昨年（二〇一六年）九月一五日から一二月二〇日まで、本学開学から続く伝統の調理実習展示が成瀬記念館で開催された。今回の展示の特徴は、フードモデルを使用し、現在の食物学科食物学専攻の一年次の調理学実習Ⅱおよび食物学専攻および管理栄養士専攻合同の三年次の調理学応用実習Ⅱで行っているクリスマス料理を再現し、実物大の展示がなされたこと、また第二展示室において実際に授業で師範を行っているビデオが併せて展示されたことにある。過去における食物関連の展示では、創立者成瀬が使用したカトラリーおよび森村夫人（現在のノリタケの社長夫人）が寄贈された校章入り食器セットと写真による実習風景展示であったが、リアリティーのある精緻なフードモデルは絵や写真とは異なり、立体的具象的で閲覧者に対する迫力が感じられ、過去には類をみない華やかな展示となった。さらに過去と現在との対比により脈々と続く伝統の技術の匠さが簡略化の一途を辿る今日の調理技術の中で、改めて浮き彫りになった新たな企画といえよう。

2、本学伝統の調理実習

本学における調理実習は、創立当初から家政学部のみならず国文学部、英文学部のすべてにおいて「家政及芸術（衣食住女礼等）」の中で「料理」として教えられていた（表1）。

第Ⅰ期

西暦／年号	学部名	他学部	科目名	配当時間								備考
				必修科目				選択科目				
				1年	2年	3年	4年	1年	2年	3年	4年	
1900／明治33	家政学部		家政及芸術（衣食住女礼等）	8	8	10						
（明治34年		国文学部	家政及芸術（衣食住女礼等）					2-7	2-7	2-7		
より開校）		英文学部	家政及芸術（衣食住女礼等）					2-7	2-7	2-7		渡辺鎌吉（M36～T9）
1902／明治35	家政学部		家政及芸術（衣食住女礼等）	8	8	10						
		国文学部	家政及芸術（衣食住女礼等）					2-5	2-5	2-5		赤堀　菊（M37～T9）
		英文学部	家政及芸術（衣食住女礼等）					2-5	2-5	2-5		玉木　直（M38～S13）
1906／明治39	家政学部		料理（日本料理 西洋料理）	6	6	6						
		国文学部	料理（理論、実習）	3					2	2		
		英文学部	料理（理論、実習）	3					2	2		
		教育学部	手工（園芸、牧畜、料理）	2	2	2						
1907／明治40	家政学部		料理（日本料理 西洋料理）	6	6	6						
		文学部	料理									
		英文学部	料理（理論、実習）	3				2	2	2		
		教育学部	手工（園芸、牧畜、料理）	2	2	2						
1908／明治41	家政学部		料理（日本料理 西洋料理）	6	6	6						
		文学部	料理									
		英文学部	料理（理論、実習）	3				2	2	2		手塚かね（M43～S18）
		教育学部	手工（園芸、牧畜、料理）	2	2	2						
1915／大正4	家政学部		料理									藤田　貞（T2～S28）
		文学部	料理									
		英文学部	料理									
	家政学部	家政科1部	料理									
		家政科2部	料理									

表１　創立初期の学部と調理教育

私共が戦前の調理実習について調べるきっかけとなったのは、二〇〇一年から三年間、総合研究所の研究で、課題「本学における食教育を通してみた成瀬仁蔵の教育理念とその継承―創立から新制大学発足時までの調理を担当した人々を中心に―」を採択していただいたことである（研究代表者本間健教授）。当時の調理実習の内容を調べる方法として、学生の講義ノートを探すことから始まった。それまでお話で素晴らしかったということは伺ってはいたものの、当時の様子は、数少ない写真、食器やカトラリーのみから知る程度であった。そこで、桜楓新報等で卒業生に呼びかけ、残存するノート集めを行った。残念ながら一回生のノートは見つからなかったが、二、一九、二三、二六、二七、二九、三七、三九、四〇、四四回生のノートを拝見することに恵まれ、創立当初から昭和二二年までの旧制時代の調理実習の内容を分析することが出来た。二回生のノートでは、西洋料理は英語教員が教授されていたこともわかった。当初は適当な西洋料理の先生に困ったのであろうと考えられる。グリーン先生の西洋料理は、簡単なアメリカの家庭料理であった。その後一九〇三年から教壇に立たれた渡辺鎌吉先生（元華族会館料理長　写真１）から、フランス料理を中心としたコース料理となる。その後、渡辺氏は大正九年

（成瀬逝去後一年）まで教壇に立たれ、本学の西洋料理の礎を築かれたといえる（表2）。

一方、日本料理は本膳料理の料理名が綴られている。本学設立時の明治三四年頃は、中等・高等教育における「料理」は、学校教育用の基本的な日常食の献立で日本料理のみであった。しかし、本学の、他の女子教育機関と異なる独自性は、西洋料理が教えられていたこと、しかも公式晩餐会に出されるような料理が当時日本を代表すると考えられる華族会館（鹿鳴館の後進）料理長によって教授されていたこと、日本料理は料理学校校長から正式な行事食である本膳料理が教授されてきたことにある。家庭科で必要とされる日常食ではなかったことは、当時公式な宮中行事や外交の料理はフランス料理が基本であったことからも、海外に引けを取らない学生を育てたかった成瀬の教育方針が窺える。国際人となるためには鹿鳴館にみられるように、西洋式の服装や食事、マナーを身に着けることと考えたのであろう。さらに公式な場に馴れ、物怖じしないために、実践の場として、運動会や来客時の接待を学生に実践させることにより「実物教育」を行っていたものと考えられる。

以上のように、華族会館料理長を招き、本格的なフランス料理を学生達に学ばせることが、まさに当時の国際

西暦／年号		氏名	担当	資料に名前がある年	資料	資料(T12)	資料(T13)	在職期間(個人資料)
1900／明治33年	嘱託教師	山崎武八郎	西洋料理	M33	職員一覧			
	嘱託教師	赤堀　峰吉	日本料理	M33	職員一覧			
1902／明治35年	嘱託教師	渡辺　鎌吉	西洋料理	M35.39.40.41T9	職員一覧			明治36年～大正9年
	嘱託教師	柳沢　佐吉	西洋料理	M35	職員一覧			
1904／明治37年	嘱託教師	赤堀　　菊	日本料理	M37.39.40.41	職員一覧			明治37年～大正9年
1934／大正9年	教授	大岡　蔦枝	家事料理	T9.12.13.15.S10.16.18	職員一覧	俸給額帳	教員認可願	大正9年～昭和20年
	教授	手塚　かね	料理	T9.12.15.S7.10.16	職員一覧	俸給額帳		明治43年～昭和18年
	教員(T15助教授)(昭和7年教授)	玉木　　直	料理	T9.12.13.15.S7.10	職員一覧	俸給額帳	教員認可願	明治38年～昭和13年
	教員(S7助教授)	藤田　貞	料理作法	T9.12.13.S7.10.16.18	職員一覧	俸給額帳	教員認可願	大正2年～昭和28年
1923／大正12年	専任(教員)	亘理(中川)なみ	料理	T12.13.15.S7.10.16.18	職員一覧	俸給額帳	教員認可願	大正10年～昭和42年
	兼任(嘱託教師)	酒井　正吉	料理	T12.S7.10	職員一覧	俸給額帳		
	兼任	酒井　定吉	料理	T12		俸給額帳		
	兼任(嘱託教師)	青柳　　猛	支那料理	T12.S7.10.16.18	職員一覧	俸給額帳		
1932／昭和7年	助教授(S7教授)	東　佐誉子	料理	S7.10.16.18	職員一覧			昭和2年～昭和29年
1935／昭和10年	教員	藤田　富子	料理	S7.10.16.18	職員一覧			
	教員	津山　春枝	料理	S10	職員一覧			
	教員	白出さだ子	料理	S10	職員一覧			
	教員	長尾カツノ	料理	S10	職員一覧			
1941／昭和16年	助教授	小林(上島)文子	料理・礼法	S16.18	職員一覧			昭和11年～昭和49年
	教員	近藤たつ枝	料理	S16.18	職員一覧			
	教員	宮本ミチヨ	料理	S16.18	職員一覧			
	教員	高山　公子	料理	S16	職員一覧			
	教員	宮澤　則子	料理	S16	職員一覧			
	教員	野島(金山)幸子	料理	S16.18	職員一覧			
	教員	松好(武田)千鶴子	料理	S16.18	職員一覧			
	教員	堀部　清江	料理	S16.18	職員一覧			
	教員	徳田　和子	料理	S16.18	職員一覧			
	教員	高澤　　烱	料理	S16	職員一覧			
	嘱託教師	松村　太一	料理	S16.18	職員一覧			

表2　創立当初の料理担当教員一覧

人教育であったことは想像に難くない（当時の授業風景写真２）。それは、同時に当時不足していた栄養素の不足を補い体力（健康）増進を意味するものでもあったことであろう。

そこで、卒業生のノートから特に西洋料理についてご紹介したいと考える。

写真１　渡辺鎌吉氏

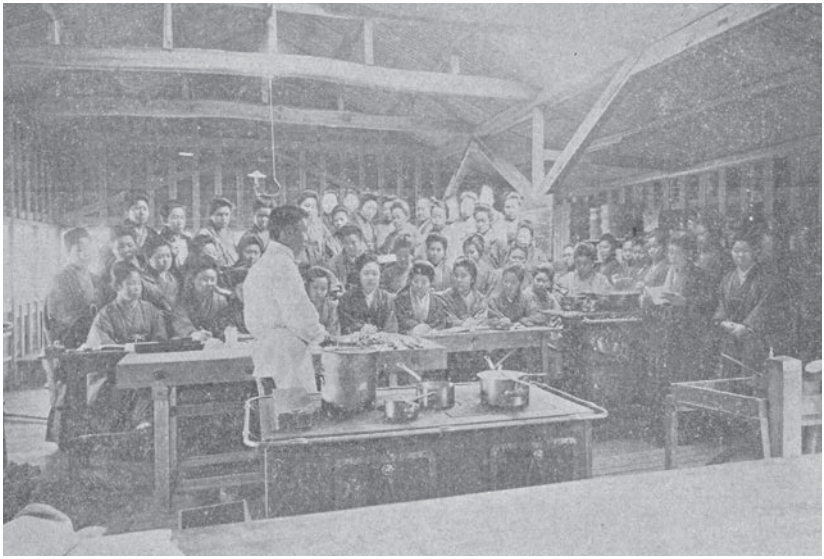


写真２　調理実習の師範風景

3、クリスマス献立にみる本学の伝統料理

調理献立の中でもとりわけ行事食には伝統が受け継がれるものが多い。そこで、現在まで伝わっているクリスマス料理がいつごろから教えられていたのかを調べてみた。表3に学生ノートに掲載されているクリスマスメニューをまとめた。

二回生から四四回生のノートにおいて、クリスマス料理は、ほぼどの回生も実習している。表3に示した献立はスペルミスが多いが、原語で学んでいた様子が窺われるが、理解しやすいように日本語表記としてある。献立では、牡蠣のスープが、魚料理はひらめが多く、肉料理はチキンばかりでなく豚肉がみられ、付け合せはカリフラワーが多い。その時代の食材の特徴が見られながらもクリスマス特有の材料でもある。デザートでは、プラムプディングとミンスパイが多く実習されている。これはドライフルーツの酒漬けを用いたものでとくに英国によくみられる香辛料のたくさん入った保存性のあるものである。常温でも保存できるため冷蔵庫の発達していない時代はとくに重宝であったと考えられる。

二回生のメニューは二品である（英語教師による）が、一九回生（大正時代）の渡辺氏および手塚かね氏によるクリスマス料理には、ローストチキンがみられる。写真

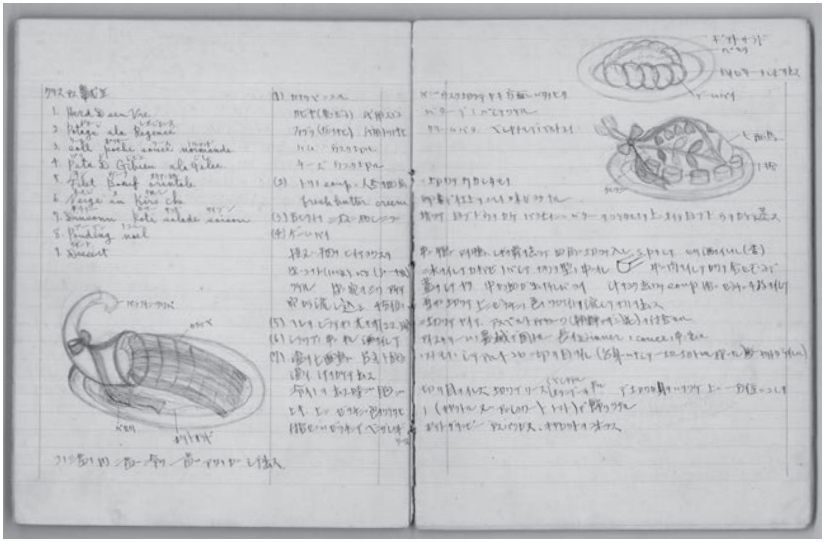


写真３　クリスマス料理ノート

クリスマス料理献立一覧

氏名	中山（宮坂）きぬ	増沢（長谷川）タカ子	生方（間宮）たつゑ
回生・学部・科	2家政	19師範家政	23師範家政
在籍年度	明治35―明治38	大正7―大正11	大正12―大正15
担当の先生			大岡　蔦枝先生
	プラムプディング ミンスパイ	玉葱のスープ 平目とジャガイモのコロッケ ローストポーク　ベイクドポテト,芽キャベツのソテー サラダ（薩摩芋,林檎） 牡蠣のスープ ロ―ストチキン アスパラガスのホワイトソース和え 鯛のオーブン焼き　ベシャメルソース オレンジプリン マーブルゼリー 果物 コーヒーキャンディー	人参のクリームスープ 蒸した平目のノルマンドソース添え シェリー酒で風味付けした豚肉の塊を煮たもの サラダ（セロリ,ジャガイモ,林檎） ミンスパイ

大原（大橋）美登里	森本（森）一枝	玉野（辻）道子
23家政	26家政	27師範家政
大正12―大正15	大正14―昭和4	昭和1―昭和5
大岡　蔦枝先生	大岡　蔦枝先生	東　佐與子先生
人参のミルクスープ 蒸した平目　ノルマンドソース 豚肉をシェリーで蒸し煮にしたもの サラダ（セロリ,林檎,ジャガイモ） ミンスパイ 牡蠣のミルクスープ 牛肉とジャガイモのパイ 茹でたカリフラワーのホワイトソースかけ アップルパイ 牡蠣,ハムを焼いたもの コンソメスープ 鮭のブランデー煮 牛肉のベーコン巻き ローストチキン コーヒーのケーキ	カナッペ　キャビア,フォアグラ,ハム,チーズ 鶏肉のポタージュ 平目の紙包み蒸し　ノルマンドソース 合鴨または鴨の肉のパイ ビフテキ キルシュのアイスクリーム 七面鳥のロースト プラムプディング （記載なし）	牡蠣のクリームスープ 鯛の蒸し物 ローストチキン サラダ（ジャガイモ,赤カブ,リンゴ） プラムプディング 伊勢海老の詰め物 鶏肉の蒸し物 ミンスパイ

平賀（戸津）きん	野崎（中江）美穂子	木村（白石）公
29家政	37家政二類	39家政二類
昭和3―昭和7	昭和11―昭和15	昭和13―昭和17
大岡　佐與子先生	東　佐與子先生	小林　文子先生
牡蠣のクリームスープ 平目の蒸し物 カリフラワーのグラタン ローストチキン サラダ（レタス,セロリ） ミンスパイ	ブッシュドノエル コンソメスープ 牡蠣のフリッター カリフラワーのバターかけ プラムプディング	コーンスープ 舌平目のノルマンドソースかけ ローストチキン カリフラワーのグラタン サラダ（ミカン,ウド,レタス） ミンスパイ アスパラガスのポタージュ 舌平目のノルマンドソース掛け ロースのワイン煮 カリフラワーの牛乳茹で (記載なし) アップルバターをかけたスフレ風オムレツ

小寺（速水）玲	野崎（小林）方子	根本（田中）妙子
40家政二類	43家政二類	44家政一類
昭和14―昭和17	昭和17―昭和20	昭和18―昭和22
手塚　かね先生	小林　文子先生	小林　文子先生
アスパラガスのスープ ノルマンディー風の舌平目 ローストチキン カリフラワーのグラタン サラダ ミンスパイ		寒天の入ったカクテル （実習なし） イエローベシャメルソースで和えた鮎、マッシュポテト、パン ローストチキン ベシャメルソースで和えたほうれん草のソテー サラダ（ウド,レタス） メレンゲ、刻んだピーナッツの乗ったケーキ ベイクドアップルの上にマッシュポテトを飾ったもの

表３　学生ノートによるクリスマスメニュー

5にもみられるローストチキンまたはローストターキーの盛り付け（渡辺氏）は、現在にも受け継がれている（写真8）。また、扇型カナッペ（写真7）は大岡蔦枝先生の著書にレシピが登場しており、大正九年以降の料理と考えられるが、日本女子大学独特の料理である。

また、お祝いの料理としてノートに登場する伊勢海老のパリジェンヌ風（写真4と6）も良く作られていたメニューで現在にも継承されている。

写真5　渡辺鎌吉氏のメニューの再現

写真8　伝統のローストチキンのクリスマス献立　（調理学実習Ⅱより）

写真7　日本女子大学独特の扇型カナッペ（調理学実習Ⅱより）

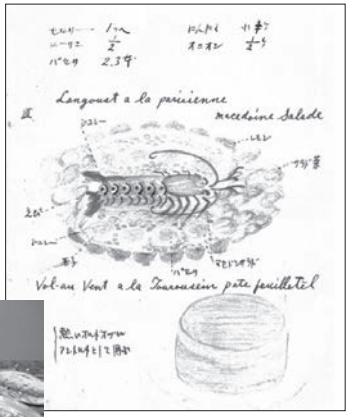


写真4

写真6　調理学応用実習Ⅱ（クリスマス料理）

4、西洋料理の潮流

西洋調理の担当者は、ミセスブラッドベリー、ミスグリーン、山崎武八郎、渡辺鎌吉、松本幸、手塚かね、大岡蔦枝、東佐輿子、小林文子などが担当してきた。大きく捉えるとアメリカ系統とヨーロッパ系統があり、基礎的なところをアメリカ料理、応用的なところがフランス料理と考えられ、両者の混在メニューもみられる。

フランス料理の流れでは、ナポレオン三世の料理番であったアントナン・カレーム、ユルバン・デュボア時代のソックルやアトレー串にみられる華やかな飾りの要素をもつ料理（クリスマス料理のローストチキン、伊勢海老のパリジェンヌ風）もみられ、現在日本のフランス料理はエスコフィエの料理（日本では秋山徳蔵が精養軒から広める）が基盤となっていることからしても本学に伝統的に伝わってきたフランス料理はそれ以前の古い時代（渡辺氏が横浜の外国人遺留地で学び取ったもの）の料理が原型をとどめており、どこにも現存していないため、大変貴重なものと思われる。

それに対し、家政学における学問としての調理は、英米の要素が強く、特に小林文子先生は新制大学設立時にコロンビア大学で学んできた家政学における調理学を展開してゆくことになる。その先駆けは、成瀬先生病床時アメリカのミルスカレッジから帰国し、料理担当を命ぜられた大岡蔦枝先生で、病人食として、アメリカ留学時代に勉強したブレックファースト英米スタイル（オートミールなど）を提供し、新たなメニューが加わることになる。アメリカ料理は前述したが、創立当初のアメリカ人の先生（グリーン先生は英語の教師となっているが、卒業生のノートにグリーン先生に教わったとある）から始まっているが、家庭料理の簡単なものである。いずれにしても芸術的要素の強いフランス料理と調理学として体系づけられる英米料理の二要素が、その後継承されていくのが日本女子大学の西洋料理の特徴となってゆく。

学生のノートからみる西洋料理は品数が少なく（当時の調理器具や熱源のため）本格的な献立は師範の実演を見ることが主流のようであった（写真2）。また料理の講義と実習が分かれており、実習のときは料理番の学生が材料を調達し、学生は手分けをして料理を仕上げる形態であったことが聞き取り調査から明らかになった。献立は黒板に達筆な英語やフランス語で書かれ、それを学生がノートに写し取って料講に臨んだ。応用になると精養軒などのレストランに出かけ実演をみて学ぶ授業もあったようである。三九回生からはコース形式として

整った献立になり、このころから食材、調理器具等が整い、実習しやすい環境が整ったものと思われる。

以上のように、卒業生のノートから、本学は、創立当初から本格的な西洋料理が行われ、最高のおもてなし（公式晩餐会にも通用する）料理を学んでいたことを窺い知ることができた。

5、さいごに

創立者、成瀬仁蔵の唱える家政学は、「実地応用を目的とする術なり」の言葉にみられるように、国際的な公式の場にふさわしい晩餐会すら、自ら行う能力の育成ではないかと考えられる。そして、礼儀作法も含めたそれらの教育は、運動会での宮様の接待、皇后陛下・東宮妃殿下の行啓、東伏見宮、三笠宮、秩父宮、高松宮各妃殿下来校時の接待等へと受け継がれていくことになる。

創立当初からの料理教育は、このように、公人および皇室関係者の本学来訪時等に、学生自らがお迎えし、手作りの料理でおもてなしする、実学教育へと発展したと考えられる。日本女子大学の学生は、その名にふさわしく、世界の公式行事にも通じる「おもてなし」の精神を理解し、その作法を身に着け、自分達の力で遂行できる能力を培うべく調理実習を学んでいた。まさに国際人教育の原点と考えていたのではないかと思われる。

（家政学部食物学科教授　いいだ　ふみこ）

写真９　皇族方の来校風景

参考文献

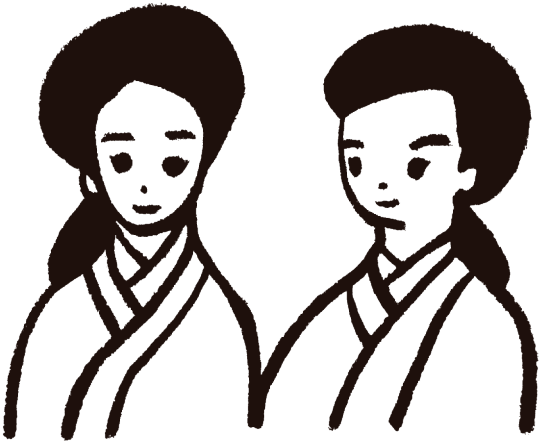
一、本間健　石川松太郎　三輪里子　吉中哲子　真橋美智子　天野晴子　飯田文子　高宮裕子　戸田美穂　鈴木みのり「本学における食教育を通してみた成瀬仁蔵の教育理念とその継承―創立から新制大学発足時までの調理を担当した人々を中心に―」『日本女子大学総合研究所紀要』第七号（二〇〇四年）七一―七七・七九―八一・八三―八四頁

二、大岡蔦枝『西洋料理一般』（桜楓出版部　昭和二七年一一月三日）

三、鈴木菜穂子　吉沢香奈「日本女子大学における西洋料理の変遷（一九〇三～一九四三年）」（平成一三年度食物学科卒業論文）

四、小松崎もえぎ　谷川夏子「授業ノートからみる日本女子大学西洋料理の変容」（平成一四年度食物学科卒業論文）

五、糸川万里子「日本女子大学における西洋調理の潮流」（平成一五年度食物学科卒業論文）



新資料紹介

宮澤トシの「実践倫理」答案（その二）
――成瀬校長の思想を受けとめた学生たち――

山根　知子

はじめに

今回紹介する宮澤賢治の妹トシの新資料は、すでに『成瀬記念館』No.30（二〇一五年七月発行）に掲載した「宮澤トシの「実践倫理」答案―成瀬校長の導きとトシの心の軌跡―」において紹介した八点の資料公開後、二〇一六年七月に追加調査した際に、新たに発見された新資料三点である。

まず、前回と今回の新資料を合わせて概観するため、トシ答案関係全体の資料名に［一］～［十一］までの通し番号をつけ、時系列にて一覧できるように列挙した。そのうち、『成瀬記念館』No.30にて発表されたトシ新資料八点については、前回の資料番号のまま〈資料1〉～〈資料8〉で示し、今回のトシに関する新資料三点については、《新資料①》～《新資料③》として傍線を引き示している。さらに、このトシ新資料を論ずる際にトシの思想に関わる資料として、同級生である第十六回生関係の《新資料㊀》～《新資料㊁》も必要になることからここに取りあげることとする。よって、以上のトシ答案関係三点、第十六回生二点、計五点の新資料について、全文の翻刻を後掲し、トシの新資料についてトシの思いを探りたい。

なお、ここでいう「実践倫理」答案とは、成瀬仁蔵校長の授業「実践倫理」を中心とする学内での一連の指導によって提出された提出物を指すこととする。

宮澤トシ　「実践倫理」答案［一］～［十一］

前回の資料　トシ答案関係　〈資料1～8〉　計八点

今回の新資料
- トシ答案関係　《新資料①～③》　計三点
- 第十六回生関係　《新資料㊀～㊂》　計二点

【大正四年度】家政学部予科

［一］〈資料1〉「自己調書」（カード）

［二］〈資料2〉「（態度・独立）」（カード）

【大正五年度】家政学部本科一年

［三］〈資料3〉「大学生活に入る決心」

［四］〈資料4〉「瞑想ノ目的、及経験／夏季間ノ修養、研究ニツイテノ計画。」（カード）

［五］〈資料5〉「夏期休暇中ノ経験」（カード）

［六］〈資料6〉「第二学期ノ決心及希望」（カード）

［七］〈資料7〉「自己調書」（カード）

［八］《新資料①》「欧州戦乱ニツキテノ感想」　大正五年十二月二十三日

【大正七年度】家政学部四年

［九］《新資料②》三泉寮　誓の言葉「祈り」　大正七年九月八日

《新資料㊀》第十六回生「感謝の歌」　大正七年九月八日

［十］〈資料8〉「『女子教育改善意見』を読んで」

［十一］《新資料③》実践倫理　出欠記録　大正七年十二月十七日

《新資料㊁》第十六回生「誓」　大正八年二月二日

この表より、トシの「実践倫理」答案［一］～［十一］の全体像と年代の関係が確認できよう。

今回のトシに関する新資料三点については、点数も記述量も少ないが、トシの当時の状況や思想内容について解明でき、成瀬仁蔵の思想からの影響およびトシ独自の思想の深化について考察できることから、重要な資料として注目される。

加えて、前回の新資料やその他のトシ関係の資料と関係する点についても指摘でき、また今回の調査でトシ以外の学生の答案や学年での活動記録などの調査もできたことから、トシの思想の特徴を多角的に捉える考察の糸口を示したい。

さらに、今回の調査によって発見されたトシ以外の新資料については、表のなかに示した第十六回生の《新資料㊀》「感謝の歌」と《新資料㊁》「誓」のほか、この表には入れていないが、以下の本文中で他の学生の答案も引用し紹介して考察を加えることとする。なお、それらの他の学生の答案も、本稿における紹介が初公開となることを言い添えておく。

一、《新資料①》「欧州戦乱ニツキテノ感想」

大正五年十二月二十三日

まず、トシの答案「欧州戦乱ニツキテノ感想」における日付けについては、この答案が束にされて綴じられた一番上の答案に、「大正五年十二月二十三日」とあることによる。このように大正五年十二月二十三日の同日の日付けが記入され、欧州戦争に関して論じられた答案の束は、十束ほどある。この課題が出された授業内容を、『実践倫理講話筆記』（大正五・六年ノ部）によって確認しようとする際、この筆記には対応する時期における内容が見当たらないため、成瀬の指示については確認できない。

残存する同日付けの欧州戦争に対する答案を手がけた学生の答案においては、他にも教育学部第一部、第二部、家政学部の学生による答案がみられ、学年については第一学年、第二学年、第三学年のものが存在する。それらの答案の題名については、欧州戦争に関する類似の題をもつ答案の多くに表紙に同じ日付けがあることから、全学部全学年を対象に一斉に出された課題であることがわかる。

それらの答案の各人の題名については「欧州戦争について」という題名が最も多く、なかには「欧州戦乱ハ如

何ナル影響ヲ吾々ニ与ヘツヽアルカ」（教育学部第二部第二学年）や「欧州戦乱ノ婦人ニ及ボセル影響」（家政学部第三学年）、「欧州戦乱ノ我国婦人ニ与ヘタル教訓」（教育学部第三学年）といった主旨が明確にわかる題名もみられる。

そのなかから、他の学生の文章として一例を挙げると、トシと同級生の家政学部第一学年の「我国婦人が得たる欧州新年の影響」という題名の答案には次のようにある。

世界は固き信仰により、平和をもたらさんとして、努力しき。これに対して、我が婦人も、心あるもの同然に憂ふる所あり。平和を希望する点に於ては、そこにたしかなる信仰、言ひかふれば、広き愛の発露あらざれば、得ざることなり。その刺戟は我が国にも影響して、近年国民が信仰生活につきて、何等かの要求を起し求めて止まざる心より、遂に近年は信仰問題強くなりぬ人まぢめならざれば、信仰なる問題につきて、切なる要求を発し得ずと信ず。我が国民、特に婦人が生の根元たる信念につきて、要求を起したるところ、実に美しき芽生へといひ得べし。

ここでは、欧州の戦乱から日本国民が受けている影響について、信仰心を基盤とした広い愛による平和の希求が起こっている現状と、「特に婦人が生の根元たる信念につきて、要求を起したるところ」に意義が見出されている。

このような答案の束には、束の一枚目に「欧州戦争ノ日本婦人ニ与エタル影響」と題された学生の答案が綴じられた束があり、その束のなかにトシの「欧州戦乱ニツキテノ感想」と題された答案が見つかった。トシにとってこの「家政一年」の十二月という時期は、すなわち予科を一年過ごしたあとの本科一年の年の終盤であり、日本女子大学校で四年間学んだうちのほぼ半ばといえる時期である。

ここで、欧州戦争すなわち第一次世界大戦に関する世界の動きのなかで、まず成瀬の言動はいかなるものであったかについて簡単に述べておきたい。第一次世界大戦は、一九一四年七月二十八日に宣戦布告がなされてから一九一八年十一月十一日までの休戦条約制定までのあいだ、ヨーロッパを中心に繰り広げられた戦争である。この間において、日本における成瀬の視線は、宇宙的な平和・調和を考える視点と、そのなかでの女性の使命と可能性へと向けられていたと思われる。

今や婦人が、その本年の真使命を担つて、起つべき秋は来た。今次の大戦に刺戟されて、欧米の婦人は深く覚醒し、宗教、教育、国際、文明等の諸制度が、

従来のまゝでは不都合であることに気がついて、根本的の立場から、之を改革する努力を始めたのである。大戦の原因となつた、世界の物質主義的思潮の弊を救ひ、本然の精神主義に依つて、人類の生活を新なる真幸福に導くものは、実に先天的に鋭き直覚と深き愛とを有する、婦人の繊手でなくてはならぬ。

（『成瀬先生伝』昭和三年四月　桜楓出版部　四四九頁）

こうした成瀬の導きを踏まえつつ、トシにおいて考えると、この戦争は、トシの日本女子大学校予科進学前の花巻高等女学校最終学年の中盤から、日本女子大学校最終学年の終盤までの四年余りにわたる期間であり、トシにおいて、この戦争を考える際には、成瀬の考えを常に聞きながら、自らの内側に芽生えた思いについて考えるというものであったといえる。

よって、トシの第一次世界大戦に関する言動について探ってみると、今回の資料《新資料①》のほかに見出される資料は、のちの最終学年にあたる大正七年十一月二十四日宮沢政次郎あてトシ書簡［一七］である（トシ書簡は、堀尾青史編「宮澤トシ書簡集」『ユリイカ』一九七〇年七月　による。以下同）。これは、第一次世界大戦が、大正七年十一月十一日の休戦協定によって終結を迎え、日本でも二十一日を祝日として祝った日の学内での様子について、父にあてて知らせた書簡であり、そこには、次のように記されている。

戦争に冷淡だ時局に盲だと始終校長先生に御叱りを受け候が休戦祝賀となればさすがに大勢の心も一致して来るも面白く御座候　式ハ可成に長く校長先生の御話の後、教授の英国人と米国人が演説され候其後全校幼稚園より先生方まで各聯合国の国旗を持ち行進運動をいたし候　そして各国の国歌を各々うたひ候（それも急ごしらへにて前前夜より練習をはじめ候）夜ハ又寮舎の祝賀会もあり市中の有様ハ何一つ見物いたされず候ひしも可成り満足するまで祝ひの心をあらはし候

（トシ書簡［一七］大正七年十一月二四日　宮沢政次郎あて）

では、このような背景をもちながら第一次世界大戦への意識とともに自らの内面を耕していったトシが、今回の資料《新資料①》の答案で深めた思いについて触れていきたい。

トシの「欧州戦乱ニツキテノ感想」という題名は、先の他学生の題名のなかでは内容の方向性や具体的な観点が示されたものではなく標準的であるといえる。しかし

ながら、冒頭から「裏面ニ、小我ノ横暴、専制等ノ要求ヲ秘メテ、表面ノミノ平和ハ到底保タルベキモノデハナイ」と始まる文章においては驚くべき主張の強さがあるといえよう。

この「小我」という語をめぐって想起されるのは、トシがこの答案の翌年九月十六日に祖父喜助を亡くし、そのあとに「料理ノート」に書かれた次のような言葉である。

今一つの自我発展と云っても、これを傲慢な分子を加へた態度を以て、ややもすれば小さな我の悟り、我の発展を得ようと苦慮して居た事を知った　この小さい我一人（たとへ自覚せずとも）高い所へ押しあげやう、悟らせやうとして居た事のいかにみじめであるかを見た　亡き人の為、家族の為、凡ての人の為犠牲となって厭はぬと我を忘れて亡き祖父の為にたとへ片時でも祈る事の出来た事は実に幸福であった。

トシは、この祖父が亡くなる一年以上前の大正五年六月二十三日付書簡［一］にも、祖父本人に宛てて死と信心の問題について書いていることから、この《新資料①》が書かれた大正五年十二月という時期はその半年後であり、さらに大正六年九月に祖父が死を迎えるまでの期間の流れのなかに位置づけられるといえる。つまり、祖父の死の問題と戦争の問題が重なりながら、トシは自他ともに「小我」の働きを感じつつも、それを超えるべき我の問題が「自我発展」へと祈りに至る価値観を深めていったといえるだろう。

さらに、この「料理ノート」の先の引用箇所の前には次のような言葉がある。

夏休みの終わってから間もなく祖父の死に逢った私は今この事が最も大きな問題として頭の中におかれてある。（中略）平常（三字不明）頭に考へた人生の問題の最も大きな一つたる死にまのあたり逢った思いがし真剣になる事が出来た　最も故人に孝行となるかを思ひ又最早死別も苦もない永久の国、祖父のみならず、我が家族のみならず、凡ての人、今戦場にある人々もなどいかにすべきか心の底から思はれた

そしてついに朧げながら私の行くべき道を認める事が出来た　即ちやはり信念生活を最もよく生活する外にないと知った。

（傍線は山根による。以下同）

この文中の「今戦場にある人々」という記述については、これまでトシの切実な思いとして理解が及びにくかったが、今回の《新資料①》によると、トシの問題意

識のなかでは、「祖父の死」と「欧州戦乱」の両者それぞれをめぐって引き起こされてくる「小我」の問題こそが、人の生涯においては真の「自我発展」をさまたげ、一方世界の在り方においては真の「平和」を実現できないという現象を引き起こしてくるものなのだという同質性が見出されていたことがわかる。

こうしたトシの人生および世界に対する解釈においては、成瀬の導いた「自我発展」および「平和」「調和」の思想に確かにつながるものであろう。しかも、そのトシの解釈には、自身の過去の挫折体験からくる「小我」に対する強い問題意識から深められている点もあったに違いない。

さらに、トシの戦争観の次の展開において、「私利私欲デアッテモソノ極致ニ達シ行キ詰ッタ時ニハ必ラズ他ニ道ヲ開クモノデハナカラウカ」と述べられている見解には独自性が表れている。

すなわち、「小我」という概念につながる「私利私欲」は、必ず行き詰まるものであり、その行き詰まりゆえにそれを根本的な改善に転換するきっかけや原動力になるというのである。ここには、むしろこうした私利私欲が「極致」に至ることによって、「自我発展」への道が開かれるとする「自我」への信頼が表されているといえよう。

その信頼がなぜここまで深いのかについては、トシ自身の花巻高等女学校での挫折体験とその後の成瀬に導かれた思想への開眼にあると考えられよう。つまり、拙著『宮沢賢治　妹トシの拓いた道』（二〇〇三年九月　朝文社）で詳述したが、トシは高等女学校での音楽教師に対する恋愛の心すなわちトシ自身もあとで「自省録」を書いて振り返るとき「小我」の働きであったと捉えられる心によって、他者不信と自己不信のどん底に陥ったことがあった。しかし、日本女子大学校に進学して成瀬の信念に触れ、「私利私欲」に傾いた「小我」に支配された「自我」が、「行キ詰マッタ」ことの深い意味を開示したからこそ、《新資料①》のこの後に登場する「宇大ノ大霊」「大霊ノ御心」につながって、「真我」に開かれていくことを望んで至ろうとする前向きな心理へと道が開かれたというのであろう。そこに、戦争のなかでの「私利私欲」の極致と行き詰まりのなかにあっても「大霊ノ御心」の働きを信じて意味を見出すことから道が開けるのだとトシは考えているといえる。

そのように考えるトシが「現在ノ社界ハ決シテ理想的ノ完全ナルモノデハナイ。マダ真理ナラザルモノ、実相ナラザルモノガ、勢ヲ恣ニシテ居ルトコロガアル」と述べながらも、「コノ点ヨリ見テ、戦争必ズシモ悪トハ思

ハレヌ」といえる心境を記しているのは、ここでの「戦争」という出来事は、トシにとってあくまで人間の心の問題が露呈した現象であるとして見ているということだからではないだろうか。

そうであれば、「行キ詰ッテ愈々局面ノ展開スル時ニハ、ソコニ善ト悪、真ト不真、美ト醜トノ争ガ、多少無クテハナラヌ」というように、行き詰まる前には見えなかった葛藤する対立が見えてくるようになる心の展開が、真の「自我発展」のためには大切なのだというトシの考えが理解されてくる。

そうして、次の「宇大ノ大霊在スコトヲ知ル故ニ最後ハ必ラズ、大霊ノ御心ニ適ヘルモノガ勝ツ「デアラウ」という言葉が発せられるのである。「善と悪、真と不真、美と醜との争」に対して、「最後ハ必ラズ、大霊ノ御心ニ適ヘルモノガ勝ツ」という「争」と「勝ツ」という戦闘的表現がなされているが、そうした表現によって、人間の心や価値観の矛盾を乗り越える意味が提示され、トシの考え方が伝えられているといえる。

トシは、この世の価値観が「大霊ノ御心」に適う「ソノ時」について、「今ヨリ幾星霜ノ後カ殆ド予想ハ出来ナイ」としながらも、いつか「コノ世ニ天国、極楽ノ来ルコトヲ思フ」というように、現世での「天国」「極楽」の実現を望む心を示している。この「天国」と「極楽」を並べて使い、その意味としては、「大霊ノ御心」に適う世界という意味として使用していることは、死後と現世をわけ隔てず、またキリスト教と仏教の世界をわけ隔てず、すべてを包む「大霊ノ御心」に適うように、あらゆる人の心がいかに近づくことができるものであるかという基準を見据えていることは重要であろう。

ちなみに、兄賢治は「大霊ノ御心」といった表現は使用していないが、「宇宙意志」という成瀬と共通する語を使用していることから、ここに展開されたトシの現世における「大霊ノ御心」と人の心との関係についての把握の在り方としては、賢治にも響き合う要素があったのではないだろうか。

次に、トシがこうした「大霊ノ御心」が適う状況を「玲瓏タルモノ」と呼んで、そのようになることを望みながらも、一方、「戦争ハ人類ノ階段デアルカラ仕方ガナイ」と考えていることには、どのような意味合いが含まれているのだろうか。

トシが心に抱いている世界観として、「大霊ノ御心」が適う世界の真の到来は、「人類ノ階段」を「悪」や「暗」の低い段階を経て段階を登ること、つまり先のトシ表現では「行キ詰ッテ愈々局面ノ展開スル」ことによってこ

そ来るものであるという見方があるのではないかと考えられる。

そうであるから、トシが望む方向性としては、「只ソノ結果ガ最モヨクアラン事ヲ望ム。早ク、悪ヲ滅シ、暗ヲ追ヒ、玲瓏タルモノニ社会ガ成ルコトヲ願フ」ということであるには違いないが、トシは、「悪」や「暗」の低い段階に対して、そこに繰り広げられている「人類」の心を恐れず見極めようとすることで、人類の心が「大霊ノ御心」に真に適っていくための展開を踏んでいくことにあるべき姿を見ていたといってよかろう。

ただし、トシは、「然シ又一方眼ヲ現在ノ状態ニオケバ」として、ここまでの論点は「大霊ノ御心」から見た巨視的な永遠の次元から見る視点であるが、ここから視点を現実の次元による視点から見ると「実ニ戦争ノ悲惨ナルコトハ、科学ニ伴ヒテ進ム丁ヲ見セラレ、多クノ犠牲者ノ為ニ惨ミ惜シミ、悲シマザルヲ得ヌ」という感慨を抱いていることも欠かさず述べている。ここに、科学の進歩による戦争の悲惨さは、「多クノ犠牲者」を出すといういのちの問題は、答案冒頭の「小我」の問題につながる結果だという思いとなってくるのだろう。

最後に、トシは「私ハ日本ノ婦人トシテ、何ヲナスベキカ、コノ戦乱ニヨリテ、大イニ暗示サレ度イト思フ」と述べ、まず「日本ノ婦人」という認識のもと、戦争というものを見つめることから導かれる、自らへの「暗示」を求めているといえる。ここで「日本ノ婦人」という観点があるが、先に述べたように、欧米の婦人がこの大戦で目覚め、女性としての自立を進めているように、それに続いてトシも日本の婦人として如何に目覚め、何を実行していくかについて「大イニ暗示サレ度イ」と「暗示」という表現を使って述べている。

ここで、トシが「暗示」という表現を使ったニュアンスを考える際に、「暗示」の語を使用した例としては、《新資料①》の三ヵ月余り前にあたる〈資料5〉と〈資料6〉に登場している。まず、夏休み直後のカード「夏期休暇中ノ経験」での「今一ツハ或一日偶[マヽ]ナクモ敬愛スル兄ヨリ或暗示ヲ得タ。ソノ形［カ］ハ定カデハナカッタケレド僅カニ光明ヲ認メテ帰校シタ」という文章と、それにつながる〈資料6〉のカード「第二学期ノ決心及希望」での「休暇中ノ或一日、暗示サレタソノ光リハ、帰校後種々ノ刺激ヲ得、又考ヘル事ニヨッテ漸ク明ラカニナリツヽアル」という文章のなかでの表現である。この場合の暗示とは、トシにとって瞑想のなかで求める啓示の意味を持ち、「光明」「光」すなわち絶対者につながるなかでの意味合いが示された思想の啓示であるといえよう。

それほどにトシは、戦争という逆境のなかでこそ、「大霊ノ御心」からの啓示を受けとめようとし、自己を婦人としての使命を考えつつ、その「御心」に適う心へと自己を高めようとしていたといえる。

加えて、兄賢治に関連して述べておくと、賢治童話に「烏の北斗七星」という作品があり、戦争のなかで闘う烏が主人公で、その烏の葛藤の心が描かれた作品がある。その心は、「あしたの戦でわたくしが勝つことがいゝのか、山烏がかつのがいゝのかそれはわたくしにわかりません、たゞあなたのお考のとほりです、わたくしはわたくしにきまつたやうに力いつぱいたゝかひます、みんなみんなあなたのお考へのとほりですとしづかに祈つて居りました」と表現されるように、小我と大我のあいだの葛藤であり、その葛藤から真の信仰と祈りが心にわき起こってくるという内容である。その賢治の表現世界に、トシのこの答案に注いだ思いが響き合っていることは、重要な意味をもとう。

二、《新資料②》三泉寮　誓の言葉「祈り」　大正七年九月八日

この「誓いの言葉」の日付けとして記された「大正七年九月八日」は、表紙に「三泉寮　終結の暁」とあるように、トシたち第十六回生が最高学年である本科四年になって軽井沢にある日本女子大学校の夏期寮「三泉寮」で成瀬仁蔵校長の講話を聞き、黙想指導によって思索が導かれる体験をした三週間ほどの修養会の最終日である。トシ自身の他の資料では、六月二二日付けトシ書簡［八］（父政次郎あて）で「夏休みに軽井沢三泉寮へ参る事ハ、七月ハ三年生、私共ハ八月十七日頃より行く事と相成り候」と報告しており、これは毎年夏に行われている成瀬校長の人生最後の軽井沢夏期寮に参加し直接指導を受けたことになる。つまり、八月十七日から九月八日までの日程であれば、二十三日間の日程であったといえる。

その最終日に第十六回生七十三名が成瀬仁蔵の考案した「実践倫理ノート」にしたためた「誓いの言葉」が、紐で一束に綴じられて残されている。

そのなかでは、トシと同様に、ルーズリーフのように二つ穴が二箇所あけられた「実践倫理ノート」一枚の表面のみを使用したものがほとんどである。題名については、トシの題と同じ「祈り」のほか「誓い」が多い一方、「聖地ヲ去ルニ際シテノ吾覚悟」（家政学部）、「落葉松ノ森ニテ誓ス／正義ニ向テ猛進セヨ」（家政学部）、「軽井

沢生活最後ノ日ニ」（家政学部）、「Life」（英文学部）、「正義ノ勝利者」（英文学部）といった題名もある。

ここでトシの内容に触れる際に、トシ以外の学生について触れると、まずトシと同じ家政学部の同学年の友人である加用トキの全文を紹介しておきたい。

祈り。

愛ト自由ト平等モテ全テヲ抱擁セル大自然ノコノ聖地。新生命ヲ吾ニ与ヘシコノ聖山コソハ幾度自ラ自ラヲ捨テ自ラヲ欺キシソノ罪科ヲ咎メズ吾ヲ見捨テズ救ヒ出シテ生レ変レト霊泉モテ過去ノ汚レヲ拭ヒ新ニ向上ノ道ヲ示シ自由ヲ与ヘ頭上ニ正義ノ御旗ヲカザシ給ヒヌ。　　嗚呼恵ミ深キコノ境地。

永久ノ穉（ママ）ヲ吾ニ与ヘシコノ源泉。

正義ノ御旗ノ下ニ必死ノ奮戦ヲ期シテ進ム行手ニ常ニ光ヲ与ヘ朝ノ誓ヒニ夕ノ祈ニ正義ノ為ニ真面目ト愛ノ努力ヲ囁キテ永久ニ守リ給ヘヨ樅ノ喬木ヨ。

（大正七年九月八日樅ノ木ノ下ニテ）

まずは、加用トキが三泉寮の大自然を聖地と呼び、ここで、この大自然が絶対者としての救いと恵みを注いでいることの実感を示していることは注目に値しよう。つまり、この聖山は自分の罪科を咎めず自分を見捨てず自分を救い出して生まれ変わることを促す意志を主体的に働きかける存在であるとしている。その自分とは、「自ラ自ラヲ捨テ自ラヲ欺キシソノ罪科」を過去にもつ自己であるということを、加用トキは赤裸々に吐露している。この思いを加用トキが、この夏期寮の機会あるいは在学中に、トシに伝えることがあったとすれば、トシも同様の深い思いを抱く者として、強い心の絆によって結ばれていたことであろう。のちに触れるトシの加用トキあて書簡は、そうした背景を共有して祈り合ったかけがえのない友人としての加用トキへの思いが込められていると解してもよかろう。

さらに、他の学生の祈りの言葉について、トシの思想との関連を考えるため、次の五例を挙げたい。

「偉大ナル大自然ノ前ニ平伏シ冥想スル「廿余日ニシテ自分自身ノ中ニ存在セル我独特ノ宝ヲ探グルベキ道ノ燭光ヲ見ルヲ得タリ。」　　（家政学部）

「吾ガ生涯ノ出発点ハ此処ニアリ。小サキナガラモ吾ガ心霊ハ不朽ノ生命ヲ存シ無尽ノ価値ヲ存シテヰルコトヲ信ズルノデアル。」　　（家政学部）

「我レ正義ノ神秘ヲサトリ　自己ノ内心ニ神アルヲ確信ス。」　　（師範家政学部）

「団体ノ流レト共ニナリ、アクマデモ正義（宇宙ノ意志ト己ノ中ノ正義トノ関係ガヨクツキテ働ク其ノ

正義）ニ依リテ進行シ、以テ生ノ無限ノ拡ガリヲ持タン事ヲ期ス。」　（師範家政学部）

「尊イ人生ヲ味ハンガ為ニココニ最ツモ（ママ）堅キ清キ信念ヲキヅカントテ来リシ我ハ苦ルシミ苦ルシミテ後漸ク低キ信念ヲ高メ開ケヌ道ヲ見出シ正義ノ必勝ヲ経験シ宇宙ノone mindナルヲ悟リ得ヌ　コノ信念ヲモッテ勇マシク人生ヲ渡ラントス　（英文学部）

これに加えて、《新資料㊀》として後掲した翻刻「第十六回生　感謝の歌」についても、この夏期寮に参加した第十六回生が、恐らく全員の祈りの思いを汲み上げて共同で作って共有した歌詞であると考えられることから、関連させて考えることができよう。

これらから、大自然のなかの瞑想から自己の内心に宇宙の意志の存在と働きがあり、そこから湧く不朽の生命の泉の流れを知れば、その永遠の流れに共に入ることで、自己の価値や使命を感じて生の力を漲らせることができるという心の方向性が強く共有されていることがわかる。

さらに特徴的な点として挙げたいのは、「正義」と「戦う」という言葉の多用である。「正義」は、前掲の学生による「宇宙ノ意志ト己ノ中ノ正義トノ関係ガヨクツキテ働ク其ノ正義」との解説もあるように、宇宙の意志に添っているか否かの判断基準をもつ価値観であるといえる。また、「戦う」という概念は、成瀬の言葉では、トシより一年前の大正六年の夏期寮で成瀬は「我等は実に天意に従つて、霊の戦ひに進軍する兵士である」（『成瀬先生伝』四四八頁）として頻繁に使用している表現であることから、この年も成瀬の講話のなかで強調され、学生に影響を与えていたものと思われる。

では、トシの「祈り」の内容について解釈していくと、トシは、自分が「無限なる生命」すなわち絶対者の大いなるいのちに「連る」よろこびとともに、それは人々もそうであることを自覚して、「共に」「誠の生命」に至ることを祈っていることがわかる。

なお、「無限なる生命」「誠の生命」という言葉は、賢治童話「めくらぶだうと虹」における「かぎりないいのち」「まことのちから」「まことのひかり」に通じてくる重要な表現であるといえる。

さらに、「障害に対して、あくまで戦はしめ給へ」とトシも先の学生たちと同様に「戦う」という表現を使っていることがみられる。ここで、トシにとって「障害」として想定されている対象は何かと考えるとき、それは先の《新資料①》とも響き合う意味から、「小我」といえる要素ではないかと考えられる。

三、《新資料③》　実践倫理　出欠記録
大正七年十二月十七日

この《新資料③》では、トシの答案は存在せず、病気欠席者として「宮沢」の名が登場するのみであるが、ここからわかることを述べたい。

ここで「生徒数合計廿八名」と記されているのは、トシと同級の家政学部の人数である。欠席者の数について「八名」とされているのは、欠席理由が「不明」である者として「池本」の名が一度記載されていたが、その後出席と確認されたことから赤字によってその名が消され、結果として「八名」になったという経緯であると考えられる。

ここで、トシは十二月十七日の「実践倫理」の授業に欠席し、他の学生が提出している答案を提出していない欠席者として記録されているのであるが、トシのこの日に至る動向を探ると、この前に、トシは父あての三通にわたって、冬休みの帰省について事前に相談し、「今度ハ四月までハ短き事にてもあり又一度の休み位ハ帰らぬ方がよくはないかと思はれ候」「父上様の御許しを得た上で定め申すべく候」（書簡［一七］十一月二十四日）と伝えた後、父が帰省するように命じたと推測されるが、トシは「終業式ハ多分廿四にてその夜多分六時の汽車になる事と思はれ候」（書簡［一八］十二月九日）と知らせ、「帰る序でに何か御用ハ御座無候や」（書簡［一九］大正七年十二月十日）と帰省する予定で伺いを立てている。

しかしながら、トシは発熱のため二十日に入院し、二十七日に母イチと兄賢治が看病のため上京したという経緯となる。

その後、肺炎と診断されたトシは入院中の大正八年一月に、成瀬校長の肝臓癌の診断が下され、二十九日には全教員・学生対象の告別講演が講堂でなされたという報を知ることになった。そのときの成瀬校長の告別の言葉に応えるように、第十六回生としての決意をまとめたのが、《新資料㊀》の第十六回生「誓」（大正八年二月二日）であり、トシも後日追って知ることになったと思われる。

そこに記された「一致協力シテ飽ク迄先生ノ御精神ヲ貫徹致シマス」「一度先生ニ依リテ点火セラレタ霊ノ閃キハ再ビモトノ暗愚ニ帰ヘル事ハ出来マセン。只ダ私共ハ進軍シ成長致スヨリ仕方ガ御坐イマセン」「私共ガ常ニ憧レ断ヘズ求ムル永遠ナル生命ハ実ニ先生ノ御人格デ御坐イマシタ」「我ガ慕ヒ奉ル先生ノ御人格ヲ通シテ久遠ノ生命ヲ見オホセタ事ノ喜ビ」「私共モ先生ト御一緒ニ永生致シマス」という表現には共感をもったのではな

いかと思われる。

こうして卒業したトシは、一年間療養を続けたあと、「自省録」を脱稿した一ヶ月後に同級生であった加用トキにあてて、書簡［二一］（大正九年三月十六日　晩香寮　加用とき子あて）を次のように書いている。

晩香寮に手塚先生の御あと又平野先生の御あととして又は小さい方方の御姉様としてどの様な御生活を御経験遊ばされていらっしゃいますか御伺ひ申したうございます

御別れらしい御別れも致さずに終ってしまひましたのでからだが恢復致し次第上京致し度いと存じて居りましたがやっと近いうち上京も叶ひさうになって参りました

この上京が実現したか否かは不明だが、トシは、このあと大正九年九月から母校花巻高等女学校で教諭心得として勤め始めることとなり、成瀬の天職としての働きを引き継ぐ任を担おうとしたのであろう。

おわりに

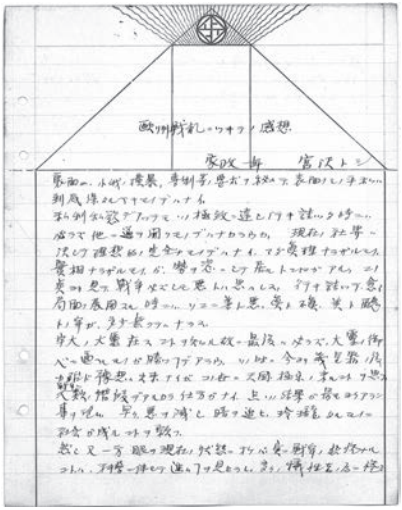
今回の新資料では、《資料①》から、トシの欧州戦争というこの世の現実において分析される小我の問題について、心の深い段階でみつめていた思想内容が明らかとなった。また《資料②》からは、トシが成瀬に導かれて大切に意味づけた自然との触れあいのなかで、瞑想体験による実感を通して、絶対者の「無限のいのち」に触れてつながり、さらに人々とともに「まことのいのち」に至ろうとするいのちのつながりへの実現を祈っていることと、そのために心の小我を宇宙意志の大我に広げていこうとする覚悟を強くしていることが判明した。

いずれもトシが、この世の逆境について、成瀬の思想を受け継ぎながら、「無限なる生命」と「我」および「人々」との連なりの関係において常に判断しようとする心から、大きな開眼と深い洞察を得ていたことがわかったことは、今回の新資料ならではの発見であったといえる。それに加えて、トシと身近に接していた第十六回生による新資料からは、トシが自らの思いを前進させた背景には、成瀬の思いを浸透させた力強い精神的共同体の存在があり、この共同体は成瀬の思想を共に深める貴重な場であったことが見出せたといえるのである。

（一九九二年大学院文学研究科博士課程後期単位取得退学・ノートルダム清心女子大学教授　やまね　ともこ）

［付］宮澤トシ 「実践倫理」答案 翻刻
【大正五年度】家政学部本科一年

《新資料①》「欧州戦乱ニツキテノ感想」 大正五年十二月二十三日
実践倫理ノート＊ 一枚 二頁 横書 （用箋の実寸：縦二〇六×横一六一ミリ）



〈表面〉

欧州戦乱ニツキテノ感想

家政一年 宮沢トシ

裏面ニ、小我ノ横暴、専制等ノ要求ヲ秘メテ、表面ノミノ平和ハ到底保タルベキモノデハナイ。

私利私欲デアッテモソノ極致ニ達シ行キ詰ッタ時ニハ必ラズ他ニ道ヲ開クモノデハナカラウカ。現在ノ社界ハ決シテ理想的ノ完全ナモノデハナイ。マダ真理ナラザルモノ、実相ナラザルモノガ、勢ヲ恣ニシテ居ルトコロガアル。コノ点ヨリ見テ、戦争必ズシモ悪トハ思ハレヌ。行キ詰ッテ愈々局面ノ展開スル時ニハ、ソコニ善ト悪、真ト不真、美ト醜トノ争ガ、多少無クテハナラヌ。

宇大ノ大霊在スコトヲ知ル故ニ最後ハ必ラズ、大霊ノ御心ニ適ヘルモノガ勝ツ⌐デアラウ。ソノ時ハ今ヨリ幾星霜ノ後カ殆ド予想ハ出来ナイガ、コノ世ニ天国、極楽ノ来ルコトヲ思フ。

戦争ハ人類ノ階段デアルカラ仕方ガナイ。只ソノ結果ガ最モヨクアラン事ヲ望ム。早ク、悪ヲ滅シ、暗ヲ追ヒ、玲瓏タルモノニ社会ガ成ルコトヲ願フ。

然シ又一方眼ヲ現在ノ状態ニオケバ、実ニ戦争ノ悲惨ナルコトハ、科学ニ伴ヒテ進ム⌐ヲ見セラレ、多クノ犠牲者ノ為ニ惨ミ

〈裏面〉

惜シミ、悲シマザルヲ得ヌ。

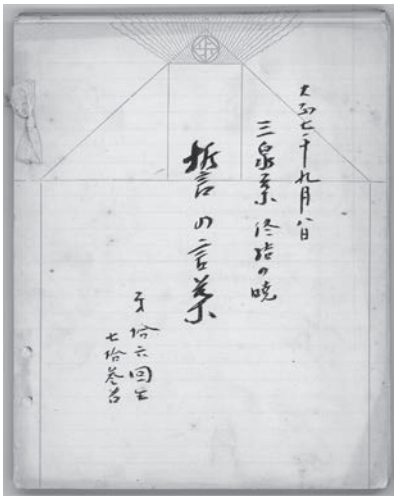
私ハ日本ノ婦人トシテ、何ヲナスベキカ、コノ戦乱ニヨリテ、大イニ暗示サレ度イト思フ。

【大正七年度】家政学部四年

《新資料②》 三泉寮 誓の言葉「祈り」 大正七年九月八日 実践倫理ノート 七五枚

表紙・第十六回生・七三人分の答案／宮澤トシの答案 横書き 用箋の実寸：縦二〇五×横一六五ミリ

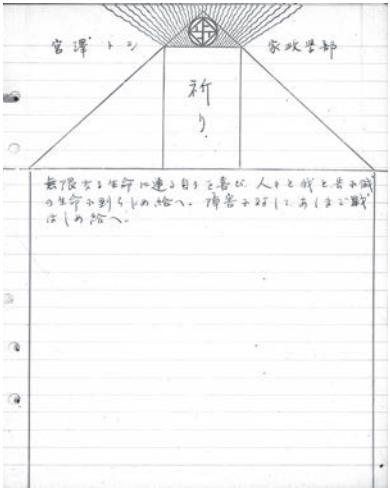
〈表紙〉



大正七年九月八日
三泉寮　終結の暁

誓の言葉

第拾六回生
七拾参名



宮澤トシ　　家政学部

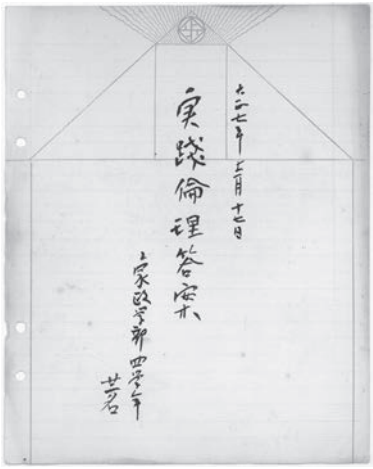
祈り

無限なる生命に連る自らを喜び、人々と我と共に誠の生命に到らしめ給へ。障害に対して、あくまで戦はしめ給へ。

《新資料③》 実践倫理答案 出欠記録 大正七年十二月十七日

実践倫理ノート 二九枚 表紙・二〇人分の答案 用箋の実寸：縦二〇五×横一六三ミリ

〈表紙〉



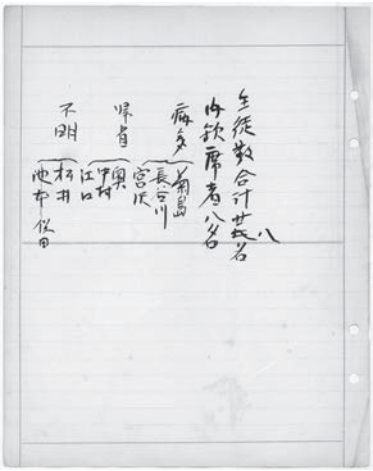
大正七年十二月十七日

実践倫理答案

家政学部四学年

廿名

〈表紙裏〉



生徒数合計廿八名

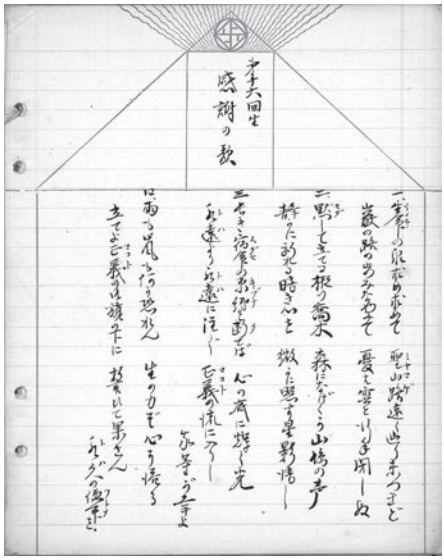
内欠席者八名

病気 菊島 長谷川 宮沢

帰省 奥 中村 江口

不明 松井 池本 飯田

《新資料㊀》 第十六回生 「感謝の歌」 大正七年九月八日
実践倫理ノート 一枚 一頁（新資料②の内） 用箋の実寸：縦二〇五×横一六四ミリ



第十六回生 感謝の歌

一、生命の泉求め求めて　聖山路遠く辿り来つれど
　巌の路の歩みなやみて　憂は雲と行手閉しぬ

二、黙して立てる樅の喬木　森になげくか山鳩の声
　静かに祈れる暗き心を　微かに照す星影清し

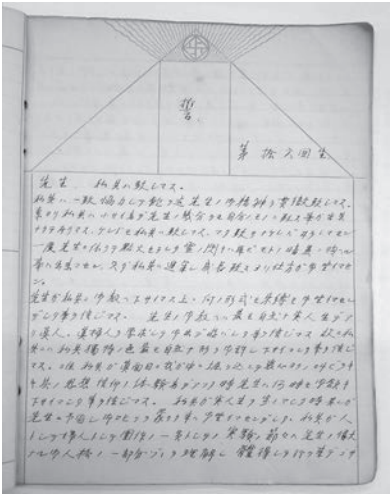
三、古き宿命の束縛を断てば　心の底に輝く光
　永遠より永遠に注ぐ　正義の流に入りし我等が幸よ

四、雨も嵐も何か恐れん　生の力ぞ心に溢る
　立てよ正義の御旗の下に　誓ひて果さん永久の使命を

《新資料㊂》 第十六回生「誓」 大正八年二月二日
実践倫理ノート 一八枚 表紙・大学部生徒一同誓言・他の学年の誓
横書き 用箋の実寸：縦二〇五×横一六三ミリ

〈表紙〉

大正八年二月二日
誓言　大学部生徒一同



誓　第拾六回生

先生、私共ハ致シマス。
私共ハ一致協力シテ飽ク迄先生ノ御精神ヲ貫徹致シマス。素ヨリ私共ハ小サイ者デ先生ノ幾分ヲモ自分ノモノニ致ス事ガ出来ナクテ居リマス。ケレドモ私共ハ致シマス。マタ致サナケレバヰラレマセン。

一度先生ニ依リテ点火セラレタ霊ノ閃キハ再ビモトノ暗愚ニ帰ヘル事ハ出来マセン。只ダ私共ハ進軍シ成長致スヨリ仕方ガ御坐イマセン。

先生ガ私共ニ御教へ下サイマス上ニ何ノ形式モ束縛モ御坐イマセンデシタ事ヲ信ジマス。先生ノ御教ヘハ最モ自然ナ実人生デアリ真人、真婦人ヲ要求シテ御出デ遊バシタ事ヲ信ジマス。故ニ私共ニハ私共独特ノ色最モ自然ナ形ヲ御許シ下サイマシタ事ヲ信ジマス。唯私共ガ真面目ニ我ガ中ニ堀リ込ンテ衷心ヨリノ叫ビヲキキ其ノ思想信仰ノ体験者デアッタ時先生ハ何時モ御頷キ下サイマシタ事ヲ信ジマス。私共ガ実人生ヲ歩ミマシタ時其レガ先生ニ矛盾シ御叱リヲ蒙ッタ事ハ御坐イマセンデシタ。私共ガ人トシテ婦人トシテ団体ノ一員トシテノ実験ノ節々ハ先生ノ偉大ナル御人格ノ一部分ヅヽヲ理解シ、体得シテ行ク事デゴザイマシタ。其レデ私共ガ常ニ憧レ断ヘズ求ムル永遠ナル生命ハ実ニ先生ノ御人格デ御坐イマシタ。コノ現実ニ最モ具体的ニ我ガ慕ヒ奉ル先生ノ御人格ヲ通シテ久遠ノ生命ヲ見オホセタ事ノ喜ビハドンナデゴザイマセウ。私共ハ如何ナル言葉ヲ以テシテモ尚コノ思ヒヲ表スニ足リマセン。アヽ其レト同時ニ先生、コノ我等ガ慕ヒ奉ル先生ガ今御病床深ク御入リ遊バサレ而モ其レガ不治ナル事ヲ存ジマシタ時我ガ生命ヲ切ルノ思ヒガシテ　思フテモ思フテモ耐ヘラレナイ事デゴザイマス。嗚呼　傷マシイ思ヒヲ以テ先生ヲ御慕ヒ申シマスガ今後ハ此処ニ私共ノ中ニ成瀬先生ヲ見出シ成瀬先生ニ成リキラナケレバナリマセン。私共ハ私共自身ノ努力ニヨリ常ニ先生ヲ見　先生ヲ体シ力強ク最後迄使命ノ為メニ尽シマス　ソシテ私共モ先生ト御一緒ニ永生致シマス。

其ノ為メ私共ハ先ヅ在校生トシテコノ妹達ノ決心ニ対シ極力助手トナリテ校風ノ充実ヲ計リ一層偉大ナ先生ノ御精神ヲ残シテ出度イト存ジマス。續イテ櫻楓会員トシテハ諸先輩ノ手足トナリ、彼ノ計劃ヲ完成シヨウトコヽニ百余名ハ堅ク誓ッタ事デ御坐イマス。

＊実践倫理ノート…

成瀬仁蔵が実践倫理講話のために考案したノート。上部のマークの○は Deity（神）、＋は Self-Identity（本体）、□は Humanity（人間性）、△は Trinity（三位一体）を表し、のちに本学の校章に取り入れられた。

特別寄稿

寅さんと健康保険

山田　洋次

政府主導の『日本創成会議』とかいうのがあって、二年ほど前「東京圏高齢者は地方に移住を」という提言がここでなされたという新聞記事を読んで、ぼくは老人の一人としてひどく興ざめというか反感を抱いたことがある。リタイアした高齢者は人口過剰の東京に住まなくてもいいのではないか、地方には過疎地も空き家もいくらでもある、物価は安いし空気はきれいだし車も少ないし、地方の人口が少しでも増えることで政府が支援する地域再生制度とやらにも寄与出来る、というような発想ではないかと推察したのだが。日本創成会議のメンバーがどのような人たちか知らないが多分まだ体力的には元気で現役でバリバリ活躍している方たちなのだろう、老人の気持ちがまったく理解できていないし、そのための聞き込み調査のようなことはせずにまるで思いつきのような意見が広い会議室で述べられたとしか思えない。

別荘暮らしが出来るセレブな老人は別として年老いたぼくたちが求める幸せな暮らしとはそういうことではまったくない。脚腰も弱った身が望むのはなによりもま

ず日々の暮らしを便利に過ごせることである。ステッキ片手に歩いて数分の距離に蕎麦屋や喫茶店や本屋があること、駅が近くて電車に一〇分か二〇分乗れば区役所や図書館があり、もう少し行けば映画館やコンサートホールがある。病院や歯医者や美容院も近所に必要だ。もう耳も遠いから住居の周辺は車の騒音などでうるさくても構わないし近くの幼稚園から幼い子どもたちの可愛い嬌声が聞こえるなど大歓迎、そう長く生きている訳ではないから空気など汚れていても気にならないし部屋は狭くてもよい。ようするに静かな田舎とは正反対の賑やかで便利な埃っぽいゴタゴタした都市空間に身を置いて老人は余生を過ごしたいのである。緑の大自然に囲まれたのびのびした暮らしなどは若い夫婦にこそふさわしい。お金のある人は都心のマンションに大金をはたいてその利便を手に入れることが出来るだろうが真面目に定年まで勤め上げたサラリーマンや勤労者にそれは無理な話である。

六〇代を過ぎ、定年退職して老いが身近になると人々はやたらに同窓会を開きたがる。会っても大した話題があるわけではないのだが。病気の話になるときりがないから健康と墓と孫の話題は避けましょう、などと冒頭に幹事が語って大笑いしたりする。しかし八〇を過ぎるとその同窓会の出席者も少なくなる。本人が介護状態か連れ合いの介護のために外出できないのである。高価な費用がかかる上級有料老人ホームは別として特養とか老健とかいわれる老人ホームにいつかぼくも入るのかと想像すると慄然とする。ぼくの母親も今から一〇年前最後の二年間を有料老人ホームで過ごしたので老人ホームは馴染みのつもりだった。しかし今身近な場所として施設を見ると気づかなかったことがいろいろ発見できる。資産の少ない人が何年も待たされた後で老健乃至特養老人ホームに入居するということは、介護人の厳しい管理下

に置かれることのようである。例えば廊下を介護者なしで一人で歩いてはいけない。もちろんステッキ片手にブラリと表に一人で散歩に出るなどは許されるわけがない、出入り口には職員しか開けられない厳重な鍵がかけられているのだ。勝手に電話をかけることは許されない、子どもや孫が外から電話する場合も職員を通さなくてはならない、なぜならオレオレ詐欺的な電話を避けるためだという。ぼくが驚くのは夕食時にアルコール類を飲むことは禁止という決まりがどこの有料老人ホームでも常識だということだ。晩酌が何よりの楽しみという老人はどんなにかつらいだろう。それもこれも管理する側の手落ちになることを避けるうえでの決まりなのだろうがそんな捕虜のような日々の暮らしのどこに老人は幸せが見いだせるのだろうか。家族に恵まれない、あるいは家族と仲が悪くて老人ホームに入るしかない老人たちはいったいどうやって晩年を過ごせばいいのだろうか。

年々出生率が減ってきて人口に対して老人のしめる割合が増加の一途をたどっていることが年金や医療、介護保険の上で大きな問題になっているが、そうなることは予見できるはずだし、その上でしかるべき政策を考えるのが政治というものだろう。散歩も出来ない、酒も電話もダメ、そんな不幸な老後のためにぼくたちの世代は懸命に過労死寸前を経験しながら働き続けて来たのではない。二度と戦争をしてはいけないということを体験的に知っているぼくたち老人は何故こんな老後を迎えることになってしまったのか。

介護に疲れて無理心中をはかる、あるいは虐待をするといった悲劇は後を絶たないのに、介護サービスの減額が政府の手で次々と打ち出されている。ぼくたちは毎月老後のために介護保険金を支払っていて（この保険自体に疑問がある、われわれはなんのためにさまざまな税金を払っているのかと問いたいところだが）介護費用の利用者負担は原則一割だが二〇一五年八月から単身者で年収二八〇万円以上の人は二割に引きあげられたというし、さらに年収三一四万円以上の人の負担を二割から三割に引き上げる改正案が国会で成立するそうだ。一方防衛費は年々増加する。北朝鮮を威嚇すべく西太平洋に米日の巨大な軍艦が集まって訓練をするという報道を読みながら、いったいそのためにどれくらいの膨大な費用が費やされるのだろうか、なんと気前のいい税金の浪費が国防という名目でなされるのだろうかと溜息が出てくる。

もう四〇年近く前のこと、寅さんシリーズの二〇作目

だったか、旅先の寅さんの身を案じた妹のさくらとおばちゃんがこんな会話を交わしたことがある。

「いま頃どうしているだろうあの男、旅先で病気でもしてなきゃいいけど」

「お兄ちゃん健康保険にも入っていないしね」

この作品が封切られて間もなく厚生省のしかるべき課のお役人から丁寧なお便りを頂いた。そこには「過日寅さんを拝見して件のセリフを聞き心を痛めております。国民皆保険の実現のためにわれわれは日夜つとめていますが、寅さんのような住所不定の人でもさくらさんの住所で登録すれば必ず保険に加入出来ますので是非よろしくお願いします」という趣旨のことが書かれていて、なんと誠実な公務員がいることだろうと感心したことがある。今日の政府が、あるいは現在の公務員がこの人のように心を込めて国民の幸せのために努力してくれているのだろうか？

寅さんならずとも先々のこと、身体が不自由になった老後のことを考えると不安にならない人はいないだろう。人口の減少がいわれているが、結婚する若者たちが老後に不安を抱くようであれば子どもを作ることを恐れるのは当然だろう。この不安を解消して誰もが安心して老後を迎えられるための幸せなシステムを打ちたてるということは、ぼくたちの国にとって実はたった二週間のオリンピックなどより遥かに重要な政治的課題ではないだろうか。

（映画監督・二〇〇四年文化功労者
二〇一二年文化勲章受章　やまだ　ようじ）

山田洋次映画監督の特別寄稿によせて
―山田よし恵さんから広がる学園の世界―

大門　泰子

この度、本誌に山田洋次映画監督から特別寄稿をいただいた。高齢化社会の現代、この問題に強い関心をもっている方も少なくないであろう。監督の妻よし恵さんが本学卒業生であることから、山田監督にはこれまでにも学園関連のさまざまな行事にお越しいただき、ご教示をいただいてきた。ここにあらためて、山田よし恵さんのことをご紹介する。

二〇〇八年一一月一三日、山田洋次映画監督と俳優吉永小百合さんが目白キャンパスの構内を中嶌邦名誉教授

に案内されて歩く姿があった。その日は成瀬記念講堂において監督の講演と最新作映画「母べえ」を上映する会が「平塚らいてうの記録映画を上映する会」によって企画されていたが、映画の主演をつとめた吉永小百合さんの登壇は想定外のことであった。

妻よし恵さんが五日前に亡くなり、ご葬儀の翌日にもかかわらず日本女子大学での講演会に赴くという監督を吉永さんは心配して応援に駆けつけ、壇上にあがったという。監督は、「妻が企画した会だから」と明るくユーモアを交えて映画の製作秘話などを語られたが、その裏には、苦しい息の下「講演には行ってね」とつぶやいたよし恵さんの声の後押しがあった（『毎日新聞』二〇〇八年一一月一四日）。

山田洋次監督との出会い

山田よし恵さんは、新制六回史学科の卒業生である。一九九四年九月、教養特別講義で登壇した山田洋次監督は「映画をつくる」と題した講話の冒頭で「私の妻はその当時、この大学の学生だったわけです（中略）この土地は私にとって大切な、特別な土地であり、青春の地であります。私にとってたいへんなじみのある大学」と語っている（『日本をみつめるために　日本女子大学教養特別講義第二九集』）。

山田監督とよし恵さんの出会いは、お二人がそれぞれの大学の寮生だったことに始まる。東京大学の巣鴨の学生寮に住んでいた山田氏は仲間とともに「豊島区にある全大学の寮生を組織する」というテーマを掲げて、本学の学生寮を訪れた。

寮の正門脇の守衛室に黒い眼鏡をかけた大男のおやじがいて、そいつに恐い顔で睨みつけられながらまるで敵地に赴くような悲壮な思いのぼくたちは紹介状を見せ、ようやく許可を得て寒香寮という木造の上品な建物に通されました。そこでお互い緊張してカチカチになりながら逢った何人かの女子大の中に、ひときわ明るい声でよく笑う人がいてその人のことが忘れられなくて、まあ恋の始まりと言うことなのかな、それがぼくの妻になった人だったのです。

（「憧れの「目白」」『桜楓新報』727号二〇一五年）

よし恵さんは寒香寮の寮生であった。当時、寮舎は全部で二〇棟余あり、そのなかでも寒香寮は古くて規模は小さく、寮生と寮監、食事のまかないの人を含めて二五人ほどの所帯であった。大部屋は七人、六畳間は三人の相部屋、一階の玄関脇に応接間があり、客人の応対はすべてここでなされた。そこには新聞のほかに共同で購入

した雑誌『世界』『婦人公論』『文芸春秋』がおかれていた。寮での食事作りや否応なくの定期的な部屋替えを通じて「対人関係の広さ」を身につけたことは、結婚後、「子どもとの関りの中でのＰＴＡなどいろんな人とスムーズにつき合う術も学んだ」とよし恵さんはいう。

寮舎の自治会委員長までつとめたよし恵さんであるが、五〇代の寮監と「男女共学のはしりを体験」して女子大に入学した寮生の関係は「必ずしもいい関係であったとはいい難」かったとふり返っている。

帰寮時間をおくれてしのび込む者、明らかに外出先を偽って出かける者に対し「間違いのないよう」と思う寮監の立場と、はちきれんばかりの希望と可能性を求めて地方から上京してきた寮生が、帰寮時間七時の中に収まるわけはなかった。

（『日本女子大学学寮の思い出』一九九五年）

友人たちの誰もが、明るくていつも上手に周囲をまとめ、皆が頼りにする存在と評するよし恵さんもおそらく収まることのできない一人であったのだろう。よし恵さんの青春を山田監督が綴っている。

寮生同士の交際が始まりました。今なら合コンというところ、でもお酒を飲むような店はなかったしお金もない、合コンの場所は新宿御苑が多かった。芝生に座ってのどが渇けば自販機などはないから水飲み場で水を飲んで語り合う、おしゃべりに飽きれば歌を歌うのです。（中略）誘い合ってデモに行ったこともあります。もちろん大学には内緒で。スクラムといって腕を組んで歌を歌いながら大通りを歩く、その腕を通して彼女の体温がかすかに伝わってくる…幸せとはこういうことなのかと胸が熱くなったのはもう六十年あまり昔のことです。

いつもお腹がすいていた、暖かいセーターが欲しくてたまらなかった、岩波文庫を買いたかった、そして恋がしたかった、好きな女性と一緒に暮らせるなら恐いものなんかなにもない…大まじめにそんなことを思っていた（以下略）

（前掲『桜楓新報』）

よし恵さんが大学を卒業して間もなく、お二人は結婚した。「会費制の宴で、賑やかななかに、すらりと美しく笑顔の魅力的な花嫁」姿を恩師の中嶌邦は偲んでいる（「山田よし恵さんを偲んで」『らいてうを学ぶなかで』３　二〇一一年）。

平塚らいてう研究会

平塚らいてうの生誕一〇〇年にあたる一九八六年、平

塚らいてう研究家や当時の日本女子大学学長青木生子らが、らいてうの同窓会会員資格復権の声をあげた。らいてうは、一九〇八年の心中未遂事件により同窓会を除名されていたのである。復権は一九九二年まで持ち越されたが、その前から、らいてうの思想を学びたいと望む卒業生らが「平塚らいてう研究会」を設立しようと動き、一九九一年秋、「日本女子大学平塚らいてう研究会」を発足させた。その中心となったのがよし恵さんであった。恩師の史学科教授中嶌邦を巻き込み、持ち前の魅力で友人に呼びかけ、責任者となっている。自身の研究テーマは、「保持研子（やすもちよしこ）」。研究論文では「彼女の実務的な能力—広告とり、出版社との交渉—なくしては、早くから会を組織化することができなかっただろう」と、らいてうの片腕となって『青鞜』の創刊を助けた保持研子を評価した（『桜楓新報』524号一九九五年・「『青鞜』と保持研子」『らいてうを学ぶなかで』1　一九九七年）。映画界で仕事をしている夫の妻ならではの目の付けどころと思えるが、実はよし恵さん自身が、まさに実務的な能力に長けた人であった。この力は、「平塚らいてうの記録映画」製作で発揮される。

日本女子大学平塚らいてう研究会にて　後列右端がよし恵さん
1995年9月　日本女子大学平塚らいてう研究会提供

らいてうを記録する映画から「平塚らいてう賞」へ

一九九九年二月、「平塚らいてうの生涯を資料と証言で再現し、その女性解放への願い、平和への祈りを後世に伝えたい」と映画の自主製作の計画が発表された。映画監督には記録映画作家の羽田澄子、青木生子前学長を筆頭に岩波ホール支配人の高野悦子、作家の瀬戸内寂聴など発起人は二〇人、よし恵さんもその一人であった。映画製作の苦労を最も知るよし恵さんは「映画製作にはまずはお金が必要、みんなで募金活動をしましょう」と先頭にたって動き始めたという。

五〇〇〇万円の費用を募金で集めるのは容易なことではなかったものの、完成した映画の上映は好調で、「想像もしなかった」一〇〇〇万円の利益を生じた。その半分が日本女子大学に寄付され、二〇〇五年に創設された「平塚らいてう賞」の基金となったのである。同賞は「平塚らいてう氏の遺志を継承し、男女共同参画社会の実現および女性解放を通じた世界平和に関する研究や活動の顕彰と激励をはかる」ことを目的としてうたっている。

「平塚らいてうの記録映画のあゆみ」の最後に「らいてうの映画をつくっておいてよかった、と今つくづく思う」とよし恵さんは記す。

一九五〇年朝鮮戦争が始まった。らいてうは日本女子大学の元学長の上代たのら女性五人で、「非武装国日本女性の講話問題に関する要望書」を、来日中のダレス米国務長官に手渡しすることにしたという。その英語の文は上代たのがつくったものだとか。どうしたら戦争は避けられるか、平和は守られるかを問いつづけた人であった。

このような立派な女性達の努力のもとに、今日の私達女性の権利は確立されたということ（中略）らいてうの志を継ぐべく、世の中の事を考え、まともな世の中を取り戻すべく、いろいろな形で今後も集まりを持ちたいと思っている。

（「平塚らいてうの記録映画のあゆみ」『らいてうを学ぶなかで』2　二〇〇七年）

よし恵さんは、常に何事にも前向きで、亡くなる直前まで仲間と行動をともにしていた。

研究会の仲間とらいてうの家（信州）を訪ねた時に　後列左端がよし恵さん
2008年9月　日本女子大学平塚らいてう研究会提供

よし恵さんの遺志を受け継ぐ

二〇一三年一二月、日本女子大学総合研究所研究課題51主催の第一一回「平和の集い」に山田洋次監督が来られ、本学の附属中学生・高校生、大学生らと対談するという催しがあった。新作映画「小さいおうち」を鑑賞した生徒、学生らが映画の感想や戦争について語り、山田監督と平和について対談した。後日監督から「もっとも輝かしく美しい青春のみなさんが、これほどまでに平和について考えているということ。久々に妻の姿を皆さんを通して見ることができました」とメッセージが届けられた。それは二度と戦争をしてはいけないと語り続けている山田監督の本学平和学習に対する大きな期待に他ならない。監督は、二〇一五年一一月にも、本学で開催された「平和を語る会」にお越し下さっている（『日本女子大学学園ニュース』240・250号 二〇一四年二月・二〇一六年二月）。

第11回平和の集い　2013年12月

第11回平塚らいてう賞授賞式　2015年11月

二〇一五年一一月、「日本女子大学平塚らいてう研究会」が第一一回平塚らいてう賞顕彰を受賞した。山田監督がお祝いに駆けつけてくださった。よし恵さん亡き後も、毎月、研究会が持たれ、翌年の受賞記念講演にあわせて研究誌『らいてうを学ぶなかで』4も発行されている。よし恵さんの遺志は、夫の洋次氏も巻き込んで、本学でしっかりと受け継がれているのである。

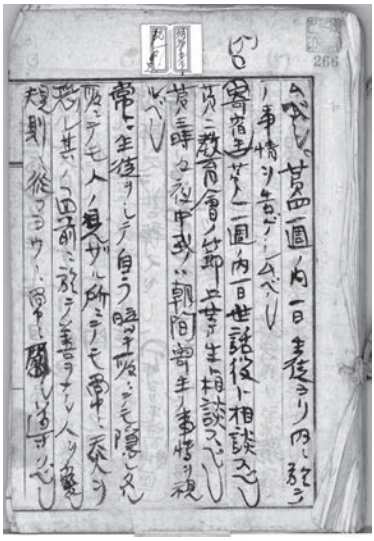
学園という社会は、在学生や卒業生、教職員など直接的に関わる人々だけで毎日があるのではなく、外から絶えず空気が入ること、関係をもってくださる方々がいらっしゃることで生き生きとしてくる。卒業生のご家族もまた、そうした新しい風を送ってくださっていることを山田洋次監督を通して強く感じる。

（成瀬記念館非常勤スタッフ　おおかどやすこ）

資料紹介　1

梅花女学校教育日誌

片桐　芳雄



二つ折り罫紙　縦二三・〇×横一五・五㎝
資料番号　Ｄ２６６
二〇一七年度中に翻刻刊行予定

本資料は、前半部を欠いた寄宿生の指導に関する記述につづき「明治十五年四月ヨリ」とあるので、一八八二（明治一五）年四月以前から、遅くとも成瀬仁蔵が梅花女学校教員を辞職する同年八月までに作成されたものと思われる。

内容は、寄宿生の指導方法や教育方針、各学年の教科目や生徒名、教科指導の具体的方法、さらには定期試験の問題や試験方法等、梅花女学校の教育状況を知ることができる貴重な資料である。

梅花女学校は、一八七八（明治一一）年一月一八日、大阪府の設置認可を受け正式に設立された。それに先立つ一月七日の開校式で、成瀬仁蔵は設立の辞を述べた。創設の中心は澤山保羅であったが、学校運営のほとんどが成瀬仁蔵に任された。

成瀬は、一八八二年八月二六日、学校運営の独立自給主義をめぐる意見対立で教員を辞職したが、本資料は、その直前まで、成瀬が熱心に教育活動を行なっていたことを示している。

最初の寄宿生に関する資料では、生徒が互いに「品行」について語り合う「問答会」、子ども連れで寄宿している生徒がいたことをうかがわせる「寄宿ノ小児ニ就テ」の項、聖書を毎朝暗記させていたことなど、寄宿舎生活の実情を垣間見ることができる。また「吾等ハ学校を神ノ家となし」との表現も見える。

泣く生徒の指導法、生徒同士のトラブルへの対応法、教師の命令に背いた場合の「罰点」のつけ方等、生徒への細やかな心遣いとともに、厳しい指導のあり方もうかがわせる。「故ニ諸生徒たちよ、余ハ万事汝等の品行ニ目を注ぎ勧めるゆへ、之を厭ふこと勿れ」と、成瀬は、自らの指導法への想いを記している。

「明治十五年四月ヨリ」とある箇所からは、具体的な授業方法や試験法について書かれている。

まず「研究」の項に「生徒ヲシテ己ノ力ヲ用ヰテ之ヲ研究せしむべし」などとあるのが注目される。「智識ノ取方」という項でも「生徒自ら成し得る事ハ、何ニ限らず自ら種々ノ工ヲなさしむ可し」とある。算術の問題も生徒自らに作らせ、作文の締切日も生徒自らに決めさせる。これは生徒の主体性を生かし、生徒自らが「愉快なると思ふ」ことを期待するからである。文章指導でも、生徒自身に話を作らせ、これを「塗板」（黒板）に綴らせる。「毎日教場の面白きを主とす」ることを目指したのである。

とりわけ最下級生の第八組の指導には、さまざまな工夫がなされている。文字指導ではカルタを活用し、数の数え方では、家の畳や障子の数を数えさせた。また「可成愉快なる為めに遊戯ノ如き事」をした。試験で成績の良かった者には、褒美として絵を与えた。算術の初歩では、厚紙で作った「銭」を図で示し、これを使いながら教える工夫もした。

このような工夫は、生徒たちの日常生活と教育内容を結び付けることによって、生徒の主体性を引き出そうとする試みでもあった。

こうした様々な工夫は、多くの組を、ほとんど一人で担当しなければならない、困難な事情に対応したものでもあった。

成瀬は「自助」の項に、「多くの組ヲ一人ノ教師ニて教ゆれ僅ノ弊害あれ共、常ニ其法方よく定むれば損より益多し。即ち大ニ実地ノ学活用し、学問己れノ実智得る

なり。」と記した。悪条件を、逆に、前向きにとらえようとする、いかにも成瀬らしい積極的な姿勢であった。

この方法は同時に、澤山保羅の伝記 *A Modern Paul in Japan*（新井明訳『澤山保羅―現代日本のポウロ―』日本女子大学、二〇〇一年）で述べたように、メリー・ライオンが創設したマウント・ホリヨーク女子セミナリーの教育方法を範にしたものでもあった。のちに日本女子大学校の教育方法となった「自学自動」教育の源が、すでにここに胚胎していたことは注目すべきである。

全部で八組（あるいは七組）の授業を、成瀬一人で担当することは困難であったので、上級生に授業や試験の手伝いをさせた。「長女」とあるのは上級生のことであろう。とりわけ最上級生の安田サイ（「安田才」）が頼りにされたようである。また「酒井氏」は酒井貞躬、歌担当の「コールビー氏」とは、女学校内に居住していた女性宣教師である。

この資料から、この時期の梅花女学校の生徒数がほぼ四五名であったことが判明する。上級から第一組五名、第二組一五名、第三組〇名、第四組八名、第五組五名、第六組四名、第七組八名の合計四五名であるが、この数字は、あとに出てくる「席順」の生徒数四四名とは食い違う。生徒名にも一致しないところがあり、一～二名の生徒の出入りがあったものと思われる。

組編制は、上記箇所では七組制で、第三組に生徒がいないのは、第二組に合併して授業をしたためであろう。但し、のちの箇所では八組制になっている。

生徒名では、『成瀬先生追懐録』（桜楓会出版部、一九二八年）に文章を寄せている山岡はる子（「北住春」）とその妹梅、土倉庄三郎の娘、長女富子、次女政子、三女糸、四女小糸、土倉が連れてきた親戚の二人の娘、作間栄（佐久間菊）、舘せいなどの名前が確認できる。前神松枝とあるのは、成瀬が大変世話になった前神醇一の娘である。なお安田サイは、のちに澤山保羅の後任として浪花教会牧師となった亀山昇と結婚した。

資料の最後には試験問題が記されている。六月の定期試験のために準備されたものであろう。

心理学の問題は、ジョセフ・ヘヴン著（西周訳）『奚般氏著：心理学』（文部省、一八七八年）に依拠している。この教科書は明治維新後最初に翻訳された心理学教科書として広く利用された。もっともこの書の原題は *Mental philosophy : including the intellect, sensibilities, and will*（「知・情・意を含む精神哲学」）であって、今日一般に言う「心理学」psychology ではない。したがって内容も道徳哲学的なものである。

ちなみにジョセフ・ヘヴン Joseph Haven（一八一六―一八七四）は、アメリカの神学者で哲学者である。アンドーヴァー神学校で学んだことがあるというから、成瀬とも縁があったわけである。

つぎに算術の応用問題が出てくる。対象とする組が不明なので、難易は、にわかには決しがたいが「一婦アリ、木綿若干尺ヲ買ヒ、其ノ三分ノ一ヲ足袋トナシ、又其ノ残ノ二分ノ一ヲ手拭トナシタリ、然ルニ残リ三尺ありし、然れバ初めニ幾何尺ヲ買ひしや」といった問題は、いかにも女学校らしい試験問題である。

修身、生理学に続いて、物理学の試験問題が記されている。これは片山淳吉編『物理階梯』（文部省、一八七六年）に依拠している。「填充性」「礙竄性」「無盡性」など今日使われない語が出てくるが、すべて『物理階梯』のものである。

梅花女学校の教育状況について、『成瀬先生傳』（桜楓会出版部、一九二八年）は、「外国人教師は英語音楽（その一人は初めレヴィット氏で、音楽を教へたといふ）を教へ、澤山氏が基督教の講義をした外、普通学は初めの間全部先生の担当であつた」と記し（五六～五七頁）、成瀬自身も「私ハ一人デ五ツノ組ヲ担当シテ居リマシタ。其時ニハ倫理ハ無論ノ事、代数モ幾何モ物理モ化学モ教育モ心理学モ一切一人デ教ヘテ居リマシタ」と回想しているが（「ペスタロッチ氏ノ続キ」一九〇五年一月一四日『実践倫理講話筆記・明治三十七・三十八年度ノ部』日本女子大学成瀬記念館、二〇〇九年）、本資料によって、これが、ほぼ事実であることが確認できる。

また、山岡はる子も『成瀬先生追懐録』のなかで、「経済上他の教師を聘する事が出来ませんから上級生に手伝はしめ、国語、科学等は全部先生お一人にて引受けられ」、「お一人故教程を同時に教授せねばならず、此の組に数学を教へ題を与へおきては、彼の組に心理を講義せられ、此の組に作文を教へおきては彼の組に物理或は教育論を教へらるゝなど」（八四～八五頁）と、生徒の立場から、教師成瀬の教授方法を具体的に述べているが、これもまた本資料の記述と符合する。

さらに『成瀬先生傳』に、以下の記述がある。冒頭の「或る人」とは誰のことかは不明だが、その人物が保存していた「当時の日誌」とは、本資料のことであろう。本資料の、的確な解説になっているので、参考のため引用しておきたい。

「或る人の手許に保存された当時の日誌を見ると、この時の教育に関する方針、方法、学科及び取扱ひ方、試業法及び問題、寮舎の管理、生徒名（或る一時の）など

が、ほんの心覚えではあるが、かなり精しく記されてある。その当時、いかに綿密な注意を以て、いかに熱心に従事してゐたかゞ、之に依つて推察される。先生の教育法は、当時既に大に自発自学的で、而して全く生徒本位であつた。生徒の希望をきゝ、規則も生徒に考へさせ、日課の進程も生徒にきめさせる。而してその勉学法も各自の工夫を教師が訂正して、自ら研究させ、生徒が疑問を解くことのできない場合に、始めて教師の説明を与へるといふ方針であつた。教室内などの乱れたときは、之を直ちに叱責したりする代りに、生徒各自の研究問題として、どうすれば静粛に整頓されるかを、時を与へて考へさせる。総て罪を責めるよりも、改める道を示すといふ風であつた。一週一回問答会といふものを開いて、各自に実践修養上の問題を出させ、生徒間の解答の不足を教師が補ふといふ方法もとつてゐた。一方罰点の制などを設けて、かなり厳重に怠惰と自恣とを戒めたのであるが、其の本旨は全く自発的研究的で、従つて当時としては甚だ斬新な、デモクラチックなものであつたのである。」（五九～六〇頁）

（日本女子大学名誉教授　かたぎり　よしお）

資料紹介　2

「女子教育之方針」「種子」

洋紙ノート　上綴じ　縦二〇・〇×横一一・八㎝
資料番号　D2008
二〇一七年度中に翻刻刊行予定

片桐　芳雄

全二〇〇頁の冊子である。表に「女子教育之方針」、裏に「種子」と表題が書かれており、表から約一五〇頁に女子教育をめぐる所見、裏から五〇頁ほどに「種子」、すなわち「前半部」の所見を得るための取材メモといったものが記されている。もっとも、「前半部」と「後半部」の境い目の一五〇頁前後は、錯綜しており、明確に分け難いところがある。また、携帯して使用したこともあったらしく、破損している個所もある。

書かれた時期は、『日本女子大学成瀬記念館収蔵資料目録1』に、「一八九三（明治二六）年頃」とあるが、一八九一（明治二四）年のウエルズリー・カレッジ訪問時のメモらしきものが入っている。さらに七頁の「十二日 Thirsday」はカレンダーで確認すると一八九一年三月一二日木曜日と思われるから、四頁の「三月十日」は同年三月一〇日であろう。よってこの冊子は、遅くともこれ以前に書き始めたものと思われる。また「前半部」の

最終箇所、一四九頁にある「加藤政之助の女子教育の方針」は、糊付けして綴じ込まれた『郵便報知新聞』の一八九一年一二月一三日号と一四日号の加藤政之助の論説を踏まえて書かれたものである。

すなわち、一八九一年一月に渡米した成瀬仁蔵は、二月一日の日記に、三年間の留学期間中に研究すべき事項として「神学上の問題」とともに「女子教育之方針」を挙げたが、「神学上の問題」を主として日記に記す一方で、それとは別に、女子教育に関する考察メモを、作成し始めたのだった。そして留学生活一年目の一八九一年中に、この冊子を使いきったのである。

「後半部」の一八一～一六三頁はウエルズリー訪問時の取材メモらしきものである（「前半部」五七～五八頁にも）。鉛筆書きの断片的なメモで不明な箇所も多いが、校内を移動しながら書いたのであろう。強い関心をもって同校を見学する成瀬の息づかいが感じられる貴重な資料である。

一八五～一八四頁の英語による祈祷文も、ウエルズリー滞在中のものかもしれない。また九八～一〇七頁の英文原稿は、ウエルズリーその他で挨拶を求められた時のものであろう。推敲を重ねた様子に、成瀬の意気込みと緊張感が伝わってくる。

「前半部」冒頭の英文メモは、女子教育について、成瀬がアメリカで、どのような事項に関心を持ったかを示すものとして注目される。項目の前に付された○や△、あるいは一～五項目に書き込まれた月が具体的に何を意味するかは分からないが、おそらく成瀬は、必要な調査を着々と計画的に進めようとしたのであろう。三頁は、前頁の項目を、女子教育に焦点化して、より整理しようとしたものかもしれない。成瀬の女子教育への熱意が強く感じられる。

「後半部」の冒頭二〇〇～一八八頁あたりに列挙された質問項目は（一六二～一六三頁も含め）、「前半部」冒頭のメモを質問形式にして、実際の取材時に役立てようとしたものであろう。日本語と英訳を対照させて、ウエルズリー訪問時はもちろん、他のインタビューの機会などにも活用されたであろう。

これらの質問事項の設定には、留学一年目に師事したタッカー教授との議論の内容が、かなり反映しているのではないかと思われる。そもそも、タッカー教授から受けた週一時間の個人指導のために、準備されたものかもしれない。後述する「婦人の範囲」といったテーマは、タッカーのアドバイスなしには取り上げられなかったものであろう。

本資料には、明らかに、成瀬のものではない筆跡の英文資料もある。例えば一五〇頁に綴じ込まれたメモは、タッカー夫人によって書かれたものと思われる。内容は、結婚して、妻でありながら社会的にも重要な活動をする著名な二人の女性についてのものであるが、おそらく、こういう事例を紹介してほしいという成瀬の要望に応えたものであろう。タッカー夫人は、スミス・カレッジ卒業で同窓会長も務めた才媛であった。彼女が成瀬に貢献したのは、病中に食事を届けただけではないのである。

なお筆記用具は、日本文は毛筆、英文はペンであるが、一三一頁から日本文もペンが使われるようになる。この頃からペンの使用に慣れてきたということであろうか。

「前半部」には、一五四項目の所感が記されている。その内容は、多くは女子教育に関するものだが、より幅広く、女性観に関するもののほか、一般的な人間観や教育観・社会観についても書かれている。

一六〜一八頁の「女子教育方針・女子の目的」は、『成瀬先生傳』（桜楓会出版部、一九二八年）一四七頁にも引用されているが、一一三〜一一五頁の「女子教育之方針」にはさらに具体的な項目が列挙されており、考察が深まったことを窺わせる。

二一頁以下の「学校制度（日本）」も、当時の日本の学校制度を考えると興味深い。「朝夕女学校」「女友会」「市の夜学校」などの具体的提案もある。女子大学については、上記「女子教育之方針」の項に出てくるが、七四頁の「女子大学」、一四九頁の「女子大学の必要」など、独立の項目としても挙げられている。七四頁に「都（すべ）て自治ノ道ヲ定」めとあるように、「自治」「自立」「自動」「自活」などの語が使用されているのも注目すべきであろう。一一五頁の「徳育」には、「精神的、自治自動的、自治的、実行的」とある。

女性観に関わって注目すべきは「婦人の範囲」（The Sphere of Woman 又は Woman's Sphere）という語がしばしば使用されていることである。

アメリカ社会において「女性の領域」は、一九世紀初めの産業革命を経るなかで生れた（有賀夏紀『アメリカ・フェミニズムの社会史』）。市場経済の発展で、男性たちは家の外に仕事場を求め、家庭が「女性の領域」となった。家庭を担うにふさわしい賢母良妻の育成のために、女子教育の充実が求められた。女子教育の充実は、小学校教員や看護師をはじめ、医師や弁護士等々の専門的職業にも、女性の進路を開くことにもなり、「女性の領域」は拡大した。

こうしてあらためて、「女性の領域」とは何か、が問

われることとなった。成瀬が「婦人の範囲」に関心を持ったのは、こうした時代だった。

成瀬は、留学間もない時期にウエルズリーを訪問したさい、この問題で教授たちと議論している。彼らの多くは、男女の職務の範囲は異ならないとの見解であった。これに対して成瀬は、「併し余は未だ之に一致するを得ず」（『成瀬仁蔵著作集』第一巻二二五頁）と記している。

四五～四六頁を見るように、成瀬にとって「婦人の範囲」は、まず第一に「家」であった。「女子の職業」（四七頁）も「凡テ家ヲ作るの助ク為大事」なのであった。

しかし「女性の領域」をめぐる議論は、成瀬にとっても新鮮で刺激的であったろう。成瀬が師事したタッカーは女性問題にも深い関心を持つ人物であったが、五二～五三頁に示されたように、彼は、「ホームヲ作ル事」のほかに、社会、教育、経済、学術、政治等々、多様な「婦人の範囲」があることを、成瀬に説いた。

したがって成瀬は、「教育ノ順序」（三六～三七頁）で、「何ノ為ニ女子の教育スルヤ」と自問して、「第一彼れ自身ノ為」と自答した。「日本女子の有様」（一三一～一三二頁）では、「日本女子の有様ハ罪、病、死、盲、ツンボ、飢餓、孤独、擒（とりこ）、下賤、等也（physical & spiritual）」と記した。さらに「男女上下平等論」（一三二～一三三頁）では、「何の業ヲ取ル貴賤ナキ焉（なり）。天子ト人民。師ト弟子。其幸福。貴卑同等なり。」「凡ての人ニ貴処（とうときところ）誉（ほむべ）可き処あり。之を平等ニスルヲ忘ル可らず。即ち（偏）トイフ字ヲ悪（にく）ム可し」と記した。そして成瀬は、一五三頁には、「女子の職業と家政の関係等深く研究せざる可らず」と記すに至るのである。

このように、タッカー教授との議論を通して、成瀬の、女子教育に関する知見が深められていったのではないか。その際タッカー夫人の役割が、少なくなかったことは、上述した通りである。

このほか、一九九頁の「女子の範囲如何」という質問事項も興味深い。この中にはアメリカで有名な女性の氏名を尋ねたものもある。成瀬は、このような事例に学びながら、優れた女性たちを養成する女子大学の構想に想いを巡らせたことであろう。

「前半部」冒頭で、しばしばメリー・ライオンに関する記述があることも注目すべきである。メリー・ライオンは、アメリカ女子高等教育機関の先駆とされるマウント・ホリヨーク女子セミナリーの創設者であり、一八八一年刊行の『婦女子の職務』でも紹介していた。そもそも梅花女学校はマウント・ホリヨークをモデルにしたという。おまけに成瀬が寄宿しすっかり世話になっ

たレビット家の夫人は、マウント・ホリヨークの卒業生でメリー・ライオンの弟子であった（五頁）。日本女子大学の教育について、ウエルズリーのみならず、マウント・ホリヨークからも、多くの示唆を得たであろう。

英文の箇所には、読書ノートとみられるものが多い。例えば一二一頁の「Duties of women」は、有名な女性社会活動家 Frances Power Cobbe（一八二二―一九〇四）の同名の著書であり、一二三頁の「Characteristics of Women」は英国の女性作家 Anna Brownell Jameson（一七九四―一八六〇）の著書である。これらの本は成瀬文庫にも収蔵されており、成瀬による書き込みやアンダーラインがある。また一三四頁以下はハーバート・スペンサー著『教育論』のノートである。

最後に八〇頁の「義損（ママ）之義務」に注目しておきたい。「富者ハ自ら己の義務を識り、相当之義損を為し、貧人の進歩利益を計」るべきだと記した成瀬は、アメリカの学校が、そのような「道徳心」と「慈善心」によって維持されていることに、強い印象を受けたであろう。女子大学設立のための、精力的な寄付金集めのエネルギーは、こうしたアメリカの精神に学んだ結果でもあった。

なお成瀬はこの時期、表紙に「衛生・料理・遊戯・家ノ建築法」と書かれたノート（資料 D2013）を、別に作成している。ここには「前半部」冒頭の英文メモの二〇項目中七～一三項目に関わる事項が書かれている。「女子教育之方針」が女子教育の基本方針についてのノートであるのに対して、こちらのノートには、言わば、女子教育の内容、家政に関する事項が記されたとも言えよう。

（日本女子大学名誉教授　かたぎり　よしお）

資料紹介　3

成瀬仁蔵のアメリカ留学時代再考

大森　秀子

洋紙ノート　上綴じ　縦二〇・九×横一一・二㎝
資料番号　D2014
二〇一七年度中に翻刻刊行予定

成瀬仁蔵はアメリカ留学のために日本を一八九〇年一二月一六日に出発し、サンフランシスコ到着後、シカゴ経由でボストンに入り、マサチューセッツ州で約三年間を過ごした。近年、『日本女子大学成瀬記念館収蔵資料目録1　旧成瀬記念室資料』（二〇一四年）が刊行された。成瀬のアメリカ留学時代の史料が写真掲載され、成瀬の綴った日記・ノートの所在が明らかとなった。それらは執筆年のはっきりしないものも含めて全部で九点存在する。『成瀬仁蔵著作集　第一巻』に掲載された日記は、一八九一年四月下旬～一八九二年一月二七日と、一八九二年五月八日～一八九三年五月一日の内容を記しており、上記のうち、五点の史料が関係している。同『著作集』ではアメリカ到着前後から一八九一年三月までの内容、一八九二年一月末から一八九二年五月上旬までの

内容、一八九三年五月以降の内容が欠けていることから、その時期に相当する四点の史料の中で、一八九二年一月二四日のノート（資料Ｄ２０１４）は、成瀬が女子高等教育研究へと専心していくプロセスを探る上で貴重である。

一八九二年一月二四日のノートは縦二〇・九センチ、横一一・二センチの大きさの外国製ノートである。赤茶色の孔雀模様の美しい表紙をもつノートに破損はほとんどみられず、状態は良好でしっかりとした形状をとどめている。成瀬がノートを記した場所はマサチューセッツ州アンドーヴァー、扱われているテーマは娯楽、社会改革の方法、文芸、読書等である。本文に記された日付は一八九二年一月二四日、二月一八日の二日のみである。一月の日付はおよそ書き出し部分に記されており、二月の日付はノート三分の一を過ぎたあたりに登場する。約一四〇頁から成るノートの大半は英文で執筆されており、それぞれの英文の後に、成瀬自身のコメントが和文で続いている。英文は次の二冊の本からの引用である。一冊は、W・スタンリー・ジェヴォンズ（W. Stanley Jevons, 1835–1882）の *Methods of Social Reform and Other Papers*（一八八三年）、もう一冊はフレデリック・W・ソーヤ（Frederic W. Sawyer, 1810–1875）の *A Plea for Amusements*（一八四七年）である[1]。成瀬文庫にはジェヴォンズの *Methods of Social Reform and Other Papers* (London: Macmillan, 1904) が保存されているが、帰国後に入手したものである。ジェヴォンズは一九世紀の有名なイギリスの経済学者で、ミルの功利主義における道徳的・倫理的感情という質的な側面を、経済政策方法論として取り扱い、社会改革について論じた[2]。一方、ソーヤはメイン州生まれのアメリカ人で、一八四〇年にボストンで弁護士を開業し、the Pawners' bank を設立している。ソーヤの主著に、*Merchat's and Shipmaster's Guide*（一八四〇年）等がある[3]。

ジェヴォンズの『社会改革の方法・諸論文集』は六つのエッセー[4]と一一の論文・講演録等から成っている。このうち、成瀬は主に「人々の娯楽」（一八七八年）というエッセーの原文を数頁に亘って筆写した。成瀬が興味を示したのは、公共の娯楽と文明との関係について論じた箇所である。義務教育制度が成立しながらも、犯罪や無知、アルコール依存といった社会の歪みが減じることのない一八八〇年前後にあって、ジェヴォンズは学校外の劇場、美術館、公共図書館、科学講義といった社会制度のもつ価値を評価している。これを受けて、成瀬は「人は幸あらざは何事も出来ず又之を得る為には生命をも投

るもあり故に有益のAmusementは真ニ大切也」と述べ、社会事業の一環として組織されたクラブで人々が人間的な喜びや幸福を得る、有用な娯楽に着目した。と同時に、アメリカ人が家庭という私的な空間だけでなく、公共空間において陽気で快活な生活を送り、娯楽が道徳的身体的知的な面を促進していることをつかみとっている。

当時のアメリカの社会教育に関する限り、一八二六年から一八三九年にかけて展開されたライシアム運動によって、社会教育の土台が築かれ、成瀬が渡米した一九世紀末には、図書館・博物館の建設を通して知識を普及するという目的がすでに実現し、公共図書館は社会の中で確固たる位置を占めていた。また、一八七四年以来、メソジスト派のジョン・ヴィンセントとルーイス・ミラーが始めたシャトーカ運動が盛んで、シャトーカ文理サークルや夏期学校といった成人教育プログラムが積極的に実施され、この運動を支えた人々が草の根的に、婦人クラブや青年グループ等の活動を展開していた。また、シャトーカ運動は通信教育や大学拡張等の先駆的働きをなすものでもあった[5]。

このような活動が成瀬自身にとって現実味を帯びてくるのは、日本女子大学校を開校して数年経ってからのことである。文芸会や大学拡張の活動にその影響をみることができる。文芸会は寮で学生が音楽会や活人画会を楽しむところから始まった[6]。児童の遊戯にも通じる娯楽の本質について、成瀬は「人は生涯を通じて娯楽によりて直接には休養、慰安を得て、活動力を養ひ、間接には娯楽そのものに含まるゝ理想から、智徳を磨くことが出来るのであります。」と述べ、娯楽の種類の欠乏を補うこと、高尚な娯楽を選ぶこと、団欒的娯楽の風習を作ること、児童の娯楽に対する父母・兄姉・教師の教育的態度を促している[7]。成瀬の大学拡張論は将来的に卒業生の団体である桜楓会の各支部を母体として、校外講義、巡回図書館、巡回機械（移動博物館）、夏期学校、講義録の発行、ユニバーシティ・セツルメントを組織化し、社会教育・社会事業を展開することに主眼が置かれている[8]。

ところで、ソーヤの『娯楽擁護論』は一六章で構成されている。このうち、成瀬は第一章～第六章、第八章、第一一章～第一四章を部分的に引用している。第一章では、「娯楽の定義」に従って娯楽のもつ人間形成的意義に目を留め、娯楽の歴史的起源を探っている。宗教的観点から娯楽に対するイエスの見解を検討した成瀬は、「キリストハ結婚式ニも到り又宴会ニ行キ飲食せり。交際せり。Amusementを賛同せり。」との考えに達し、中世の

修道院にみられる禁欲主義を斥けている。第二章に入ると、成瀬は害のない健康的な娯楽のあり方に賛成し、「Amusements は心ニも身ニも薬となるべきものを毒として捨てたること多し。……若し交際候しホームの有様真に時ニ戯れ話し誠ニ愉快を得せしめば何ぞ酒を求めん他ニ害なき其 Amusemnet を求むるの要求ニ代フルモノ多し」と述べている。同章で浪漫主義的ともいえる自然観を通して、「神の摂理の恵み深さを享受する妥当性」に共鳴した成瀬は、引き続く第三章で、一．娯楽のよろこびと自然から引き出された娯楽擁護の証言、二．娯楽擁護に対する現在の宗教界の実際的見解、三．幼少期の心性史にみる自然的社会願望、四．偉大なる自然法の交替、五．娯楽の役割という五つの内容を重視し、自然法に基づく娯楽擁護の考え方を支持している。第四章では、「社会的娯楽、感覚的娯楽、社会的議論、休日の娯楽、ダンス、歌、訪問、社交上のゲーム、運動場でのスポーツ」といった多様な娯楽の種類を取り上げ、そこから日本の女性にとっての交際の意義を引き出した。子どもの娯楽について論じた第五章で、著者は児童労働を批判し、子どもが遊戯のないまま育てられると、冷淡で狡猾で無感覚になってしまうと戒めている。楽しみの場となる家庭について、成瀬は「日本の食堂を改ムルコト。談話して徐々食スル風。Family talking を為スコト。等大切也又食後 Social hour を設け長幼打寄て遊ぶこと等大切なり。」とコメントし、食卓が家族団欒の場となり、食後のソーシャル・アワーが子どもにとって楽しみの時間となることを強調した。第六章はユダヤ人の祝祭、古代ギリシア人のオリンピア競技会、古代ローマ人の狂暴で残忍な闘技、中世騎士道時代におけるフランス・プロバンスの叙情詩人の様子等を描いている。西洋の娯楽史に対して、成瀬は日本の五節句やその他の祭日を対照させ、「日本ニ於て祭日を守ルコト大切ならん。」として、それらが一致の精神や愛国心を養うとした。第一一章に及んでは、ダンスが老若男女の身体の健康を促すことから、成瀬は幼稚園や小学校・女学校でダンスを採用し、さらに男子校と女学校の交流を通して、男子と女子が相互にそれぞれの芸を披露することを奨励している。娯楽による男女交際を認めた成瀬は「時々は男女合併の amusement を為さしむ也。是れ相方ニ利益あり。之を制するは両校教員、或ハ其父母をも交へば決して弊害なからん。」と述べている。第一二章で成瀬は劇場や演劇に関心を寄せた。放縦な近代劇に対する劇場出入り禁止というより、ラシーヌやシェークスピアといった劇作家に注目し、演劇の効能について学んでいる。第一三章では、

家族集団に娯楽の組織化の基本があり、親が子どもの楽しみを計画し、子どもの仲間集団をコントロールする責任が示唆されている。この内容に対して、成瀬は「両親は小児の為めに善きSocial companionshipを造りHomeに於て十分のAmusementを予ること必要なり。殊にtemptation多き幼時其他ニ就ては殊ニ注意ス可きなり。然らされば両親の感化小児ニ及ばず。」とコメントした。

筆写に一か月以上要したと思われるノートの性格は、日記と区別される。この時期にわずかに重なる和文日記をみると、筆写を始めた翌日に、アメリカで視察すべきターゲットを一二項目定め、自らの決意を表明している。それは個人生活、家族生活、学校、アシュラム、教会、米国文明の大勢、商業・農業、建築・機関、万国博覧会、現代世界思潮、図書館で世界のよき知識に通じること・ジャーナリズム事業、青年会・禁酒会・王女会等の慈善事業である[9]。

学校視察に関する限り、成瀬はすでに前年の四月一三日から一週間、ウェルズリー・カレッジに滞在見学している。これはウェルズリーの卒業生であり新潟女学校の元英語教師のコーネリア・ジャドソン及び、同女学校元教師でウェルズリー・カレッジ留学中の杉江田鶴の紹介によって実現したものであろう[10]。ウェルズリーではマリオン・タルボット担当のドメスティック・サイエンスが一八九〇年から一八九二年の間、最上級生と第二、第三学年の特別生に開講され、アメリカ家政学成立の土台づくりが始まっている[11]。家庭衛生や栄養学等を教授する本コースは講義と実習に加えて、校外のフィールド・トリップを実施した。成瀬の見学に先立つ一か月前の三月一六日に、女子学生はボストンのニューイングランド・キッチンへの訪問を通して、科学的なクッキングだけでなく、よく調理された、味のよい栄養ある食物を貧しい人に届けるという、本施設の慈善目的をも学習している[12]。

成瀬がボストンＹＷＣＡ(Boston Young Women's Christian Association)を訪問したのは、一八九二年五月二八日頃である。その時、成瀬が受け取ったボストンＹＷＣＡの便覧には、職業事務局、夜間クラス課、七つのトレーニング・スクール（家事のためのトレーニング・スクール、ドメスティック・サイエンスと産業技術の学校、料理学校、速記術学校、体育学校、聖書学校、裁縫婦のためのトレーニング・スクール）、旅行者援助課等について記されている[13]。その便覧の余白には学校の種類やカリキュラムに関する成瀬の毛筆のメモ書きが認められる[14]。新規移民の流入するアメリカの都市産業社会の中

で、教会の女性はすでに地域や家庭の援助者となる女性のための組織的トレーニングに取り組み、移民や女性の自立支援を開始していた。成瀬はＹＷＣＡで新しい家政学の内容、女子実業教育の方法、慈善的奉仕活動の実際、スポーツを含むレクリエーションのあり方等を吸収した。

一八九二年九月に研究の拠点をアンドーヴァー神学校からウースターのクラーク大学に移した成瀬は、勢力的にマサチューセッツ州及びニューヨーク州の教育機関を調査した。英文日記によれば、クラーク大学（九月一二日）の他に、ウースター師範学校（一〇月一〇日・一一日・一三日、一一月一日・二日）、ハーバードのアネックス〔ラドクリフ〕（一一月二八日）、マウントホリヨーク・カレッジ（一八九三年一月六日、三月二四日）、スミス・カレッジ（一月六日、三月五日・六日・二四日）、アマースト・カレッジ（三月六日・七日）、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ（五月四日）等を訪問している[15]。この中で、成瀬がスタンレー・ホールの「教育学セミナリー」（一八九一年開講）に参加したことに注目したい。

一八八九年に開校したクラーク大学の初代学長ホールは、児童研究運動を指導した心理学者である。質問紙法によって児童の心的内容を客観的に把握する方法は、データを集め、その分析によって発見したことを普及・実践していく上で、女性クラブの協力を必要とした。ホールは、シカゴ万国コロンビア博覧会（一八九三年）の「実験心理学と教育に関する国際会議」の要となる知識人として、クラーク大学を全国の児童研究運動の拠点とし、「教育学セミナリー」を活用した。女性クラブのネットワークを通して定期的に集まった女性は、児童の道徳的知的情緒的発達について議論し、教育改革に参与した[16]。進歩主義教育時代を迎えると、ホールはジェーン・アダムズと同様、レクリエーションを唱道し、地域社会における子どもの遊び場運動を支援している。

成瀬がアメリカ留学した時期は、ＹＷＣＡ（一八六七年創設）、女性キリスト教禁酒同盟（一八七四年結成）、ハル・ハウス（一八八九年設立）等を通して、家庭性を取り込んだ社会改革運動がニュー・ウーマンによって展開された時代であると共に、進歩主義教育運動の本格化を前に、家庭や児童を科学研究の対象として家政学研究や児童研究が始まったばかりの時代であった。このような女性と子どもをめぐって発達する学問領域とその学問的成果を適用する改革運動の文脈において、留学後半から集中する成瀬の視察を読み直す時、先の二冊の本との

出会いは、女性のライフコースをも見据えた女子高等教育の新たな視点を、成瀬に与える契機になったといえる。

（青山学院大学教授　おおもり　ひでゝ）

註

1　成瀬ノートの英文と原典との照合は、下記の文献を使用した。
W. Stanley Jevons, *Methods of Social Reform and Other Papers* (London: Macmillan and Co., 1883). Frederic W. Sawyer, *A Plea for Amusements* (New York: D. Appleton and Company, 1847). Frederic William Sawyer, *A Plea for Amusements, reprint ed.* (Memphis: General Books, 2010).

2　経済学史学会編『経済思想史辞典』（丸善株式会社、二〇〇〇年）、一五八頁。

3　James Grant Wilson and John Fiske eds., *Appleton's Cyclopaedia of American Biography*, Vol. 5, reprint ed. (Bristol: Thoemmes Press, 2002), p.407. (orig. pub. 1894.)

4　エッセーは「社会改革の方法」というタイトルの下に"The Contemporary Review"で発表されたものが再録されている。(Jevons, *op.cit.*, p.v.) それは次の通りである。"Amusements of The People"(Oct. 1878),"The Rationale of Free Public Libraries"(Mar. 1881),"Married Women in Factories"(Jan. 1882),"Experimental Legislation and The Drink Traffic"(Feb. 1880),"Postal Notes, Money Orders, and Bank Cheques"(Jul. 1880),"A State Parcel Post" (Jan.1879).

5　梅根悟監修『世界教育史体系36　社会教育史I』（株式会社講談社、一九八一年）、一〇〇―一〇七頁。

6　『家庭週報』第六八号（一九〇六年七月一四日）。

7　『家庭週報』第六九号（一九〇六年七月二一日）。

8　『家庭週報』第一五二号（一九〇八年八月一日）。

9　『成瀬仁蔵著作集　第一巻』(日本女子大学、一八七四年)、五二五頁。

10　Cornelia Judson, Letter of Cornelia Judson to Jinzo Naruse, Dec. 28, 1890. (4367)（日本女子大学成瀬記念館所蔵）

11　*Calender of Wellesley College 1890-1891* (Boston: Frank Wood, Printer, 1891), p.9, p.24, p.36. *Calender of Wellesley College 1891-1892* (Boston: Frank Wood, Printer, 1892), p.9, p.23, p.35.

12　*The Wellesley Prelude*, Vol.II.- No.25 (Apr. 11, 1891), p.345.

13　*Twenty-Sixth Annual Report of The Boston Young Women's Christian Association* (Mar. 7, 1892).（日本女子大学成瀬記念館所蔵）

14 *Ibid.*, p.14. 小林陽子「成瀬仁蔵の蔵書調査（第二報）―カタログ・シラバスなど資料の概要―」『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』第三巻第三号（二〇〇七年三月三〇日）、三〇四頁参照。

15 『成瀬仁蔵著作集　第一巻』、五二七―五二九頁、五三二―五三五頁、五三七頁。

16 Lawrence A. Cremin, *American Education: The Metropolitan Experience, 1876-1980* (New York: Harper & Row, Publishers, 1988), pp.278-279.

時代を切り拓く卒業生

児童文学者　石井桃子

永山由里絵

はじめに

「プー」の本にかぎって、私は、あえて、分析しようとは思わない。魔法は魔法でとっておきたいからである。

（石井桃子「プーと私」[1]）

『クマのプーさん』。誰もが一度は目にしたことがあるであろうこの本は、本学の卒業生石井桃子の翻訳によって日本に広まった。

石井桃子は、著書『ノンちゃん雲に乗る』等でも知られる児童文学者である。英文学部[2]二五回生として、一九二四（大正一三）年から一九二八（昭和三）年に在学した。卒業後は、編集者・翻訳家・作家として、さらに家庭文庫の草分けとして幅広く活躍し、多くの人がその著訳書に親しんできた。

石井は、二〇〇八（平成二〇）年に一〇一歳で生涯を終えたが、その前年の二〇〇七年、本学の児童学科教員や大学院生で構成される日本女子大学児童文学研究「日

月会」は、研究誌『日月』第五号を「石井桃子さん百歳お祝い記念号」とし、様々な角度から石井を紹介した。[3]

また、近年では尾崎真理子氏『ひみつの王国―評伝石井桃子』[4]、中川李枝子氏らによる『石井桃子のことば』[5]、岩波書店による作品集『石井桃子コレクション』[6]等、作品や生涯を取り上げた図書が次々と刊行されている。

自筆翻訳原稿

成瀬記念館は、二〇一五年度に目白キャンパス、二〇一六年度に西生田キャンパスで「日本女子大学に学んだ児童文学者たち」展を開催し、石井についても取り上げ、反響を得た。これをきっかけに、改めて当館としても石井に関する資料の蒐集を始めたところ、思いがけず自筆翻訳原稿等の寄贈を受けた。[7] 自筆原稿の寄贈はこれまでに無く、この貴重な機会に、石井が生涯にわたり親しんだ「プー」との出会いや、日本女子大学校とのつながりについて、主に本学ゆかりの資料を通して紹介したい。

一　日本女子大学校での学び

本校の同窓会である桜楓会が発行した機関誌『家庭週報』[8]一五五八号（一九四二年六月一九日）に、石井は「子供と本」と題する随筆を寄稿した。そこで石井は、一九一九年に入学した浦和高等女学校時代を回想しながら、少女時代、自身がどのように本と向き合っていたかを記している。

石井は、女学校に入って間もない頃の徒歩遠足で、学校を出る少し前から帰ってくるまでの五、六時間、とな

り合った級友のNさんに、『家なき子』について夢中で話した。Nさんは寄宿生であり、通学生であった石井は、寄宿生をつねづね気の毒に思っていた。

「家なき子」は、たしか小学校の時、いとこに、借りたのだ。けれど、私はその本から私の力で吸ひとれるかぎりのものを吸ひとり、またその結果、そのお話は私のなかで生きていたと見え、暗記ものはだいの苦手であった私が、五時間か六時間、われひとゝともに夢中になれるほど、上手にお話しできたのであった。

（「子供と本」）[9]

石井は、この遠足中のことを、道が埃っぽく前を歩いている人の袴の腰の部分に埃が溜まっていたこと以外は覚えていないというが[10]、自らの「愛情の書であり、動物学の本であり、修身書でもあった」『家なき子』を、友人に話し続けたという回想は興味深い。本を大切に読み、誰かのためを思って話すということを、一二歳の頃から行っていたのである。

一九二三年に浦和高等女学校を卒業した後は、しばらく家事を手伝っていたが、翌年、日本女子大学校に入学する。本校を選んだ理由は「いちばん入学にやさしい学校だと思った」「同じ女学校の卒業生が行ってた」ためであり、家政学部・英文学部・国文学部・師範家政学部・社会事業学部の五学部の中から英文学部を選んだ理由を「どうして英文科へ行ったのかわからない」といい、卒業後は、教員以外の「何かで働こう」という考えであったとしている[11]。大正期に在学した者への入学動機を尋ねたアンケートには「女学校だけでは物足りなかったので」「専門の勉強がしたかったので」「何か将来社会の役に立ちたいと思って」「両親のすすめにより」「精神教育を受けたいと思って」「資格をとりたい（教員免許）と思って」[12]といった回答があり、これらと比較しても、石井は必ずしも積極的な理由で本校英文学部に入学したわけではないことがわかる。

しかし、石井は小学生の頃から学級文庫にあった『アラビアンナイト』や『世界お伽噺』に夢中になり、家ではアンデルセン童話等に親しんでいた。また、祖父が片言の英語を知っており、叔母が時々外国へ行き[13]、さらに兄からは、赴任先のビルマから英語の家庭雑誌を贈られたという[14]。こうした外国の文物にも親しめる家庭で育ったことが、英文学部を選んだ背景として十分に考えられるであろう。また、娘の希望に耳を傾けることができる、比較的裕福な家庭環境であったことも推察される。

石井が育った時代は、まさに「大正デモクラシー」の時代である。大戦景気の中で女子の教育熱も高まり、女

学校の数も生徒の数も増加し、さらに高等教育機関への進学希望者も増えていた。日本女子大学校への入学志願者も増加の一途をたどり、例えば一九二〇（大正九）年度は、志願者が九六四名、入学者が三八九名であり、石井の入学した一九二四年度は、志願者が一二〇五名、入学者が五二六名となっている。因みに、同年の学部別の志願者・入学者は、家政学部は三八五名・二二一名、国文学部は一八六名・八六名、英文学部は二三四名・七四名、師範家政学部は三一〇名・七三名、社会事業学部は九〇名・七二名であった[15]。中等教員の免許を無試験で取得できる英文学部と師範家政学部がどちらも高い倍率となっていることからも推測できるように、教員をはじめとする「職業婦人」を目指す者が増えていた。そして、女性を取り巻く状況の変化は、やはりこの時期に広がったいくつもの「婦人雑誌」で紹介された[16]。

さて、日本女子大学校に入学した後の石井の学生生活はどうであったのか。卒業から三〇年近く経った一九五六年五月一八日の『東京新聞』に、石井の回想が掲載された。

学校生活は、私にとつては、たのしさと、うとましさの半々だつた。たのしかつたのは、友だちとのつきあい、その他英文科内部のこと。うとましかつたのは、学校全体のお説教の多い教育方針だつた。

むかし、私たちの在学したころ、小さい屋根のついたレンガの柱の二本立つている校門をくぐると、すぐ右に、テニスコートをへだてて、ニュー・イングランドの教会に似た講堂があつた。そこで、一週に一回、実践倫理という名の修身があつた。月曜日の午後一時から三時までとおぼえている。夏など、おべん当をたべたあとの若い肉体が、じつとスワって、いいお話を聞きながら、二時間、目をあけていようと努力することは、苦業に近かつた。いつか、自分のノートが、ちつともとれていないので、友だちのを借りたら、その人のも、まるで速記の記号のように何が書いてあるのかわからなくて、二人で笑つてしまつたことがあつた。

（「目白の娘のむかしと今」）[17]

石井桃子

石井が睡魔に襲われた「実践倫理」とは、学生が社会のさまざまな問題と向き合い現状を改変できるよう、実践を促す目的を持った必修講義である。[18] 明治期には創立者成瀬仁蔵が担当し、歴代校長等に引き継がれ、今では「教養特別講義」がその流れを汲んでいる。「講堂」は現在の成瀬記念講堂[19]であり、外壁は変ったものの同じ場所でその姿を見ることができる。

日々の授業では、前記の実践倫理の他にも、体操[20]や、英文の科目として読解・発音・書取・会話・作文・英文学史・米文学史等を受講し、特に読解を得意としていた。さらに教員については、英語担当のミス・フィリップス(Elinor Gladys Philipps)、英語・英文学担当の岸本能武太、後に第六代学長となる英文学担当の上代タノの授業を覚えており、「これらが、みないまの私の養いになっていることを、私は疑うことはできない[21]」とし、質の高い授業を受けたという石井の認識が見られる。

石井の卒業研究は、各自で論文を書く慣例とは異なり、いくつかのグループに分かれ、「世界の女性作家について」といったテーマを決めて行う共同研究であった。[22] 資料収集から着手し、丸善等の書店で調べた上で近代文学・文芸思潮の教員であった茅野蕭々(ちのしょうしょう)を訪ね、例えば「今どんな作家がドイツの女の人では優れていて、評価が高いか」の教示を受け、茅野から聞いた出版社宛に英語で手紙を書き、本を送ってもらうこともあった。[23]

石井はそのように手に入れた本や作家の肖像を展示したと述べているが、[24] これは一九二八(昭和三)年四月二〇日の創立記念式典に際して行われた「御大典記念女性文化展覧会」を指すと考えられる。一九二六年に創立二五周年を迎えたことを受け、二年をかけて全学部を挙げての展覧会が企画され、[25] 婦人と法制・経済・宗教・教育・文学・芸術・科学・社会施設・平和運動・日本女子大学校と附属高等女学校の沿革等が取り上げられた。石井が一部関わったと思われる「外国文学の部」は、『家庭週報』九三三号(一九二八年四月二〇日)に「現代英米文学」や「欧州大陸文学」の展示風景と、成果の一部として小説・詩・劇といった分野の英米「女流作家」が紹介されている。

石井は友人関係や英文学部の授業に楽しさを感じながら、後の仕事につながる知識や技量を、このような授業と実践の中で身につけていったのである。

二 「プー」と出会う

本校在学中からの活動として知られていることに、作家菊池寛のもとでのアルバイトがある。菊池は本校近く

女性文化展覧会

の雑司ヶ谷に住んでおり、石井は三年生の時に英文学部の同級生久保田静の紹介で菊池に会い、外国の雑誌や小説を読んであらすじをまとめるアルバイトを始め、卒業後も続けた。一九二九年には、高等教育を受けた女性が生活費を得られるようにと菊池が結成した「文筆婦人会」の一員となり、菊池が立ち上げた文藝春秋社を拠点に編集見習いとなった。翌年に「文筆婦人会」が解散すると、他の二名とともに正式に文藝春秋社に入社する。本校を卒業して二年後のことである。

石井が在学していた一九二〇年代は、本校入学者の三～四割ほどが家事や結婚等の理由で退学し、卒業者のうち就職した者は三～五割ほどであった[26]。就職した者の多くは高等女学校等で教職に就き、会社員や記者・出版者となったのは一割にも満たない[27]。女性が出版業界で職を得ることが難しい状況であったことが察せられるが、そうした中でも石井がその道に進むことができたのは、アルバイト時代から菊池の信頼を得ていたからこそであろう。その信頼により、石井は更なる出会いに恵まれるのである。

文藝春秋社入社後、石井は菊池から犬養毅邸の書庫整理を依頼される。犬養毅の息子で作家の犬養健が、毅の蔵書を整理できる人はいないかと菊池に相談したのであ

る。この紹介を受けて、石井は犬養家に出入りするようになり、知遇を得た。一九三一年の五・一五事件の後も、一九三三年に石井が文藝春秋社を退社[28]した後も、犬養家の人々とは変わらぬ交流が続く。

そして一九三三年一二月、西園寺公望[29]の孫で政治家の西園寺公一が、犬養家を訪れた際、犬養家の子どもである康彦に“the House at Pooh Corner”をクリスマスプレゼントとして贈った。これが石井と「プー」との出会いとなる。石井はこの物語をすぐに気に入り、康彦とその姉の道子に訳して聞かせ、さらに自身の友人にも「プー」を紹介した。そして皆が、「プーの世界」に入り込んだ、つまり石井の言う「魔法」にかかったのであった。

聞き手がよかったと思うんです。道子さんも、一緒に話の中へ入っていける人でしたから。それからもう一人。犬養家とは全然関係のない人で戦争中に亡くなった友達がまた私以上にプーの世界に入っていける人でした。お見舞いに行ってプーの話をしてあげると、私がいない時でもプーのことを考えていたいから、原稿にしてくれって。それで訳し始めたわけなんです。

（「はじめに魔法の森ありき」[30]）

ここに書かれる「友達」とは、後に石井桃子著『幻の朱い実』に登場する大津路子のモデル小里文子である。小里は本校国文学部[31]二三回生で、文藝春秋社の元同僚でもあった。二人は小里の退職後に仲良くなったというが、小里との会話には「プー」の作者A・A・ミルンのユーモアやジョークと共通する世界があり、石井はその会話が無ければ我を忘れて読むことは無かったとしている。[32]その後石井は、“Winnie-the-Pooh”とミルンの童話集を見つけ、同様に友人と共有した。[33]石井が「プーの本」を翻訳したきっかけは、犬養家の子どもたちや友人と楽しさを共有する中にあったのである。そして、小里から訳した原稿を本にするよう勧められたことにより、日本語訳の出版を意識し始める。

小里の勧めをきっかけに石井が翻訳した『熊のプーさん』と『プー横丁にたった家』は、それぞれ一九四〇年、一九四二年に岩波書店から出版される。岩波書店との間を仲介したのは、同書店につとめていた吉野源三郎であった。石井は文藝春秋社を退社後、作家の山本有三に誘われ、一九三四年から新潮社内で「日本少国民文庫」編集に携わっており、吉野はこの時の仕事仲間であった。文藝春秋社に勤めた年数は長くなかったが、石井はそこで多くの文学者・編集者・記者と出会っており、その交流関係によって後の活動が展開していくのである。

『熊のプーさん』出版に際して面会した岩波書店社長の岩波茂雄からは、「あなた、英語がどうしてそんなによくできるの？」と尋ねられ、外国の人にも「これをよく訳した」と評価されたが、石井は「わかっちゃったんです。読んで聞かせているうちに夢中になっちゃったんだから。[34]」と答える。石井は、「日本少国民文庫」に関わる中で「いったい、子どもの文学ってなんだろう」と考え始めるが、[35]少なくとも『熊のプーさん』の翻訳にあたっては、一読者として「プーの本」を楽しみ、友人を喜ばせることを目的としていたわけである。女学校時代、『家なき子』を級友に話し続けた姿とも重なり、石井の一貫した姿勢が垣間見られよう。

出版された『熊のプーさん』は、初版が売り切れて再版が刷られたが、戦争の影響により増刷は途絶えることとなる。

> あわただしい戦時下の時代に、何かのまちがいのように出版許可が出て、紙の配給をうけてしまったものでした。しかし、その後、戦争がはげしくなるにつれて、敵性国家の産物であることや、不用不急の子ども向けのお話であるという理由で、増刷はとだえたのだとおぼえています。
>
> （「A・Aミルンの自伝を読む[36]」）

石井の翻訳活動は、『熊のプーさん』に始まり、戦後は多くの欧米児童文学の翻訳を手掛け、文学者として欧米への視野を広げていった。[37]それと同時に、翻訳や創作活動を続ける中で、「目のまえの生活」や「感じること」を、「きょうのことば」で表現することを大切にした。一九五六年、本学通信教育部発行の『泉』に、

> 考えてみると、日本では、いまだに詩や歌が、外[39]くの場合、毎日、私たちがたがいに話しあうことばで書かれないで、千年も、何百年もまえの人たちが使ったことばで書かれています。いま、今日の世の中で私たちが感じることを、なぜ、きょうのことばであらわせないのでしょう？（中略）
>
> 私たちが、きょう、目のまえの生活からはじめないからではないでしょうか。何か美しいものは、海のかなた、またどこかの空遠くにあるものと考えて、目のまえのことには、怠けているからではないでしょうか。
>
> （「ある連想[38]」）

と記しており、石井の言葉に対するこだわりを見ることができる。

菊池寛邸でのアルバイトや文藝春秋社での仕事は、犬養毅邸での図書整理と「プー」との出会い、『熊のプー

さん』出版へとつながっていくが、これは石井が目の前の仕事に我慢強く取り組んだ結果であろう[39]。そして、そのきっかけをもたらしたのは、本校出身の友人たちであった。

三　石井と日本女子大学校とのつながり

石井は『熊のプーさん』の出版によって翻訳家として一つの成果を出したものの、戦時下で「敵性国家の産物」「不用不急の子どものお話」に関わる仕事を続けることは厳しく、それまでのような文学に関わる仕事とは別に、一九四四年から一九四五年頃、労働科学研究所の所長で大政翼賛会の国民運動局長に任じられた医学博士暉峻義等（てるおかぎとう）の私設秘書をつとめる[40]。

その後、東京大空襲をきっかけに東北で牧場を運営するが、終戦後、周囲の誘いを受け、牧場への仕送りも目的として、一九五〇年から岩波書店「岩波少年文庫」の編集者として再び出版業界に戻り、翻訳家としても本格的に活動を再開する。

東京に戻った石井の周辺には、石井を支えた本校出身者がいた。小里文子の友人であり、「婦人民主新聞」の編集長であった水澤耶奈（国文学部二三回生）、岩波書店で石井の助手をつとめた林小枝子（国文学部四二回生）、同じく岩波書店で助手をつとめたいぬいとみこ（国文学部一九四一年～一九四二年在学）等である。

その中、林小枝子は、石井のもとで「岩波少年文庫」編集に携わり、翻訳された物語を子ども向けに直す仕事をした。さらに一九九四年に岩波書店から出版された石井桃子著『幻の朱い実』編集にも関わる等、長く石井の執筆を支える。また、自身はジャーナリズムの世界で女性史の視点から執筆を続け、岩波以前には水澤が編集長をつとめた「婦人民主新聞」の記者として働き、さらに岩波の仕事と並行して、放送ライターとしてラジオ番組「女性のあゆみ」（一九五三年）や「女性教育史」シリーズ（一九五七年）などを手掛けた[41]。加えて、『泉』に随筆「男と女」（一九五九年）、『日本人物史大系』には神近市子氏と連名で「青鞜社の人々」（一九六〇年）[42]を寄稿した。

林とは本校の同級生であったいぬいとみこは、林から紹介された『宮澤賢治全集』を夢中で読み、宮澤賢治の表現に憧れを抱くなど、林らと文学に親しんだ。二年生の初めに本校を中退して京都の平安女学院に転学し、卒業後は保母（保育士）として働いていたが、戦時下で栄養失調になっている園児を目のあたりにしたことが転機となり、児童文学の道に進むこととなる。しばらくは慶

應義塾大学の通信教育部で働き、一九五〇年に林から石井を紹介されて「岩波少年文庫」編集に携わり、岩波書店以外でも石井・瀬田貞二・松井直等と児童文学について話し合うＩＳＵＭＩ会の仲間として交流した。さらにいぬいの私設文庫「ムーシカ文庫」は、石井が開いた「かつら文庫」[43]や、瀬田の家庭文庫の影響を受けて設けられたという。

このように、石井が岩波書店に入ったことにより、彼女の周辺には本校出身者も含めた人材が集まり、石井とともに勤めながら執筆活動を続けていくのである。石井は自らの実績を残していっただけでなく、後進をも牽引する存在であったと言えるであろう。

石井は、先にも引用した「母校を訪ねて」の冒頭で、

古風ないいかたをすれば、私は母校「日本女子大学校」―いまは、下の「校」がとれているらしいが―にとって、不孝な娘であるらしい。

昭和三年に卒業してから、何度も校門をくぐつたことがない。新聞社から「母校を訪ねて」とかいう題の写真と原稿の注文をうけたとき、まず私の胸にわきおこつた衝動的感想は「ごめんこうむりたい」ということであつた。ところが、ことわりの電話のつもりのものをかけ終つたとき、私は、ちやんと母校の庭に立つ時間まで約束してしまつていた。このお人よしぶり政治的手腕のなさは、あくまで目白の娘らしい特長のように思えるのだが…。

（「目白の娘のむかしと今」[44]）

としており、自らを「お人よし」「目白の娘」と表現している。石井は女性同士の連帯を重視していたと言われており[45]、林やいぬいを助手に迎えたことからも、母校の後輩を含めた女性の自立や活躍を望み、自身の周辺で助手を探したと考えられる。

さらに石井は、大人同士の交流だけでなく、子どもたちと直接触れ合う時間を設けるようになる。先の新聞記事が掲載された一九五六年頃から、「第二十五回生英文学部卒」として「ある連想」「いろいろな子どもたち」という随筆を『泉』に執筆している。「いろいろな子どもたち」の中では、東京のある保育所に見学に行き、持参した絵本を読み聞かせた時のことを次のように記した。

一心に聞きいる子どもたちのまるい目にかこまれて、私は圧倒されました。私のまわりに、子どもたちは、半円をつくって聞いているのですが、片方のはしの子に絵本を見せようとすると、もう片方のはしから、「見えない！」「見えない！」という声がか

かります。いそいで、そっちへ本をまわして、絵が見えるようにしてやると、正直に「本が見えなくてこまるんだ！」という、こまった表情をうかべていた、いくつかの顔が、いっせいに笑いだします。（中略）この子たちが、いま、「お話を聞きたい」と思う時に、「本が見えない！」と無じゃきに叫べるように、いまに勉強したい時に、「上の学校へいきたい！」と要求して、それがかなえられたら、どんなにいいでしょう。

（「いろいろなこどもたち」[46]）

ここでは、子どもの好奇心が進学という選択へとつながる可能性と、それが叶えられることを願う気持ちを訴えている。児童文学に携わる中で、石井は子どもの成長を願う立場から文章を書くようになるのである。一九五八年には、杉並の自宅に家庭文庫「かつら文庫」を開室して子どもたちが本と触れ合える場をつくり、その反応を身近に見るようになるが、この『泉』の随筆からは、「かつら文庫」開設につながる心境もうかがわれよう。一九七一年に上代タノの依頼により本校で行った講演も、「かつら文庫の13年」であった[47]。

石井は、注目されるに従い、本校の卒業生として内外からの執筆依頼を受けた。特に本校においては、子どもの成長に目を向ける石井の知見が、児童文学に携わってきた実績ある卒業生の声として求められたのであろう。『泉』への寄稿は、「何かで働こう」と実践した石井の姿が、広く認められたことを示していると考えられるのである。

『泉』

石井桃子　サイン本

おわりに

日本女子大学校の同級生から紹介された菊池寛のもとでのアルバイトは、石井が児童文学の分野で活動するきっかけを作っていった。難しい『熊のプーさん』を翻訳し、「わかっちゃったんです」と語る石井の基礎にあったのは、本校英文学部での学びと、菊池のもとで多くの洋書に触れた経験であったと考えられる。

石井は、自身を「プーの友だち」と言い、児童文学に携わった経緯についても「プーの手にひかれて（?）子どもの本を編集したり、書いたりする仕事にはいりこんでしまった」[48]と表現している。石井の傍には、絶えず「プー」が居たのである。

このように、「目のまえの生活」と「魔法」との間で多くの作品を残した石井桃子は、作品を通して、今もなお、誰かが「魔法」にかかり、次の一歩を踏み出す瞬間に立ち会っている。

（成瀬記念館非常勤学芸員　ながやま　ゆりえ）

（1）「プーと私」（石井桃子『石井桃子集』（七）岩波書店　一九九九年、一三頁）。

（2）英文学部（旧制）は、一九〇一（明治三四）年の開校時から創設された学部の一つであり、一九四八年、新制大学となった際に「英文学科」へと移行し、現在に至る。

（3）日本女子大学児童文学研究日月会編『日月』第五号（二〇〇七年）。『日月』は当時児童学科教授であった百々佑

利子氏を代表に発足。第五号には吉田新一氏「石井桃子さんのこと」、石井光恵氏「岩波新書『子どもの図書館』再訪」、直江博子氏・長林文子氏・今田由香氏「石井桃子さんと日本女子大学校」等を収録する。また、百々氏は座談会「子どもの心を 豊かに」において、学生時代に石井の家庭文庫「かつら文庫」で手伝いをしたことや、『日月』第五号発行にあたり、石井から手紙をもらったこと等を語っている（『桜楓新報』六五五号　二〇〇七年一〇月一〇日）。

日月会以外には、本学の学生サークル「児童文学研究会ひなぎく」が、一九八四年に冊子「石井桃子研究誌 '84」を作成し、作品研究の成果や評論を発表している。

（4）尾崎真理子『ひみつの王国―評伝石井桃子』新潮社 二〇一四年。

（5）中川李枝子・松井直・松岡享子・若菜晃子ほか共著『石井桃子のことば』新潮社 二〇一四年。

（6）『石井桃子コレクション』（一～五）岩波書店 二〇一五年。

（7）二〇一七年一月、針生幸雄氏からご寄贈いただいた。

（8）桜楓会が発行した週刊の機関紙であり、一九〇四（明治三七）年に創刊し、一九四八年まで続いた。現在では月刊の『桜楓新報』がその役割を引き継いでいる。

（9）『家庭週報』一五五八号　一九四二年六月一九日

（10）前掲「子供と本」、石井桃子（インタビュアー川本三郎）「本との出会い・人との出会い―戦前・戦中・戦後初期―」（『女の文化』近代日本文化論八 岩波書店 二〇〇〇年、一〇一頁）。

（11）前掲「本との出会い・人との出会い」（『女の文化』一〇三頁）。

（12）日本女子大学女子教育研究所編『大正の女子教育』国土社　一九七五年、一六三頁。

（13）前掲「本との出会い・人との出会い」（『女の文化』一〇〇頁）。

（14）前掲『ひみつの王国』、六〇頁。

（15）日本女子大学成瀬記念館所蔵「大正二年度以降学事年報」（大正二年～昭和一八年）。

（16）「近代における女性のもつ様々な問題・生き方・考え方が反映され」た女性ジャーナル誌（「婦人雑誌」）に注目した研究に、近代女性文化史研究会編『婦人雑誌の夜明け』（大空社 一九八九年）や、同会編『大正期の女性雑誌』（大空社 一九九六年）がある。

（17）「目白の娘のむかしと今」（『東京新聞』一九五六年五月十八日夕刊）。

（18）実践倫理の印象について、一九四五年までの卒業生への調査によると「今では日本女子大の教育の一つの特色を

なすものと評価しているが、当時は修身の延長のように受けとり、ただ聞くという程度であったことを残念に思う」等の回答があり、石井のように「実践倫理という名の修身」として講義に臨んだ者もあったことがわかる（日本女子大学女子教育研究所編『昭和前期の女子教育』（女子教育研究双書（七）国土社 一九八四年）。

(19) 成瀬仁蔵は図書館を教育に不可欠な機関であると考えており、創立から五年後の一九〇六年、「本邦唯一の婦人図書館」（『家庭週報』九二号 一九〇七年三月二日）として「豊明図書館兼講堂」が建てられた。当初の外壁は赤煉瓦であったが、一九二三年の関東大震災によって壁が壊れ、修理の際に煉瓦が除かれて木造となった。修理は一九二四年四月に完了しており、石井が見ていたのはこの時点の姿である。その後、一九六一年には創立六〇周年記念事業の中で補修工事が行われ、これに際し「成瀬記念講堂」と名が改められた。

(20) 体育教育は、創立当初から成瀬が重視しており、授業以外にも全校を挙げた運動会が開催され、東京名物となっていた。石井は「英文館」と呼ばれた二号館が、秋の運動会で皇族を迎える際に使われたことを記憶している（「目白の娘のむかしと今」）。その他、この年の運動会については、前掲の直江博子・長林文子・今田由香「石井桃子さんと日本女子大学校」、馬場哲雄・石川悦子共著『日本女子大学の運動会史―成瀬仁蔵の体育観の発展・具象化としての運動会』（日本女子大学体育研究室 一九八二年）に詳しい。

(21) 前掲「目白の娘のむかしと今」。

(22) 前掲「本との出会い・人との出会い」（『女の文化』一〇六頁）。

(23) 同前。

(24) 同前。

(25) 本校は一九二六年の四月に二五周年を迎えたが、翌年に高等学部の開校式を控えており、記念式との同時挙行が計画された。しかし大正天皇の崩御を受けてさらに一年延期となり、展覧会も約二年をかけて準備されることとなった（『家庭週報』九三三号 一九二八年四月二〇日）。

(26) 前掲『大正の女子教育』二四四頁。

(27) 前掲『大正の女子教育』二四七頁。

(28) 医師から肋膜に影があると言われたことを理由に退社した。その前から「編集部の中にも戦争に積極的に加担して、情報局に気に入られる記者が出てきたり、それに反対する側と二派に分かれたり、そういうのを見るのがとても嫌になって」いた（前掲『ひみつの王国』一七三頁）。

(29) 本校創立発起人の一人であり、創立後は評議員をつとめ

た。公望の娘・公一の母である新子は、一九〇五年三月に本校附属高等女学校を卒業（四回生）、四月に大学部の家政学部に入学している。

(30)「はじめに魔法の森ありき」（石井桃子『子どもに歯ごたえのある本を』河出書房出版社 二〇一四年、四〇頁）。

(31) 国文学部（旧制）は、英文学部と同様に開校時から創設された学部の一つである。一九四八年、新制大学となった際に「国文学科」へ移行し、一九九五年に「日本文学科」と改称して現在に至る。

(32) 前掲『ひみつの王国』一五四頁。

(33) 前掲「プーと私」（『石井桃子集』（七）一一頁）。

(34) 前掲「本との出会い・人との出会い」（『女の文化』一一五頁）。

(35)『ひみつの王国』一七三頁。

(36)「A・Aミルンの自伝を読む」（前掲『子どもに歯ごたえのある本を』二四頁）。

(37) 石井は、『熊のプーさん』出版後、「いつの間にやら世間の方は、私のことを子供の話を翻訳する人間だと考えてくださるようになったわけです。これは偶然の出来事でございまして、私が、その本を本当に好きだったものですから、そういうことになってしまったのです」と語っている（石井桃子「かつら文庫の13年―総会講演より―」『会報』（一一）日本女子大学図書館友の会 一九七一年）。

(38)「ある連想」（『泉』第二巻第一二号 一九五七年）。

(39) 石井は「世の中に出てから、わりにがまんづよいという評判をとった」と述べている（前掲「目白の娘のむかしと今」）。

(40) 暉峻は、大正期、岡山県倉敷の繊維工場で女子工員の労働と健康状況を目の当たりにし、その改善のために倉敷労働科学研究所を設立した人物である。一九四三年の本校「満州開拓農家生活建設協力隊」派遣などに際しても度々講義・寄稿した（『家庭週報』一五四〇号 一九四二年一月二三日、一六〇一号 一九四三年九月一五日等）。

(41) 林小枝子氏の長女小林桃子氏への調査による。

(42) 井上清編『日本人物史大系』（近代 第三）朝倉書店 一九六〇年。

(43) いぬいとみこ著『子どもと本をむすぶもの』晶文社 一九七四年、神宮輝夫著『いぬいとみこ・神沢利子・松谷みよ子』（現代児童文学作家対談 六）偕成社 一九九〇年。

(44) 前掲「目白の娘のむかしと今」。

(45) 宮下美佐子「石井桃子と女性画家の協働関係―終戦から一九六〇年代前半の活動を中心に」（三宅晶子編『文化における想起・忘却・記憶』千葉大学大学院人文社会科

学研究科二〇一四年）。

（46）「いろいろな子どもたち」（『泉』第一巻第二号　一九五六年五月）。

（47）前掲「かつら文庫の13年―総会講演より―」。

（48）前掲「プーと私」（『石井桃子集』（七）一五頁）。

未発表資料38

『成瀬仁蔵著作集』に収録されなかった新資料を順次発表する。今回は講話二編である。式日、始業式、終業式など行事の折の、また実践倫理の成瀬校長の講話を、丹念に記録したノートが残されている。罫紙にカーボンをはさんで浄書され、各々こよりで綴じられたノートには、成瀬自身による訂正、加筆の跡が残る。なお、

一、表記に関しては、片仮名書きの原文筆記を平仮名表記とし、明らかな誤字、脱字を改めるとともに、文字を統一した。

一、あて字については原文通りとした。

一、文意を明確にするため、句読点を必要な限り付した。

一、欄外に書かれていた註を、一部見出しとした。

成瀬仁蔵講話　1

正准会員会に於て　―明治四十五年六月二十三日―

今日は、珍らしく多くの卒業生にお目にかゝりまして深く喜ばしく思ひます。暫く御目にかゝらぬから、ゆっくり御話したいと思ひますが、多数のお方であるから心に任せませぬ。又、今日はいろいろ約束がありますからお先きに失礼して又出掛けねばならぬと云ふ訳で、御話を致すよーに考へを纏める暇もありませんでしたが、斯うお目にかゝっただけでも、皆さん御健康であり、相変らず熱誠を以て母校にお集まりになったのは、私の非常

に喜ぶ所であります。

今度、来月の二十八日に立ちまして、来年の二月末迄の間に、布哇を始めとしてアメリカから欧羅巴を回りますについて、あなた方からいろいろ友人達にお話なさりたい事もありませうが、個人個人にお話しを致す間がありませんが、あとから手紙でなりとお申しこし下さっても、亦、私の宅へお尋ね下さっても宜しう御座ります。尤も此の頃は大層多忙で、外出勝ちでありますけれども、今年の例会に於て皆さんに、此の会で私が感じを述べます最後の機会に於て、最も深い今日の思想界の有様をお話をすることは、私の最も喜ぶ所であります。

三年生には此の前の水曜日に、今日は我が国の著しき発展について大切な時である。願はくは今後我々が益々一致共同して進まねばならぬと云ふことを申しました時に、此の月二十日は我が国にとって重大なる事の起らんとする萌しの日である。故に、もー一層あなた方が目をさまして事をしなければならぬと申しましたが、其の内容を申さなかった為に何の事やらおわかりにならなかったかも知れぬ。けれども、之れは只私の感じを申したばかりではない。

我国精神界の統一（帰一協会）

桜楓会の幹事からの御要求もありましたから、御存じのない方もありましょーが六月の二十日は、予て私共の切望して居りました所の精神界の統一点が出来て来た。今後社会を導く所の社会的人格が出来て来た。其の名前は帰一協会と名づけられました。我が国の社会に帰一協会と云ふものが生れたと云ふことにつきまして、其の大体をお話することは、皆さんの利益になることが多いだろーと思ひまして、又、夫れから今日の大勢をお感じになることが出来るであろーと思ふ。

渡航の目的

又、今度私が洋行することは夫れが主なる目的ではないけれども、大層深い関係のあることであるから、皆さんは夫れを考へておいて貰ひたいのです。其の関係が大層広く又複雑である上に、此の頃私は大層忙しいのであるから、そー云ふことを申す為に充分用意をして順序を立てゝ申す暇はありませんけれども、私がそんなに申さなくとも、あなた方は同じ感情を心に抱いて居らるゝと思ふ。

感謝と希望に満つ

私の感情を言ひますと、私の子供のときから奮闘して来た、命をかけて望んで来た其の望みが出来得るものであろー、夫れが事実であろーと云ふ光明が認めらるゝ様になったであろーと思ふ。私の心は過日来、誠に深い感謝に満ちて居る。言ふ可からざる深い望みと感謝とを以て満たされて居ると言はるゝであろー。併しそー言ひますと、今日の女子教育も、精神界の運動も、世の文明も誠に順調であって、満足せらるゝ時代であると云ふ様に解せらるゝかも知れぬ。けれども一方には、誠に我々の力の足らぬこと、徳の不充分なることによって誠に深い心配を持って居る。此の憂ひと希望とが、私の此の生涯一日も忘れられない問題になって居るが、これについては時々お話をしてあるから、お察しがつくと思ふけれども、夫れがどー云ふ風に発展しつゝあるかと云ふことについてはおわかりにならぬ方が多いと思ふ。故に、其の内容について一通りお話しすることが必要であると思ひます。

諸子は熱心なる愛校者である

私が今此所へはいって参りまして、実は今朝は早くから約束してありまして、既に其所へ行って参りました。此の会で何を言ってくれよと云ふことはわかっておったけれども、どー云ふ順序でお話しすべきか少しも考へる暇がありませんでした。けれども此の堂に入ってあなた方の顔を見ると、此の間卒業式に申しましたよーに、あなた方は永久、母校の娘である。熱心なる愛校者であると云ふことを感ぜずには居られません。

又、三年生は此の忙しい時機に於て、不意なる出来事が続々起って来るにも拘らず、誠に愛すべき態度を以て着々事をしておいでになることは直ぐわかる。故に私は大学生が重大なる使命を悟って、新しい命に生きて活動して居らるゝと云ふことがわかるのであります。

幼少より逆境に逢ひ、又宗教上の問題に苦めり

私は子供の時から殆んど逆境ばかりに戦って参りました。殆んど小さい時から親もなく友もなく、自分一人では信じて来ましたけれども、ほんとーに同じ信仰を以て話しあひ、夫れを助くる所の親も友もない。一時は帝国大学も文部省も自分の事業を妨げる所の敵であったこともある。又、私の故里は長州でありますが、其の長州の先輩達も中々私共の事業には妨げになったこともあります。

もー一つ私の根本問題は宗教問題であります。之れは女子教育、信仰問題の根本となるものである。これも今から二十年前、アンドーバーで一年余り苦しんで漸う見出だす所があって、是れがどーなるものか、我が国でどーなるであろーかと殆んど見込みは立たなかったのである。丁度聖書にもある様に、雛をよせよーとするとわけられる。少しく育てよーとするとCheckせられるのである。あなた方が年々卒業しておいでになるけれども、社会へ出ると世の荒波には堪へ得ないのである。併し私は、どーしても私はこれより他に道はないと決心したのであります。

四十五年に於ける我が大なるInspiration

私は十三の時に志を立てましたが、国の先輩は大抵政治家になったのである。私はどーしても世界と云ふことが思はれる故に、自分は若し政治家になるならば世界的の政治家になりたいと思ひました。

夫れから宗教にも入り、教育もする。従って、どーしても世界の勇者となるには世界的にならねばならぬと、昨年迄考へて居りました。

そーして明治四十四年を送って四十五年となる間に、一つの大きなInspirationを受けました。夫れは、自分が今度世界を漫遊するのは、只世界の女子教育を視察するのみならず、他に大きな使命があるかと考へました。

信仰告白の時機来れるを思ふ

夫れは、私はある方に申しました様に、日夜私が集注するのは宗教問題である。之れは私の道徳、私の研究問題と少しも離れぬものであるから、校風の上にも其の命は加はって居ると思ふ。けれども真にこの信仰の立場を世に明らかにし、自分の信ずることを告白すると云ふことは、私の友人にも話すことなく二十年を過して参りましたけれども、どーも其の時が来たのではないかと云ふことを考へましたので、私の信ずる所の態度を友人にも明らかにし、猶或る程度に於て、世にも公にすべき時かと思ふ。

そこで私の告白は、先づ自分が其の信仰に入る。又、洋行するに就いても、真に夫れが私のCallingであるならば、お受けをすると云ふ決心をしなければならぬ。又、桜楓会員の皆さんと二、三年御一緒に研究、修養して参りましたから、一段落をつける必要があると考へました。

そこで、帰一協会と名づけて私も其の中に入って、二十人の発起人が主となって、三十人ばかりの人に手紙を出して此の二十日に集まりました。其の他、外国に行っ

て居る人が四、五人あります。そーして、会には出られないが入会したいと云ふ人も続々現はれて参りました。

其の時に私は申した。我々が発起人と云ふ名を以て案内を出して、皆さんにおよりを願った。そーすると我々が何やら拵へる様な、名前から帰一と言ふから、クリスト教も仏教も神道も総てのものをよせるよーに聞えるであろー。けれども我々が拵へるのではなく、入るのである。

宗教、信仰の真髄

Logosと云へば西洋の名で、Yogaと云へば仏教の方である。帰一と云へば実は支那の語であるが、そー云ふことは申さない。そー云ふ精神界の帰一点とか宇宙のRealityと云ふよーなものは、我々が拵へることの出来るものではない。私共は夫れに導かれて居る。我々が拵へたのではない。自分は夫れに入ったのである。Devoteしたのである。之れはあなた方にも申した様に、之れが我々の道徳であり、宗教である。夫れが我々の生命であり、神である。夫れと私共が一つになったのである。私は之れ迄、クリスト教に入ったことがある。仏教にも私の家の籍があります。神道も信じたことがあります。儒教も私の家にありますけれども、今度のものは今迄のものよりも一層広いものであると信じたから、之れに入ったのである。其所に兄弟もあるから、其の兄弟と共に事をして行くと決心しました。其の時に私は、明日から其の宗教に入る。そこで何か心の式をしなければならぬ。夫れにはFormがいると思うて寝につきましたところが、夢を見ました。

其の夢に、私のなくなった父と其の二十日前になくなりました弟と二人が出て来て、其の間に川がある。弟は始終、私の仕事を助けて居る。私は足の指に棒をはさんで輪をかいて居った。ところが親は、そんなことをしたってかけるものかと云ふ顔色をして居る。私の父親は何も言はないけれども、わかるのである。親の心はよめるのである。所が親は何を思ったか、私をどんと打った。けれども私は其の為に、自分の持って居る所のものを失はなかった。其の時父は、夫れ程の決心ならまあよいわと云ふ顔色を表しました。弟も喜んでくれました。

そこで私は、自分の親と弟とが現れて来たから、之れをSymbolとして帰一協会に入りました。そーして、私が一番長く共に事業をして居る所の学監にも言はない先きに、桜楓会例会で話し、其の次に麻生学監に話し、次に森村さんに話さうと思ったが、之れは病気であるから渋沢さんに話しました。然るに男爵も、実業と云っても

只金を儲けるばかりではいけない。どーしても精神修養の根本から始めて行かねばならぬと云ふお考へから、賛成の意を表せられた。

万国精神的平和の宣伝

そこで、私の外国へ行くは、International movementを起すと云ふことである。今ある所の万国平和はBalance of powerで、勢力平均である。けれども、どーしても精神的平和を開かねばならぬと考へました。夫れでLifeを書いたのも、其の他いろいろのことは、皆万国的の立場を明かにして、今、世界の精神界がどーなって居るか、幾らか瀬踏みをして見よーと思ひました。

入会者は悉く国家の中堅なり

そこで先づ、東京の帝国大学で姉崎博士、実業家では渋沢男爵、森村翁もStaffに入ると云ふ。其の次に浮田和民君、之れは早稲田大学。夫れから帝大で井上哲次郎君、中島力造君、京都大学の松本亦太郎、桑木嚴翼。上田敏、之れは文学の方からである。夫れから宗教家の方では同志社の原田君、ギュリキ君と云ふ様な顔触れである。私は実に期せずして兄弟が出来たと思って実に嬉しかったけれども、私は黙して語らなかった。そーして綱島梁川君、海老名彈正君に話しました。も一つ驚いたのは宣教師のグリーンさん。外国人に一人、クリスト教に一人、坊さんに一人。レビーには江原素六、夫れに対しては村上専精さん。夫れから寺を持って居る人では釋宗演。神道もあれば儒教もあると云ふ風で、皆、代表的の人々であります。

又、私も賛成であると云ふ人々には徳富猪一郎、金子堅太郎、大隈伯、西園寺侯と云ふ様な方もある。けれども、未だ入れないのである。

そー云ふ訳で兄弟が沢山出来たのであるけれども、私は人が多くよったからすると云ふ訳ではない。一人でも入るのである。皆が反対しても信じたらするのである。

夫れで夢に見たよーな突き飛ばしや、反対やいろんなものが来るけれども、夫れは構はない。自分に信ずる所さへあれば、どんなことがあっても厭はないのである。女子大学を興す時に六十万の金がいると云ふ。夫れは、どーして出来るか。私にあるものは借金ばかりである。どーして出来るかと云ふことが真先きに起る問題であるけれども、案外なものである。

今日の宗教は地方的にあらず、社会的人格の生るべきものたるべし

又、昨日も或る学校の校長が来て、私に忠告をしてくれました。あなたは余り考へを発表し過ぎるから、世間の反対を買うて同情がよらないと云ふ話。又、或る人は、成瀬宗を立てるのであろーなどと云ふよーな誤解を持って居らるゝ方もある。けれども或る人は言はれたよーに、昔は仏教、クリスト教、儒教などとわかれて居ったけれども、今日は斯くの如き地方宗を立つる時ではない。今日は、どーしても社会的人格の生るべき時である。其の時代時代にあー云ふ偉人が生れ、宗教が生れたのである。今日は総てのものが帰一する所のものが生るべき時で、木に竹をついだよーなものを拵へるのではない。或る人の如きも、今日は只物質的に傾いて居って仕方がない。どーしても精神的生命をもり返さなければならぬと言って居られます。此の一大危機に於て、どーしても精神的に蘇らせなければならぬ。

故に人は何と言はうとも、そー云ふ中傷離間の説に惑はされぬ様に、お互は注意しなければならぬ。

教育制度の弊を矯正せんが為に此に中堅をおいて、尽さんとするものが此に出来よーとして居る。精神界に於ても、何時迫害が来るかも知れぬ。けれども我々は、天下の公道として尽さんとする多くの友を得たのは、誠に愉快であります。

諸子は大に修養、研究を勉むべきなり

夫れで先づ、この会でも研究の問題を定めて、第一、哲学、並びに宗教。第二、道徳、教育、文芸、それから経済、政治、国際問題。研究、修養、もー一つは教育の事、社会の事を根本的にして行かうと云ふ。斯う云ふことは案外の事で、実に感謝に堪へぬのである。夫れであなた方も益々研究、修養をお勉めになる様に。天の祝福は、既にあなた方の上に加はりつゝある。今度私は海外へ出るについて、どーか此の生命の芽生への展びる様に。きずのつかぬよーに。どーか会員並びに学生諸君の共同によって、其の実のあがるよーにおつとめなさるよーに希望致します。

歓迎会席上にて　―大正二年三月十五日―

私は二十年前アメリカに行きました時、十月頃に余程大患にかゝりました。此の間、マサチュセッツに行ったのが其の頃でありました。丁度同じ様な経験を致しました。夫れから二十年たって、年もとりました。会員からは白髪がふえたと云ふ話もあったが、私の気分は少しも変らず、今度の旅行も青年の旅をしたのである。下等の汽車に乗った処もあるし、内地に居てもせぬ程の無理をしたこともあります。形もバンカラで、一向構はない。全く書生風でやったのである。気分はそー云ふ風であるけれども、無理をするといけない。之れは一種の自殺であると思って、今度大いに悟ったのであります。夫れであなた方が今後、御旅行をなさるにも御注意をしておかねばならぬ。

皆さんに送って頂いて横濱でお別れした時に、私は疲れて居って少々熱気があったけれども、打ち勝って船に乗りました。そーして無理に無理をかさねたのであるが、防御して夫れがきいたからよかったものの、之れからお互が此の世に処して行くには、そー云ふ無理をして身体を虐待しなければならぬことが段々多くなるのである。故に、今後あなた方が仕事をなさるにも其処をよく考へんと、遂に打たれて再び起たれなくなると云ふことにならう。そこで私は自分を戒むると共に、あなた方にも申しておきたいと思ふ事の一つであります。

桜楓会員について

之れは私の今度船に乗りかけの経験であるが、そー云ふ状態で行ったのであるが、夫れにも拘らず目的の半ばを成就して帰ったのは、実に桜楓会員皆さんがよく留守を守って、私をして内顧の憂ひなからしめられた賜であると思ひます。

真に夫れを成就する処の精力を保たしめたもの、其の空気を常に震動せしめた処の最も大切なるものは、あなた方桜楓会員の誠実、熱心、向上心と云ふ様なものであると云ふことを信じて、私は、あなた方の忍耐、御尽力

を深く喜んで居ります。満足して居ります。桜楓会員の母校を離れてから、見ぬ間に発展して居る今日の世界に適合する処の精神が育って居ると云ふことは、私の最も心強く思ふことで、之れは一言申しておかねばならぬ。又、皆さんが御自身の価値を信じて、自覚して下さる様にありたいと思ひます。

布哇についた時

第一についたのが布哇で、先年も往復とも布哇へよりましたが、今度は一寸四国へでもついたかの様な心持で、そーしてついて見ると、殆んど日本人で、日本の島か知らと思ふ位でした。一番先きに税関がつく。其の次に新聞記者が来て、一寸とらして呉れと云ふ訳で、写真をとる。そーして直ぐ聞くことが婦人参政権問題で、夫れについての私の意見をきく。夫れについて日本の高等教育を受けた婦人の状態を尋ねると云ふことが起るのです。

リチャード氏

布哇では鈴木君が病気になったが、それは問題にはならなかったが、もー一人伝染病の疑ひある病人があると云ふことで、検疫官が来て血液を検査する。夫れに三時間ばかりか、って、とーとー、そーでないと云ふことがわかって船が横つけになる。そーすると大岡さんや五十嵐さん、何時か来られたリチャードさんも来られた。そーしてリチャードさんの自動車に迎へられて家族の人々にも面会致しました。此の人は早くから私を待って居られて、私も一週間位居るつもりでありましたが、ゆっくりする暇がないから用談を簡短にすまして、リチャードさんの自動車で布哇の男子の学校、女学校、慈善事業をして居る処や、日本町や其の他、古跡の数々を三時間ばかりのうちに残らず見ることが出来ました。

布哇の様子について

私の非常に喜んだのは、二十年この方、布哇の町も大層開けて、日本人の風俗から生活状態に至る迄、非常に進歩したことである。先に行った時は（空白）であったが、今度は夏であった為か、布哇の島は立派である。美麗であって、まあ、パラダイスとも言ふべき処であります。さて晩方、再び太平洋に乗り出しましたが、実は其の十日の間は先帝崩御のあとで、船が布哇に着く迄は誠に静粛でありました。そーして段々外国の領地に近づくに従って活動写真なども始まる様になり、私も始めて見たのである。無線電信も聞いては居ったが、実際使ふと云ふことは始めてで、機械なども詳しく見ることが出来、

交通機関の開けたことを楽しみと致しました。

十九日に桑港について第一にスカッダー氏の処へ行き、ジョルダン博士のスタンフォールド大学へ参りました。彼処は誠に壮大なもので、チャペルなども余程美的である。敷地の広さも二千エーカーである。此処で感じましたのは、人間にどうも非常な深い人智の測り知る可らざる処、奥儀ある深い動機がある。此のスタンフォールド大学を立てた人は、今日の物質文明の通弊である処の利己的な処がある。悪い手段を以て、社会の利益を害しても自分の為にしたいと云ふことの外に猶悪いことをして、非常な金を拵へたのである。けれども其の金をどーしてあゝ云ふ公共の事業に使ふ様になったかと云ふと、実は愛する処の子どもを失うたからである。スミス女子大学を立てる様になったのも、子どもを失うたからである。

乃木大将

乃木大将の自殺と云ふことも外国では大分問題になって居るが、到底、其の心事を解する人はない。有名なる牧師でさへも自殺と云ふことは臆病であると言って居る。私にも意見を聞かれたのであるが、乃木大将の自殺にはいろいろ複雑なる原因があると思ふ。

子どもを失ふと云ふことは、如何なる勇者も堪へ得ざる処の情緒が起るのである。児嶋惟謙さんの死なれたのも、子息に先だたれたことが非常な影響であると思ふ。夫れで子を失ったと云ふことは、斯くの如き大学を立つる動機ともなったのである。

牛嶋氏

そーして、カリフォルニヤの状態を観察して後、ミルカレージと云ふ婦人の学校を見、バーバンクスの園芸、中嶋氏の事業などをも見て、感じたことがいろいろある。オークランドではポテト王と言はるゝ牛嶋氏の事業をも見ました。そーして、いろいろの大学の設備、教育の有様などを見ることに勤めましたが、私の非常に驚いたのは、二十年前には沢山のダークサイドを見て慨嘆に堪へなかったのであるが、二十年後の今日は風俗も大層よくなって、誠に日本人の生活が改められたのである。之れはカリフォルニヤのみならず、ローサンジェル、ソルトレークから私の歩いた処は皆、非常なる勢で日本人が進みつゝあるのである。

ポイントローマのカレージは三哩も行けば直ぐメキシコとの境で、気候もよし、誠に立派な処である。布哇もよい処であるが、誠にポイントローマの雄大明媚なる風光は迚も名状す可らざるもので、自動車で通るのは惜し

い位な処。近く見るもよいが、遠景が又格別であって、之れは日本では見られない美景である。私は、そー云ふ景色のよいことよりも、学校の設備などよりも、どー云ふ処に教育の原動力があるかと云ふことを見たい。其処の秘訣をつかまへたいと思って参りました。

そーしてチングリーは留守で、其の代りをして居る長にあひましたが、先方では非常に待って居って、あなたに全部お目にかけたいが、あいにくローサンジェルは子どものためにわるい病気が流行って居るので、彼の地を経て来たものは一切交通遮断となって居るから、残念であるが遠方から見て下さいと云ふので、私は其処に泊って体操なども遠方から見ましたが、体育と云ふことを余程重んじて武の教育をして居る。彼処は精神界の空気を作る為めに、世間からは離れた処の別世界にあるかの様に感ずる。研究生など景色のよい広い処に天幕を張って一人づつ居る。そーして其処には別に研究室もあります。其他実行の方面もいろいろあって、園芸場などもいろいろ見ました。つまり今日の教育は形式的になって居るから、先づ第一に其の原動力を養はねばならぬと云ふ考へらしい。

其の晩招かれて行って見ると教授達は残らず集まって居って、帰一協会のことを話すと、夫れは私達の主義であると云ふ様な話が出たのである。翌日はミュージックコンサートがあるからと云ふ招きで行って見ると、全く私の歓迎の為の会であると云ふことは後でわかったのである。そーして、何か話をして来れまいかと云ふことであるから、英語が間違はうがどーであらうが、そー云ふ事には一切構はず、Appreciate しておいたのであるが、帰りには三哩程も自動車で送られました。彼処の学生は英語などもはっきり使はるゝし、音楽なども誠に上手である。つまり此処には一つの特色があって修養を本として居るが、宗教も此の学校で修養して居ることと似よった点があると云ふことは、確に看取せられたのである。夫れと同時に、狭いと云ふこと。余り秘密主義を取り過ぎて居るのではあるまいか。又、日本の愛国心と云ふやうなことも、彼処の人々は解し得て居るかの様に感じました。少し狭いと云ふこと、之れは我々が両方面を持って居って、参考すべき点もあるが又注意すべきことであると思ふ点もあったのです。そーしてローサンジェルに帰りましたが、日本人の進んで居ることを見て非常に愉快に感じたこともありますが、一方にはポイントローマが余り世間とかけ離れて居る為めに、ローサンジェルに居る人達も詳しくは知らないと云ふ有様である。

外国での感じについて

夫れで私は、身の外国にあると云ふことを余り思はない。マサチューセッツなどへ行って見ると、まるで故郷へ帰ったかの様な心持。英國へ行くと、大分日本へ近くなったなと思ひ、獨逸へ来ると、もー門口迄帰ったのか知らと云ふ様な心持で、世界の人は皆兄弟である、世界は我が家であると云ふ様で、外国と云ふ感じはしない。昔の世界と今日の世界との比較がとってあるが、昔の世界は大層大きかったけれども、今の世界は誠に小くなったのである。誠にアメリカの大きな国、財源の豊かな規模の壮んな国へ行くと、誠に日本が小さい、窮屈であると云ふ感が起る。

東西文明

もー一つ、カナダに行って感じたことは、世界の文明は東に向って流れて居ると云ふことは、誰れも言ふことであるが、之れは実際である。そーして文明の最も盛なる潮の流れの真っ先きは、太平洋沿岸に打ちよせて居る。東洋では布哇に流れ集まって居る。故に、太平洋沿岸には世界の文明が集まって接触して居る。我々日本人は、真に彼処に於て西洋人と共に提携し得るかどーか。又、其の余地があるのであると云ふことが問題である。若し日本人が西洋人に競争するとすれば資本がいる。惜しいかな、其の資本は持って居ない。知力はどーかと云ふと、困難であるが奮闘しつゝあるのである。そこで、どーしても日本人が彼処へはびこらねばならぬ。そーして商売なり工業なり、ほんとーの事をせやうと云ふには、どーしても彼処にもっと入り込まねばならぬと思ふ。外交の政略上、そー云ふ事を言ふのは宜しくないかも知れぬ。又、彼方の人も大に疑懼の念を懐いたのであるが、日本人の沢山になると云ふことはアメリカの為にもわるくはないと思ふ。故に、あなた方の中でも少し資力があって、堪へ得る人があるならば行くがよいと思ふ。私が態度をかへた事について少しく言っておかねばならぬが、斯う云ふ小いことについても大体がわかるのである。是れ迄は、大西洋の沿岸に留学すると云ふ事は甚だ不安に堪へなかった。夫れは成功して帰るものが誠に少なく、堕落するか、然らざれば健康を害する者が多かった。然るに、今日では全く変って了ったのである。無論、自分にしっかりして居なければならぬと云ふことは何処へ行っても同じ事であるが、サンフランシスコなり、ローサンジェルならば、自給して学問することが出来るのである。世界中で金のない学生が自給しつゝ勉強するには、比較的此の土地がし易い。故に、人によってはよからうと思ふ。そーして私の喜ぶことは、サンフランシスコへ行っても、

ローサンジェル、ニューヨーク、ロンドン、何処へ行っても桜楓会員が家庭を営んで居るが、皆、幸福であると思ふ。又、そー云ふ家庭の出来て居ることが、日本人のために誠によいことであると考へます。ピューリタンが移ったと云ふが、家族をつれて行ったのである。日本人が偶々海外へ行っても、一人だけで行くと長続きがせぬ。故に、どーしても婦人も一緒に出かけるがよい。女が出て行かんければ、女が助けんければ、男はどーしても、よー出て行かんのである。

就職難

就職難と云ふこともあるが、何処も彼処も縮小で人を減らすと就職難が起る。斯う云ふ時には、どんどん海外へ行くがよい。外国へ行くと度量が大きくなって、世界が見える様になるのである。世界は狭くなったが、もー少し進めば宇宙を狭くすることが出来る。日本を世界にするか、世界を日本にするか、どちらにしても日本人は今の様な薄志弱行ではいけない。もっと意志を強くして、男も女も骨は折れるが、日本に居るのは楽であるからと云って楽ばかりして居っては、日本の将来はどーなるかも知れぬ。故に、骨は折れても辛抱して、最後の勝利を得るやうに勉めねばならぬ。

今日のアメリカの Interest

もー一つ変ったことは、此の前行った時にはアメリカは日本に興味を持って居るから兄弟の様な感じがしたのであるが、今日ではアメリカの Interest は支那に向って居る。学生も支那人が多く、日本人は少ない。そーして支那の事は非常に褒めるが、日本の事はさ程でない。もー一つは、昔は日本の学生に対してはお恵みがあったけれども、今日は何れの大学でも各国人、同じ様に学問が出来ねばならぬ。向ふの人と対等の競争が出来ねば、交際が出来ぬと云ふ有様である。向ふの人は言語が達者であるが、我々は不得手である。商売をするにしても資本がなければ、日本人に幾ら腕があっても財力で負けるから仕方がない。故に総ての点に於て力を養はねば、此の激甚な競争場裏には立てないのである。

モルモン宗　マホメット教

私の今度の研究の主なる問題は教育、及び道徳の原動力の問題であります。即ち此の学校で初めから重きをおいて居る処の教育主義です。之れは十年の間の経験から一つの仮説を作って、之れを世界の光りに照らして見て、もー一つ新らしい力を得やうと云ふ事が主なる目的であ

りました。故に、ポイントローマへも行き、モルモン宗をも研究し、マホメット教の人にもあひました。キャソリックの人にもユニテリアンのもとにも、英國のコンコーヂヤのもとにも、波蘭、ベルギー、伊太利の主なる人にも、各大学の有力なる人にもずっと逢ふ事が出来て、私は東洋の将来、女子教育の将来についても、従来の確信をずっと強くすることが出来ました。之れは、あなた方も聞きたい事であり、私も話したい事であります。

帰一協会

之れは、帰一協会の報告が一号だけ出ました。之れは一年に三度だけ出る報告であるが、一円出せば貰ふ事が出来るのであるから、猶夫れについてお読みになるならば、あなた方に世界の大勢がよくおわかりにならうと思ふ。アメリカにも、独立の帰一協会が出来ましたので、エリオット博士は幹事長となり、其の多数の有名なる人々が皆、幹事となられました。

ロッスとスタンレー ホール

社会学者のロッスと云ふ人なども非常な喜びで、若し此の帰一協会の申し出が三年前であったならばむつかしいが、今日はもー其の時機である。自分も出来るだけのことをするから大いに尽力してくれよと云ふことで、私の先生であったスタンレーホールとかタッカーと云ふ様な人々も皆、賛成であります。

英國も、主なる大学は皆回りまして、ミューアヘッド、マッケンヂーなども幹事となり、セクレタリーとなり、英國にも独立の帰一協会が出来て、東西相助けて行かうと云ふことである。佛国の大学総長は日本で言ふ文部大臣の権能を持って居って、小学校の事まで支配する処の教育界の重鎮でありますが、斯う云ふ人達も皆、熱心なる賛成者となったのであります。

私は、帰一協会については心配である。夫れだけ世界へ踏み出して相談をかけたのに、日本ではどーであるかと思ったのである。若し、此の大勢に応ずることが出来ぬなら、我が日本が退歩する。夫れについては、此の女子大学のあなた方が大切である。此の学校の教授であった奥田文部大臣、又、前の文部大臣であった此の学校の評議員である久保田文部大臣の如きも、我々の書いた書物を教育界に広めやうとせられた有力な賛成者である。故に、あなた方も責任の重大なることをお感じになって、確信を強うして、内に銘々の力を養ひ、外に責任を全うして、今日の此の大切なる時機に遅れぬ様になさることが必要であると思ひます。

1） John W. Boyer, *The University of Chicago A History*, The University of Chicago Press, 2015, pp.164-165
2） Biographical Note, Guide to the Ernest Dewitt Burton Papers 1875-1969（http://www.lib.uchicago.edu/e/scrc/findingaids/view.php?eadid=ICU.SPCL.BURTON）（2017/6/20）
3） 大西晴樹「キリスト教大学設立運動と教育同盟」『キリスト教学校教育史話』教文館、2015年、125～126頁
4） 井深梶之助とその時代刊行委員会編『井深梶之助とその時代』第三巻、明治学院、1971年、189頁
5） 『日本女子大学校長成瀬仁蔵先生述　実践倫理講話筆記　明治四十二年度ノ部』日本女子大学成瀬記念館、2012年
6） 成瀬仁蔵「欧米旅行報告」『帰一協会会報』第弐、96～97頁

further about it. If you are to be in the city again before your departure from the country I hope you will let me have the pleasure of seeing you and conferring with you further in this matter. Should it be impossible for you to return this way I shall be glad to hear from you further in reference to it, though a conversation would be more satisfactory,

Sincerely yours,

＜翻訳＞

日本を発たれる前に書かれたあなたの手紙を受け取った時は、アメリカへの出発に間に合うよう返信をするには遅すぎました。何通かの紹介状を同封した手紙を私のオフィスに置いてあります。ひょっとしたら到着後こちらに立ち寄られたなら、手紙を受け取れると考えました。これらの紹介文はあなたにとって大いに役立つでしょう。それが私のできる最大限の厚意です。7月に書いた手紙も同封いたします。

シカゴに戻ってきてみると、〔今度は〕あなたの日本領事館宿舎で書かれた手紙を受け取りました。手紙〔の内容〕に大きな関心を持ちました。また、同封されていた印刷物も拝見しました。ご提案されている帰一協会には、とても興味があります。是非そのことについてもっと話し合う機会があれば幸いです。もしアメリカを離れる前に再びシカゴを訪れる機会があるなら、お会いしてこの件について協議させてもらえたら嬉しく思います。もしこちらに戻ることが不可能ならば、あなたからそれに関して更にお便りをいただけると嬉しいです。ただ、会話した方がより満足のいくものとなるでしょう。敬具

＜解説＞

この書簡は1912年9月26日付になっている。最初の出会いから3年たっても親しい関係で、何度か書簡を交わしていることが分かる。少なくとも成瀬は、アメリカに発つ前にもバートンに書簡を送っていた。残念ながらその書簡については、今回発見されたフォルダには所蔵されていなかった。ここで紹介しているものは、前節で紹介した成瀬のシカゴ領事館より送付した書簡への返信である。それに、わざわざバートンは成瀬が訪ねてきてもいいように、彼のために推薦状を用意して置いていったという。バートン自身、成瀬と直接会って話を聞きたいと強調しているように、成瀬の思想にかなりの関心を持っていることも伝わってくる。

（以下、次号に続く）

（北陸学院大学教授　つじ　なおと）

していたと考えられる。実際この書簡に対し、バートンからの返事はとても好意的であった。その内容は次節で詳しく見てみたい。

半年以上に及ぶ欧米旅行から帰国後に、成瀬はバートンについて次のように述べている[6)]。すなわち、「ボルトン博士は、先年軽井沢で逢つて、斯ういふ問題に就いて深く意見を交換した人であるが、此の人からもアメリカの大勢が非常に変つたことを聞いた。十五年前には斯ういふ話をしても迚も駄目であつたが、今では時機が丁度宜いといふことであつた。」と記しており、アメリカでも帰一思想が受け入れやすくなっている状況と受け止めたのだろう。バートンの後押しもあって、成瀬は「私は亜米利加に於ける帰一協会の中心は、シカゴかボストンか紐育か、此の三ヶ所の中であらうと思ふ」と書いている。先行研究でも重視されてきた東海岸（ボストン、ニューヨーク）と並ぶだけの位置にシカゴが置かれているのは、明らかにバートンとの強い結びつきがあった故と考えられる。

書簡の内容としては、帰一協会の目指す世界像をかなり具体的に述べており、建物や出版物にも言及している点からも成瀬の並々ならぬ意欲が感じられる。

6. 1912年9月成瀬宛バートン書簡

次に、前節に見た成瀬の書簡に対するバートンの返信について見ておこう。

＜原文＞

Sept. 26, 1912.

President Jinzo Naruse,
5735 Lexington Ave.,
Chicago, Ills.

My dear Mr. Naruse:

When I received from you the letter written before you left Japan it was already too late for me to send a reply in time to reach you before your departure for this country. I accordingly wrote a letter enclosing several letters of introduction and left it in my office thinking that you would perhaps call there on your arrival and would thus obtain the letter. More to show my good will than because these letters are now of any use to you, I enclose herewith what I wrote in July.

Since my return to the city I have received your letter written from the residence of the Japanese Consul. I have read this letter with great interest and have also examined the printed matter enclosed with it. The proposed Association Concordia interests me greatly and I should be glad to have the opportunity of talking with you

へと向かわせています。

そして以下のような動きは、もちろん、人類全ての権利であり義務であると我々は信じています。人類はこの原理と自らの任務に忠実であるべきであり、同時に共通の理想〔実現〕のために、他者との協力に十分寛大且つ率直でなければなりません。そして、これらの諸課題を真剣に探究することを通し、国家と全ての人種の運命により強固で寛大な基盤を築こうと努めなければなりません。

私たちがこの協会を組織する目的は、同じ関心や見解を持つ者同士の協力を得ること、今日の様々な問題をこの立場から研究すること、そして私たちの共通する理想に従って行動することです。

従って、帰一協会趣意書で既に述べた通り、私たちは他の国々で私たちの取り組みに共感してくれる人々との協力体制を確立し、世界文明の普遍的な理想のために活動したいのです。

協会の活動内容は以下の通りです。

一. 集会の中心となる場所や研究、調査、文化交流のための機関を提供すること。私たちはこの目的を達成するために、いくつかの国際的な建物を作ることを夢見ています。

二、出版とリーダーシップの分野で尽力します。

三、国際的な運動体となることが究極の目的です。

この活動の第一歩として、季刊の雑誌の出版をしたいと考えています。全世界的な精神的一致(Universal Spiritual Union)と経済的な平和につながる最も重要な問題の本質的な研究に貢献するために。雑誌は英語と日本語の両方で出版し、英語版は米国の何処かで編集されることを計画しています。

あなたの極東問題に関する思いと全ての信仰や人種に対する寛大な態度を考慮して、私はあなたに自らの思いと心からの願望や確信について自由に主張いたします。

あなたからのよい返事を待っています。

敬具
成瀬仁蔵
日本女子大学校校長

＜解説＞

この書簡の第一の趣旨は、バートンに対する面会と協力の要請であるが、一方で、自身の帰一協会への熱い思いを伝えている点は注目に値する。バートンが帰一思想に対し共感してくれて、アメリカでの普及活動に協力してもらえることを期待

＜翻訳＞

親愛なる先生

日本からお手紙を差し上げた通り、私は最近ここに到着しました。私が渡米した第一の目的はアメリカの教育事情を調査することです。しかし、宗教及び倫理に関する根本的な問題や、宗教と教育の関係についても観察し研究しなければなりません。ですから、あなたから個人的にアドバイスを伺う機会をいただけるなら感謝なことです。また、以下に記す計画や理念について手紙で返信いただけると大変ありがたく思います。

帰一協会の趣意書を同封しますので、恐らくこの運動案をご理解いただけると思います。

アメリカは深刻な状況にあるようですが、日本も同様です。日本は絶え間なく継承され解決の道が見えないとても多くの困難と複雑な問題を抱え続けています。その主たる原因は古い考えと新しい考えの間にある不一致、すなわち一方では伝統的倫理と信仰が揺らいでおり、もう一方では輝かしい影響を及ぼす西洋文明と接触する機会が増えているという事態にあると考えられます。しかし、我が国の人々は真のあるべき姿に気付き始めており、物質的傾向から距離を置こうとしていることを私はとても喜んでいます。英字新聞の「ジャパン・タイムス」の記事も同封しますので、よかったらご覧下さい。

この運動推進者たちは、指導者たちが国家の富を増やすことに熱心なのと同様に、今後は倫理や教育、宗教その他関連する問題の研究にも忠実に取り組む努力をして欲しいと願っています。それは正に国家の進む方向を指し示す者の務めであり、これが私たちの文明の未来をより強固なものとすることになります。そして、それは物質的な争いを克服することにもなります。

このような努力によって、私たちは国家を特徴づける美徳を保護し、美しい国家体制を発展させようとしなければなりません。しかし、それと同時に、世界文明とも常に関わりを持ち、より広い思想や理想を融合していく努力をしなければなりません。ただこの方策によってのみ、新たな出発へと進む精神を実現することができ、輝かしい文明の発展を獲得することができるのです。このことは、そう簡単には味わえないことではありますが、私たちの熱望していることは価値ある使命です。

日本の現状を見てみると、政治家も軍将校もビジネスマンも教育者や思想家も、今日の精神的な問題(spiritual problems)を熟慮しています。しかし、社会全体に影響を及ぼしうるいかなる統一した動きも実現していません。しかし、いくつかの信仰や風潮が一致や協力をする兆候を見せており、国民の自意識を運命的な方向

statesmen, military officers, business men, educators or thinkers, are thinking over those spiritual problems of to-day. But they has not being realized any united movement, which could influence the whole society. But I should say that there are some signs toward concord and cooperation of various faiths and tendencies, converging to the self-conscious of the nations destiny.

And we believe that it is, of course, the right and duty of every man, that he should be faithful to this principles and to his particular duty, but at the same time he must be broad and candid enough to cooperate with others, for the sake of common ideals and to try to lay a firmer and broader foundation to the destiny of the nations and the whole race through the serious study of these problems.

Our aim in organizing this association is to secure the cooperation of those who have the same care and view as we have, to study the various problems of the present day in this sense and to act according to our common ideals.

Therefore, we want to secure as we have said in the Prospectus of the Association Concordia, the cooperation of those of other nations who would sympathize with our effort and then to work for the sake of the Universal ideal of the world's civilization.

The work of this Association will be as follows:

1. To provide a centre of meeting and an organ of the studies, investigation, and culture. We dream too to erect some international building for this purpose.
2. It shall make its effort in the field of publication and leadership.
3. It aims at last to be an organ of international movement.

As a first step of the movement, I should like to issue the publication of a magazine, perhaps a quarterly, devoted to the study of the most important problems essentially connected with the Universal Spiritual Union and economical peace. The plan is to have the magazine published both in English and Japanese and the English edited somewhere in the United States of America.

In view of your interest in the Far Eastern Matters and of your tolerant attitude toward all faiths and races, I take liberty to appeal to you my intense and sincere desires and convictions.

Hoping your good answer.

Yours respectfully,
Jinzo Naruse
President of Japan Women's University

＜原文＞

Japanese Consul,
5735 Lexinton Ave.,
Chicago, Ill.

Prof. Ernest D. Burton,

My Dear Sir;

As I have wrote you from Japan, I have arrived here lately. My first duty is to investigate the educational matters in this country, but I also have to observe and study a more fundamental problems in regard to the religious and moral, and the relation between Religion and Education. So I should be grateful if you would give an opportunity to ask your kind advices personally or give me an answer in your letter about the following projects and ideals.

I enclose the Prospectus for the association Concordia in which you might see the scheme of the movement.

It may be so serious in this country as it is in Japan. But as you know Japan has been met with so many difficulties and complicated problems which arising in unceasing succession, and which promise no ready solution. And the chief cause must be sought in the discord between the old and the new ideas and condition, which manifests in the wavering faith and the traditional moral ideas, on the one hand and the ever increasing contact with dazzling influence of Western civilization, on the other. But I am very glad that my country men are realizing such real conditions and awakening from the material tendency! I also enclosed the clipping of the “Japan Times”, the English paper, in order you may kindly look into it.

The promoters believe that the leaders must, simultaneously with their endeavor for the increase of National wealth, bend their effort to the faithful study of moral, educational, religious and the allied problems. This is , indeed, the duty of those who have to direct the nation and this is the way for setting the future of our civilization on a firmer ground. And this is the way to overcome the material conflicts.

In these efforts we must preserve the characteristic virtues of the nation and strive to develop the beauty of our national constitution, but at the same time we must be in constant touch with the world civilization and thus strive to embrace and assimilate the broader thoughts and ideals. Only in this way can we fulfil the spirit of the new departure and achieve the progress of a glorious civilization. Though this is no easy task yet it is a mission worthy of our aspiration.

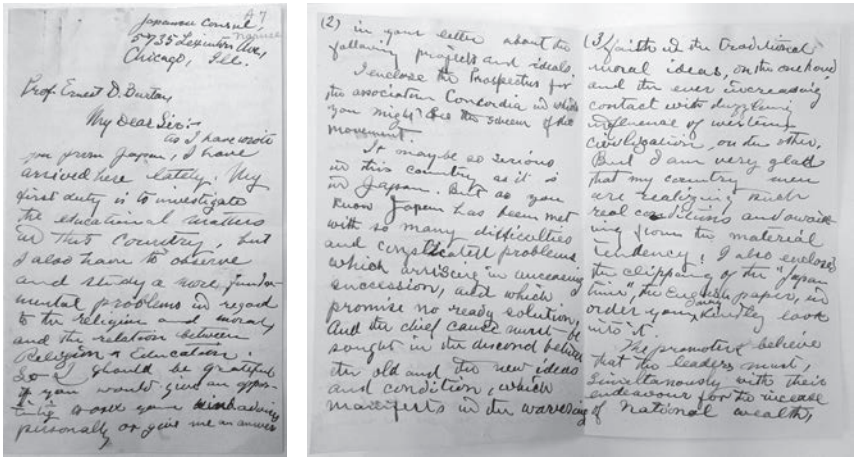
Turning to the actual situations of our country, we see that many men, be the

5. 1912年バートン宛成瀬書簡

最初の面会から3 年後の1912年に送られたバートン宛成瀬書簡も実に興味深い。便箋十頁にも及ぶ直筆の文面からは、成瀬の帰一思想普及への熱意と迫力が伝わってくる【写真3】。

成瀬書簡が書かれた正確な日付は不明だが、成瀬がシカゴの日本領事館より送っていることと、それに対する返信と思われるバートンの書簡の日付が1912年9月26日になっていることから、成瀬がアメリカに帰一協会を宣伝するために渡米した直後の1912年9月早々に書かれたものと思われる。その書簡の内容を紹介してみよう。

【写真3】



Japanese Consul
5735 Lexington Ave.
Chicago, Ill.

Prof. Ernest D. Burton

My Dear Sir:—

As I have wrote you from Japan, I have arrived here lately. My first duty is to investigate the educational matters in this country, but I also have to observe and study a more fundamental problems in regard to the religious and moral, and the relation between religion & education. So I should be grateful if you would give an opportunity to see you personally or give me an answer

(2) in your letter about the following projects and ideals. I enclose the prospectus for the association Concordia in which you might see the scheme of the movement.

It maybe as serious in this country as it is in Japan. But as you know Japan has been met with so many difficulties and complicated problems which arrises in unceasing succession, and which promise no ready solution. And the chief cause must be sought in the discord between the old and the new ideas and condition, which manifests in the warring

(3) faith in the traditional moral ideas, on the one hand and the ever increasing contact with dazzling influence of western civilization, on the other. But I am very glad that my country men are realizing such real conditions and awakening from the material tendency! I also enclose the clipping of the "Japan Times" the English paper, in order you may kindly look into it.

The promoters believe that the leaders must, simultaneously with their endeavour for increase of national wealth,

所蔵：Special Collection Reserch Center, University of Chicago Library.

【写真 2】

バートン博士を迎えて（1909年、軽井沢三泉寮）

う。すなわち帰一思想の形成過程において、1909年のバートンとの対談が大きな影響を及ぼしていたことが今回の史料で判明したのである。これは、従来の成瀬研究では触れられてこなかったことだ。

バートンとの出会いが重要な意味を持っていたことは、成瀬の他の史料からも伝わってくる。講演本文が始まる直前部分に、編者が記した説明文がある。それによれば、バートンが来日したのは「東洋に人道主義の一大学を設立せんが為め･･･過般我が日本に来り、識者の問を往来して、その意見を叩き、教育制度の実地視察を遂げ」る目的であった。そして「我が日本が東西文明の調和を計るべき一大使命を自覚せる今日、同じ使命を感じて之れを東洋に施さんとする遠来の客に遇ふ。『時は近づけり』との声を聞くに似たり」とも綴られている。恐らく成瀬の書いたこの文章においても、東西文明の調和を計ることでバートンと同じ使命を感じていることが窺える。また、同年9月15日、日本女子大学校で「実践倫理」の講話を第二第三学年に対して行った際にも、夏のバートンとの会談について女学生に語っており、バートンとの出会いに成瀬が大きな意味を見出していたことが分かる[5)]。

感謝すると私は確信していますが、月刊誌『家庭』に翻訳を載せることができずに申し訳なく思っています。しかし、九月号にはあなたのメッセージ「女性の最も高貴で偉大な使命」を日本語で掲載しますので、軽井沢での記念すべき場面の写真と共に、極東の教育を受けた女子たちに届けられるでしょう。あなたにも一部注釈を付けてお送りしました。

あなたとお嬢様が親切にも訪問してくださったことを感謝しています。それは女学生たちにとっても良い機会でしたし、私にとっても、あなた方との話し合いを通じて、多くの有益な示唆を受けました。本当に、午後私たちが話し合った宗教と社会についての諸問題は、私は十年以上も心の内で考え続けてきました。ただ、それらの問題が私の生涯の期間で満足いくよう解決されるかもしれないとは夢にも思いませんでした。しかしながら、あなたからアメリカの現状や世界の指導者たちの意見について伺ってからは、私自身を奮い立たせてみようと思うようになりました。近い将来、私の夢や展望は実現するかもしれないと。なので、私たち国は離れていますが、高貴で壮大な働きが成し遂げられるよう常に努力を重ね、大成功を収めることを願っていきましょう。

改めて、あなたのご親切に感謝いたします。　　敬具　成瀬仁蔵

追伸　私たちの大学の絵葉書を数枚同封いたします。

＜解説＞

日本女子大学校開校9年目の夏である1909年に、バートンを軽井沢での学生修養会に呼んで女学生に講演してもらっていた【写真2】。その講演内容については、『家庭』第一巻第六号（1909年9月1日発行）に、シカゴ大学「ボルトン博士」の「余の女子教育主義を披瀝して東洋の姉妹に望む」として紹介されている。しかし講演以上に重要なのは、その日の午後に持たれたバートン父娘との宗教及び社会の問題に関する話し合いであった。その話し合いによって、成瀬自身は10年以上温めてきた「夢と展望（my dreams and visions）」を実現させる兆しを強く感じるようになった、と述べている。10年以上前ということは、日本女子大学校を設立する以前からということになる。

成瀬が10年もの間思い描いていた理想とは、個人も社会も国家も宇宙も、全てが調和して統一していくという「帰一」の思想のことと考えられる。何故そう言えるのか。この書簡では、まだ帰一（Concordia）という用語は用いていないが、しかしその3年後に成瀬が訪米した際、次節で紹介するように再びバートンへ書簡を送り、アメリカでの帰一協会の広報活動に協力を求めていることからも、ここで成瀬が温めていた構想が帰一思想の原点となる思想であることは間違いないだろ

＜原文＞

Japan Women's University.
Tokyo, Japan.
August 26th. 1909.

My dear Dr. Burton;

Your kind letter, dated the 7th inst., reached me in due time; and I understood that you had been just as busy, even on ship-board, as ever. I, too, am very sorry that your address to our girls at Karuizawa, which I am sure will be greatly appreciated not only by our students but also by the other readers, can not appear in "Katei" our monthly, with the translation. However, by the September number, your message, "The noblest and and greatest mission of woman", in Japanese, will surely be carried to the educated girls in this Far East, with those pictures of that memorable occasion upon the hill at Karuizawa. I have sent a copy of the same to you with note.

I would like to thank you and Miss Burton for your kind visit. It did so much good to the girls; and I received many profitable suggestions from you during that interview. Truly, those religious and social questions, which we had talked in that after-noon, were in my mind more than ten years, but I did not and could not even dream that they might be solved satisfactorily during my life time. After hearing you speak of the present conditions of the United States, and the opinions of some of the leading men of world, however, I began to dare to encourage myself, that the time will come in near future, when my dreams and visions might be realized. Let us, then, hope for the great success of the noble and grand work, which we, though in countries apart, are always striving to accomplish.

Again, thanking you for your kindness, I remain

Sincerely yours,

J. Naruse

P.S. I have enclosed some picture-cards of our University.

＜翻訳＞

親愛なるバートン博士

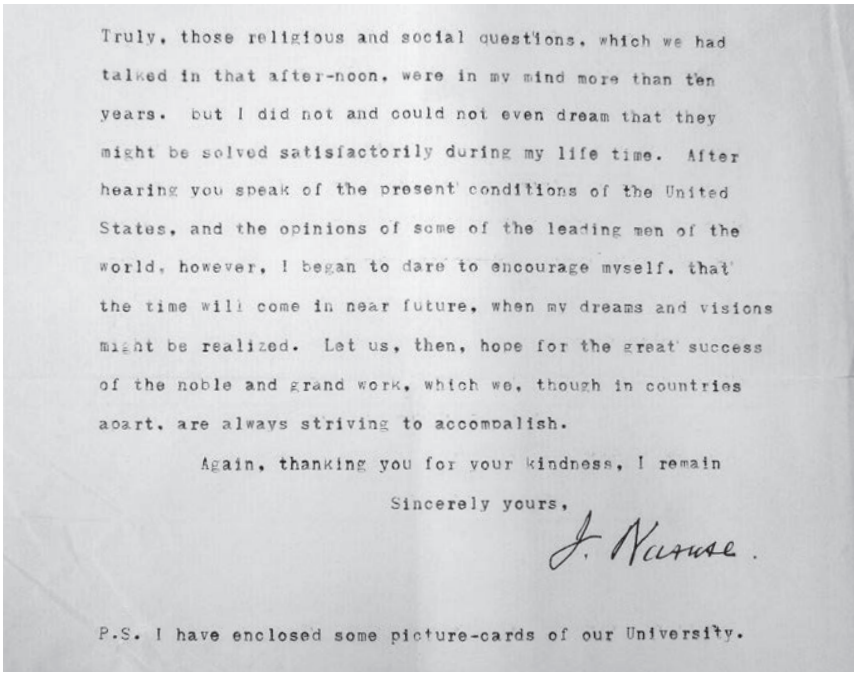
今月七日付のあなたからの親切な手紙を予定通り受け取りました。あなたが船上であっても普段と変わらないくらい忙しいことが分かりました。軽井沢での女学生たちへのあなたの講演記録、それを学生たちだけでなく、読者たちもとても

シカゴ大学東洋調査委員会(Oriental Investigation Commission)委員長に任命され、ジョン・D・ロックフェラー(John D. Rockefeller)の支援を受けて、「極東の教育的、社会的、宗教的実態」[2]や、「世界各地のYMCA会館の建設・・・拠点の調査」[3]のために日本、朝鮮、中国、インド、トルコを巡っていた。来日の際は明治学院総理井深梶之助らキリスト教学校指導者とも面会し、「教育上ノ事」(1909年7月9日付)「キリスト教大学ノ事」(同年7月14日付)について意見を交換したという[4]。次節で紹介する成瀬との面会は、その直後ということになる。

4. 1909年8月バートン宛成瀬書簡

では、いよいよ今回発見された史料の紹介と解説を試みたい。発見された史料のうち、最も古い史料は1909年8月25日付のバートン宛成瀬仁蔵の書簡である【写真1】。書簡はタイプライターで綴られている。この書簡から、成瀬が後に帰一思想を明確なものとして自覚していく上で、バートンとの出会いが非常に大きな意味を持っていたことが分かる。その全文を紹介したい。

【写真 1】



Truly, those religious and social questions, which we had talked in that after-noon, were in my mind more than ten years. but I did not and could not even dream that they might be solved satisfactorily during my life time. After hearing you speak of the present conditions of the United States, and the opinions of some of the leading men of the world, however, I began to dare to encourage myself, that the time will come in near future, when my dreams and visions might be realized. Let us, then, hope for the great success of the noble and grand work, which we, though in countries apart, are always striving to accomplish.

Again, thanking you for your kindness, I remain

Sincerely yours,

J. Naruse.

P.S. I have enclosed some picture-cards of our University.

所蔵:Special Collection Reserch Center, University of Chicago Library.

成瀬が具体化していく上で、バートンとの出会いは非常に大きい意味を持っていた。そこで、本稿では2回にわたってシカゴ大学所蔵成瀬史料を紹介し、その史料の価値について考えてみたいと思う。

2. 史料内容の分類

今回見つかった成瀬仁蔵史料には、シカゴ大学アーネスト・バートン教授（新約聖書学）への書簡や、1912年に日本で結成した「帰一協会」をアメリカで普及させるため、バートンがアメリカ各地に成瀬の活動を紹介し協力を仰ぐために送った書簡などが含まれている。シカゴ大学の史料を分類すると、以下のようになる。

①シカゴ大学バートン教授との往復書簡　1909年～1913年
②帰一協会に関する英文新聞の切抜き（複数あり）
③帰一協会趣意書　英文
④アメリカ帰一協会の趣旨説明文
⑤バートンと各大学関係者との往復書簡（イェール大学、コロンビア大学、ニューヨーク大学、ユニオン神学校の教員）　1912年

3. バートンについて

成瀬と往復書簡を交わしていたアーネスト・バートン（Ernest Dewitt Burton）について簡単に紹介したい。後にシカゴ大学学長も務めることになるバートンは、バプテスト派牧師の息子として1856年、オハイオ州グランヴィルに生まれた。1876年バプテスト派による地元のデニソン大学を卒業した後は、ロチェスターの神学校で学位を取得した。その後ロチェスターやボストンにあるバプテスト派のニュートン神学校（Newton Theological Seminary）で新約聖書時代の古代ギリシャ語を教え、1883年にはバプテスト派教職者としての任命を受けた経歴を持つ。宣教活動には強い関心を持っていた。

その後友人でもあったシカゴ大学学長ウィリアム・R・ハーパー（William Rainey Harper、在任期間1891年～1906年）の誘いで、1892年シカゴ大学新約聖書学科教授に就任した。1923年からはシカゴ大学学長も歴任しているが、在任期間中の1925年に逝去している。

バートン自身は聖書解釈においてリベラルな立場を取り、新約聖書の内容が歴史的事実かどうかについても進歩的で自由な立場を取っていた。聖書学における新しい潮流を大胆且つ確信を持って受け入れていた自由神学者であった[1)]。

また、バートンはYMCA（世界学生基督教連盟）総主事J・R・モット（John R. Mott）と共に、国際エキュメニカル運動の一翼を担っていた人物でもある。1908年

研究

シカゴ大学所蔵成瀬仁蔵史料について

― 帰一思想形成の新たな側面を探る（上）

辻　　直人

1. 新史料発見の経緯

今回紹介するのは、筆者がシカゴ大学図書館（Special Collection Reserch Center, University of Chicago Library）で史料調査中に発見した、成瀬仁蔵の新史料である。

筆者は2016年3月に、ある研究テーマの史料調査をするためシカゴ大学を訪れていた。その本来の調査が一段落した時点で、シカゴにはそう頻繁には来られないので、広い視野から日本に関連のある史料も見ておこうと、いくつかの史料の閲覧を申請したのだった。その中の1つに、「Japanese Women's University, 1909-1913」と名付けられたフォルダがあった。それは、いくつかのアジアの大学の名前が付いたフォルダ群の1つだった。恐らくアジアの教育事情を調べたのだろうと推測しつつも、1度中身を確認しようと請求してみた。出てきたものは、実は日本女子大学に直接関係するものではなく、成瀬がシカゴ大学バートン教授に個人的に送った書簡などであった。

その史料を閲覧した時は、ただ成瀬直筆の力強い筆跡に圧倒され、ものすごい熱意によってその書簡が書かれたことや、バートンに必死に思いを伝えようとしていることが感じられて、とても印象に残った。しかし、その時点ではまだ成瀬研究をしていたわけではなかったので、その史料にどれほどの価値があるのかはすぐには分からなかった。帰国後、成瀬研究をされている先生に尋ねたところ、その史料のことは全く知らないとおっしゃる。その後色々と調べてみると、本当に今回私が偶然閲覧した史料は、これまで全く知られていなかったもので、成瀬研究上大きな発見だったことが分かった。

特に、今回発見された史料は1912年に成瀬が渋沢栄一らと結成した「帰一協会」に関するものだった。成瀬が帰一思想（全ての宗教や文明などは一つに統合されていくという思想）を形成していく過程で、従来の研究ではシカゴ大学バートンとの関わりは全く知られていなかった。しかし、以下紹介するように、帰一思想を

二〇一六年度　展示の記録

●成瀬記念館（目白）

シリーズ〝天職に生きる〟成瀬記念講堂展

2016.4.21（木）～6.4（土）

豊明図書館兼講堂は、一九〇六（明治三九）年に、社会貢献事業団体森村豊明会の寄付により建設された。当初は図書館となる予定だったが、講堂と兼用されることになり、二階には書架と図書室が設けられた。

一九二三年の関東大震災では、赤煉瓦の外壁が大破。翌年四月には修復工事が完了したが、講堂専用の建物となり、このときより豊明講堂と呼ばれるようになる。

一九六一年には本学創立六〇周年記念事業として補修工事が行われ、これを機に成瀬記念講堂と名称を変更。一九七四年には文京区の有形文化財第一号に指定された。

現在は、二〇一五年の耐震診断の結果、大規模地震の際の安全性が確保されないとして使用が中止されている。本展では、現在見学することができない講堂の歴史を紹介した。

「女子大学校新築図」1905（明治38）年頃

軽井沢夏季寮の生活　三泉寮と広岡浅子展

（目白）
6.10（金）～8.4（木）
8/18.25.9/1（西生田）
5.31（火）～8.4（木）

軽井沢夏季寮について理解を深めるためのシリーズ展示。今回は、開寮当初から「名誉寮監」をつとめた広岡浅子に注目した。

夏季寮「三泉寮」は、一九〇六（明治三九）年、三井三郎助から寮舎の提供を受けたことにより始まる。この夏季寮設立に賛成し、開寮後とりわけ積極的に学生と交流したのが、三井家出身であり、本校創立発起人の一人でもあった広岡である。

『家庭週報』に掲載された成瀬と広岡の軽井沢での談話、学生との集合写真、成瀬宛の書簡などを通して、「母ある夏期寮」とも表現された三泉寮と広岡との関わりを紹介した。

開寮式兼閉寮式　1906（明治39）年8月27日

『家庭週報』第74号
1906（明治39）年8月25日

国際人教育の原点
―伝統の調理実習展

9.15(木)
～12.20(火)

本学の調理実習は、創立当初から渡辺鎌吉や赤堀峯吉・菊等による調理実習の授業が行われ、その後は手塚かねや大岡蔦枝、東佐誉子等卒業生の教員に受け継がれ、現在に至る。生徒たちが書き残した「料理ノート」には、クリスマス料理やお正月料理、中国料理等の作り方が美しいイラストとともに記されている。

本展では、「料理ノート」を紹介するとともに、食物学科飯田文子教授にご協力いただき、伝統のクリスマス料理を食品サンプルで再現した。また料理の様子を撮影し、DVDを制作し、展示期間中に上映した。

食物学科飯田教授と株式会社岩崎の繁藤氏と中田氏

～伝統のクリスマス料理～

フルーツジュースカクテル、扇形カナッペ、伊勢海老のパリ風、ローストチキン、レタスサラダ、プラムケーキ、ブッシュドノエル

展示した食品サンプル
（製作 株式会社 岩崎）

シリーズ〝創る〟（8）
庭を創る・庭を撮る―
槇島みどり・高橋美保二人展

2017.1.17(火)
～3.4(土)

造形芸術の分野で活躍する卒業生を紹介する展示シリーズ〝創る〟第八弾として、百年館低層棟屋上の庭園「泉フロートガーデン」の設計・植栽を手がけた槇島みどり氏（新二五理Ⅱ）と、この庭園に魅せられて写真を撮り続けている高橋美保氏（新一〇英）の二人展を開催した。槇島氏は設計者の立場から、設計のコンセプトや庭園の構成、植物選びに関する解説を交えながら、鑑賞のポイントや季節ごとの楽しみ方、植物の魅力が満載の写真を発表した。一方、高橋氏は鑑賞者の立場から、自身の心の動きに従い、植物がもっとも美しく、表情豊かに見える瞬間を切り取った作品を出品した。

「春の嵐」 高橋美保氏撮影

槇島みどり氏撮影

会期中、両氏による泉フロートガーデンのガイドツアーを開催し、延べ約七〇人が参加した。また同展の図録『時の庭』および泉フロートガーデン鑑賞の手引きとして三つ折パンフレットを制作した。

●西生田記念室

シリーズ〝天職に生きる〟成瀬文庫展

4.8(金)～5.20(金)

創立者成瀬仁蔵の生き方を様々な切り口から紹介するシリーズ展示。今回は「成瀬文庫」に焦点を当てた。

「成瀬文庫」とは、成瀬が収集した書籍の総称で、和書四八一冊、洋書一九一九冊に及ぶ。成瀬の没後、これらの蔵書は遺品と共に旧成瀬仁蔵住宅（現成瀬記念館分館）に保存されていたが、戦中には戦火を逃れ軽井沢へ、戦後も学内を転々することになった。

大橋了介　成瀬仁蔵先生宅―書斎　1924（大正13）年

本展ではその経緯を明らかにするとともに、成瀬の蔵書を辞書、旅行ガイドブック、家政学等の分野に分けて紹介した。

日本女子大学に学んだ児童文学者たち展

9.23(金)～12.20(火)

児童文学の創作・翻訳・研究に携わってきた本学ゆかりの文学者の経歴や、図書・原稿などを展示した。

本学から輩出された児童文学者の中からは、石井桃子、中村佐喜子、松田瓊子、いぬいとみこ、小薗江圭子、安房直子、あまんきみこを取り上げた。また、児童学科で一九五〇（昭和二五）年度から開講された「児童文学」の担当教授を中心に、与田準一、初山滋、山室静、安藤美紀夫（一郎）、森比左志（森久保仙太郎）、吉田新一、百々佑利子をご紹介した。

あまんきみこ『ちいちゃんのかげおくり』
あかね書房　2015年　あまんきみこ氏寄贈

日本女子大学のおひなさま展

2017.1.24(火)～3.3(金)

恒例となったおひなさま展では、本学の学寮や卒業生宅等で飾られていた明治・大正・昭和のひな人形を展示した。

今回は、本学卒業生で朱葉会や新制作協会を中心に活躍、本学非常勤講師として「絵画デッサン」の授業を担当する山口都氏が、豊明小学校二年生の頃に描いたひなまつりの絵を展示した。また昨年に引き続き、本学家政学部の卒業生で、附属中学校や高等学校で絵を教えた長田喜和のひな人形の絵も紹介した。

展示室の様子

二〇一六年度活動の記録

4・1　「新任職員の集い」参加者見学（成瀬記念講堂も）、主事他説明。目白新聞取材。ＮＨＫ取材
4・2　西生田記念室、大学入学式につき開室、見学者２０８名
4・8　展示オープン（西生田）
4・20　西生田記念室、創立記念式典につき開室、見学者29名
4・21　展示オープン（目白）
4・28　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）73名、教員5名見学、説明
5・2　附属中学校1年生墓参
5・8（日）「ホームカミングデー」につき平常通り開館、見学者３０７名
5・12　入学課から依頼の大学見学の中学生（1校）3名見学、説明
5・14（土）泉会定時総会につき延長開館、見学者１２７名
5・18『写真で見る成瀬仁蔵その生涯』5千部納品
5・19　日英協会の団体20名見学、説明
5・21　東京シティガイドクラブ研修のため来館、49名見学、説明
5・25　成瀬記念館分館の椅子調査
5・26　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）1名、教員1名見学、説明。オープンキャンパスの学生スタッフ30名見学
5・31　展示オープン（西生田）
6・2　日英協会の団体20名見学、説明
6・4　入学課から依頼の大学見学の中・高生（1校）5名見学
6・12（日）「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者３３１名
6・14　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）30名、教員2名見学、説明
6・15　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）7名、教員1名見学、説明
6・17　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）29名、教員2名見学、説明。文京ミューズネット全体会議出席（杉崎）
6・18（土）西生田記念室、附属中学校オープンスクールのため特別開室、見学者26名
6・24　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）31名、教員2名見学、説明
6・25　入学課から依頼の大学見学のＰＴＡ（1校）59名見学
6・28　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）19名、教員2名見学、説明
6・29　入学課から依頼の大学見学のＰＴＡ（1校）38名見学、説明
7・7　入学課から依頼の大学見学の高校生（2校）63名見学、説明
7・11　入学課から依頼の大学見学の高校生（2校）１１１名、教員5名見学、説明。『成瀬記念館２０１６　№31』（2千部）納品
7・12　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）44名、教員2名見学、説明。成瀬記念館運営委員会（本年度第1回）
7・14　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）21名、教員1名見学、説明
7・21　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）14名、教員1名見学、説明
8・5　本年度当館受入れ予定の博物館実習生4名と事前打合せ
8・6（土）「オープンキャンパス」のため延長開館、見学者５５０名
8・7（日）西生田記念室、「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者２０５名。「キャンパス見学ツアー」参加者に

説明
8・19　消防点検（講堂地下倉庫も）
8・25　成瀬記念館分館、上棟式。「～歌仙兼定と行く～目白台・関口の雅を巡るスタンプラリー」に協力（9／18まで）
8・30～9・6　博物館実習（日本文学科1名　史学科2名　社会福祉学科1名）
9・10（土）附属豊明幼稚園入園志願者説明会・附属中高説明会につき臨時開館、見学者648名
9・12　展示のため国立公文書館に資料貸出（10／17返却）
9・15　展示オープン（目白）
9・18（日）「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者535名
9・27　展示オープン（西生田）
9・29　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）41名見学、説明
10・4　入学課から依頼の大学見学の高校生（2校）124名見学、説明
10・6　附属中学校PTA「目白キャンパスめぐり」の下見のため17名見学、説明
10・6～8　全国大学史資料協議会2016年度総会ならびに全国研究会に参加（杉崎、於広島）
10・7　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）2名見学、説明
10・8（土）～9日（日）西生田記念室、十月祭につき特別開室、見学者合計51名
10・11　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）19名、教員1名見学、説明
10・12　Preservation Technologies Japan脱酸性化のため資料点検作業
10・13　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）6名見学
10・14　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）41名見学
10・15（土）～16（日）目白祭につき平常通り開館、見学者合計829名。西生田記念室、日女祭につき平常通り開室、見学者合計70名
10・17　燻蒸のため資料搬出（10／21終了、搬入）
10・18　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）10名、教員1名見学、説明
10・19　入学課から依頼の大学見学の高校生（2校）43名見学、説明。附属中学校PTA「目白キャンパスめぐり」のため57名見学
10・20　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）43名見学、説明
10・21　入学課から依頼の大学見学の高校生（3校）106名、教員4名、OG2名見学、説明。同志社大学校友会28名見学、説明
10・22（土）桜楓会支部長会のため延長開館、見学者31名
10・25　入学課から依頼の大学見学の高校生（2校）35名、教員3名見学、説明。Preservation Technologies Japan脱酸性化のため資料搬出作業（12／13返却）
10・27　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）33名、教員2名見学、説明。会議室にて日本文学科主催による展示開催（10／29まで）
10・29（土）～30（日）西生田記念室、もみじ祭につき特別開室、見学者合計61名
10・31　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）10名、教員1名見学、説明
11・9～11　全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会に参加（杉崎　於三重）
11・10　防火訓練
10・12　優良防火対象建物表彰状受取り。西生田記念室、附属高等学校説明会のため特別開室、見学者8名

11・14　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）8名見学、説明
11・15　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）9名、教員1名見学、説明
11・16　東京新聞取材
11・18　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）2名見学、説明
11・19　アフガニスタン女子高校生3名見学。西生田記念室、附属中学校説明会のため特別開室、見学者6名
11・25　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）75名、教員5名見学、説明。深谷市渋沢栄一記念館のツアー85名見学、説明
11・29　入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）8名、教員1名見学、説明
12・1　全国大学史資料協議会東日本部会研究会に参加（岸本・杉崎、於印刷博物館）
12・10（土）「入試相談会」のため延長開館、見学者103名
12・12　西生田講堂運用委員会に出席（岸本）
12・15　文京ミューズフェスタ2016（於　文京シビックセンター）に参加
12・19『墓参のしおり』2千部納品
12・20　東京修復保存センター、修復のため資料搬出（2／24返却）
1・6　槇島みどり・高橋美保『時の庭』（1千5百部）納品
1・17　展示オープン（目白）
1・18　韓国国立安東大学教授他6名来館、広岡浅子について聞き取り
1・21　目白台図書館知層発掘講座XⅢにて講演（岸本）
1・24　展示オープン（西生田）
1・25「泉フロートガーデン」見学会
1・26「泉フロートガーデン」見学会。全国大学史資料協議会東日本部会研究会に参加（杉崎、於東洋大学）
1・28　成瀬先生告別講演記念瞑想会のため延長開館、見学者21名。西生田記念室、附属豊明小学校音楽会（於　西生田成瀬講堂）につき特別開室、見学者37名
2・1～3　入試期間中11時より14時の間、受験生付添者見学につき特別開館、見学者合計59名
2・8「泉フロートガーデン」見学会
2・9「泉フロートガーデン」見学会
2・14「泉フロートガーデン」見学会
2・15「泉フロートガーデン」見学会
2・18　西生田記念室、附属中学校新入生保護者会のため特別開館、見学者7名
2・24　消防点検
3・3『実践倫理講話筆記　明治44年度ノ部』『実践倫理講話筆記　明治42年度ノ部　補遺』各百部納品
3・4　創立者命日につき特別開館、見学者64名
3・8『写真で見る西生田キャンパスの歴史』2千部納品
3・20（祝）西生田記念室、大学卒業式のため特別開室、見学者124名
3・25（土）「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者150名
3・29　展示のため大同生命に資料貸出（7月返却予定）

二〇一六年度の成瀬記念館運営委員

佐藤和人館長（学長）、住澤博紀家政学部長、高野晴代文学部長／成瀬記念館担当理事、山田忠彰人間社会学部長、浅岡守夫理学部長、定行まり子家政学部通信教育課程長、小川賀代教養特別講義1委員会委員長、石黒亮輔教養特別講義2委

員会委員長、臼杵 陽図書館長、三神和子総合研究所所長、大沢真知子現代女性キャリア研究所所長、坂本清恵生涯学習センター所長、小山聡子附属中高担当理事（副学長）大場昌子附属幼小担当理事（副学長）、蟻川芳子桜楓会理事長、吉良芳恵成瀬記念館主事

二〇一六年度成瀬記念館構成メンバー

館長・佐藤和人、主事・吉良芳恵、館員・岸本美香子（主任）、杉崎友美、非常勤・稲田真衣子（～6月）・大門泰子、大橋有希子、加藤きよみ、木口智子（7月～）、永山由里絵、宮内量子、山本文子

博物館実習

2016年度の博物館実習（第27回）は、8月30日（火）から9月6日（火）までの6日間の日程で行った。実習生は日本文学科1名、史学科2名、社会福祉学科1名。

実習生は、雑司ヶ谷霊園や雑司が谷旧宣教師館をめぐり地域の歴史を学ぶとともに、企画展「国際人教育の原点―伝統の調理実習」展の準備に参加した。本学で料理を教えた教員を紹介する解説パネルを一人一枚作成し、完成したパネルを展示した。

このほか、西生田記念室の企画展「日本女子大学に学んだ児童文学者たち」展において、展示作業等の学芸員の基本的な業務を体験した。

業務統計

開館日数	目白	175日
	西生田	146日
入館者数	目白	約11250人
	西生田	約2100人

資料提供

学園史関係質問受付および資料提供　95件

出版・映像のための資料提供（広報課扱い含む）　42件

その他

○『成瀬記念館2016　№31』の発行　2千部

○成瀬記念館展示のご案内（2016年度）の制作　3千部

○槇島みどり・高橋美保『時の庭』の発行　1千5百部

○『実践倫理講話筆記　明治44年度ノ部』『実践倫理講話筆記　明治42年度ノ部補遺』各100部納品

○『写真で見る 成瀬仁蔵その生涯』の増刷　5千部

○『写真で見る西生田キャンパスの歴史』の増刷　2千部

○『墓参のしおり』の増刷　2千部

○DVD『国際人教育の原点―伝統の調理実習』制作

○DVD『大もみの木の下で』制作

○博物館実習生受入れ（4名）

○研修等参加（研究会：全国大学史資料協議会2016年度総会ならびに全国研究会、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会および研修会に参加　その他：文京ミューズネット、展示見学など）

○資料の収集・整理・保存・媒体変換

二〇一六年度展示一覧

〔成瀬記念館〕

4・21～6・4
シリーズ「天職に生きる」
―成瀬記念講堂展

6・10～8・4、18・25、9・1
軽井沢夏季寮の生活
―三泉寮と広岡浅子

9・15～12・20
国際人教育の原点―伝統の調理実習

1・17～3・4
シリーズ〝創る〟（8）庭を創る・庭を撮る―槇島みどり・高橋美保二人展

〔西生田記念室〕

4・8～5・20
シリーズ「天職に生きる」
―成瀬文庫展

5・31～8・4
軽井沢夏季寮の生活
―三泉寮と広岡浅子

9・23～12・20
日本女子大学に学んだ児童文学者たち展

1・24～3・3
日本女子大学のおひなさま展

■成瀬記念館より

本年度より成瀬記念館主事を仰せつかりました文学部史学科の古川です。伝統ある記念館の一員として、運営に尽力したいと思います。よろしくご叱正の程、お願い申し上げます。

これまでも一観覧者として毎回の展示を楽しみにしてきました。展示資料に通底しているのは、当時の学生のノートの見事さ。浄書されたものもあるとはいえ、万年筆で誤字脱字もなく綴られている紙面からは、記主の真摯な姿勢と講義に対する思いが伝わります。

ノートを目にして、今を生きる学生はどのように感じるのでしょうか。先人との対話の場が大学構内にあることは幸せです。資料の閲覧がより身近になったら、というのは自身に課された課題でもあります。

私学には建学の精神があり、時代を超えて受け継がれるべきその精神は記念館で資料というかたちで守られています。記念館を教職員のみならず、女子大で学ぶ皆さんに知っていただくための工夫づくりにも努力したいと思っています。（古川）

成瀬記念館の一階奥、旧女子教育研究所跡に現代女性キャリア研究所が移転して八年。そこは大学アーカイブズの拠点とすべく準備を進めていた場所だった。二年がかり、総額一一〇万円を投じた移動書架は、僅か三年の使用で撤去を余儀なくされた。今、館内には資料を閲覧する場所も来客と面談する場所もない。（岸本）

秋に開催した「国際人教育の原点―伝統の調理実習展」では、初の試みでクリスマス料理の食品サンプルを展示した。食品サンプルの制作会社を合羽橋に訪ねたり、サンプルの値段に驚いたり、サンプル用の料理制作を見学したりと、苦労もあったが楽しい体験だった。これからも、いろいろな新しいことに挑戦していきたい。（杉崎）

擦り減った赤いカーペットに昨年度の「広岡浅子展」の名残を感じながら、「軽井沢夏季寮の生活―三泉寮と広岡浅子展」を準備した。広岡の資料がたくさん見られるという来館者からの期待を意識する一方、『家庭週報』等の見た目は地味な史料から見えて来た、学生と交流する三泉寮での広岡の姿を紹介した。（永山）

成瀬記念館　2017　No. 32

二〇一七年七月一〇日

編集・発行
日本女子大学成瀬記念館
〒112―8681
東京都文京区目白台二―八―一
電　話（〇三）五九八一―三三七六
FAX（〇三）五九八一―三三七八

印刷　開成出版株式会社
〒101―0052
東京都千代田区神田小川町
三―二六―一四

※無断転載、複製はご遠慮ください

日本女子大学
成瀬記念館